茨城県教育財団文化財調査報告第473集

鉾田市

大谷川遺跡
天神山古墳群

主要地方道大洗友部線バイパス整備
事業地内埋蔵文化財調査報告書2

令和6年3月

茨城県鉾田工事事務所
公益財団法人茨城県教育財団

第473集

鉾田市大谷川遺跡　天神山古墳群

公益財団法人茨城県教育財団

茨城県教育財団文化財調査報告第473集

鉾田市

大谷川遺跡
天神山古墳群

主要地方道大洗友部線バイパス整備
事業地内埋蔵文化財調査報告書2

令和6年3月

茨城県鉾田工事事務所
公益財団法人茨城県教育財団

序

公益財団法人茨城県教育財団は、国や県など各事業者からの委託を受けて埋蔵文化財の調査と整理作業を実施する組織として、昭和52年に調査課を設置して以来、数多くの遺跡の調査を実施し、その成果として調査報告書を刊行してきました。

この度、茨城県鉾田工事事務所による主要地方道大洗友部線バイパス整備事業に伴って実施した、鉾田市大谷川遺跡・天神山古墳群の調査報告書を刊行する運びとなりました。

今回の調査によって、北陸地方など他地域の特徴をもつ土器が出土した古墳時代前期の集落跡や後期の古墳などが確認でき、鉾田市箕輪地区における当該時代の様相の一端が明らかになりました。

本書が、歴史研究の学術資料としてはもとより、郷土の歴史に対する理解を深め、教育・文化の向上のための資料として、広く活用いただければ幸いです。

最後になりますが、調査から本書の刊行に至るまで、多大な御協力を賜りました委託者であります茨城県鉾田工事事務所に対し、厚く御礼申し上げますとともに、茨城県教育委員会、鉾田市教育委員会をはじめ、御指導、御協力をいただきました関係各位に対し、心から感謝申し上げます。

令和６年３月

公益財団法人茨城県教育財団
理事長　川股圭之

例　　言

1　本書は、茨城県鉾田工事事務所の委託により、公益財団法人茨城県教育財団が令和２年度に調査を実施した、茨城県鉾田市箕輪字大谷川 1684 番地２ほかに所在する大谷川（おおやがわ）遺跡・天神山（てんじんやま）古墳群の調査報告書である。

2　調査期間と整理期間は以下のとおりである。

調査　令和２年 10 月１日～令和３年３月 31 日

整理　令和５年 12 月１日～令和６年３月 31 日

3　調査は、調査課長酒井雄一のもと、以下の者が担当した。

首席調査員兼班長　櫻井完介

調　査　員　天野早苗

嘱託調査員　荒井保雄　令和２年 10 月１日～令和３年２月 28 日

調　査　員　樫村宣行　令和３年３月１日～３月 31 日

4　整理と本書の執筆・編集は、整理課長本橋弘巳のもと、嘱託調査員池田晃一が担当した。

5　本書の作成にあたり、古墳時代前期の竪穴建物跡から出土した北陸系土器については、福井県教育庁埋蔵文化財調査センターの赤澤徳明氏と新潟県教育庁文化行政課の滝沢規朗氏、公益財団法人石川県埋蔵文化財センターの安中哲徳氏、第５号墳主体部から出土した石材については、東邦大学訪問研究員の矢野徳也氏に御指導いただいた。また、大谷川遺跡から出土した炭化材のＡＭＳ年代測定と樹種同定、ロームの自然科学分析については、パリノ・サーヴェイ株式会社に委託した。

6　当遺跡の出土遺物と実測図・写真などは、茨城県埋蔵文化財センターで保管している。

凡　　例

1　当遺跡の地区設定は、日本平面直角座標第Ⅸ系座標に準拠し、X＝＋29,880ｍ、Y＝＋61,680ｍの交点を基準点（Ａ１a1）とした。なお、この原点は、世界測地系（測地成果2011）による基準点である。

この基準点を基に遺跡範囲内を東西・南北各々40ｍ四方の大調査区に分割し、さらに、この大調査区を東西・南北に各々10等分し、４ｍ四方の小調査区を設定した。

大調査区の名称は、アルファベットと算用数字を用い、北から南へＡ、Ｂ、Ｃ…、西から東へ１、２、３…とし、「Ａ１区」のように呼称した。さらに小調査区は、北から南へa、b、c…j、西から東へ1、2、3…0と小文字を付し、名称は、大調査区の名称を冠して「Ａ１a1区」のように呼称した。

2　実測図、遺構・遺物一覧表などで使用した記号は、次のとおりである。

遺構　　SD－溝跡　SK－土坑　SI－竪穴建物跡　TP－陥し穴　TM－古墳

土層　　Ｋ－撹乱

3　遺構・遺物実測図の作成方法については、次のとおりである。

(1) 遺構全体図は400分の１、各遺構の実測図は、原則として60分の１の縮尺とした。種類や大きさにより異なる場合は、個々に縮尺をスケールで表示した。

(2) 遺物実測図は、原則として３分の１の縮尺とした。種類や大きさにより異なる場合は、個々に縮尺をスケールで表示した。

(3) 遺構・遺物実測図中の表示は、次のとおりである。

焼土・赤彩　　炉　　須恵器断面・石器損傷範囲

●　土器　　○　土製品　　□　石器　　△　金属製品　　－－－－　硬化面

4　土層解説と遺物における色調の判定は、『新版標準土色帖』（小山正忠・竹原秀雄編著　日本色研事業株式会社）を使用した。また、土層解説中の含有物の量、粘性・締まりの表示は、次のとおりである。

ローム－ロームブロック　焼土－焼土ブロック　粘土－粘土ブロック

Ａ－多量　　Ｂ－中量　　Ｃ－少量　　Ｄ－微量　　○’－極めて

サイズは「大・中・小・粒」で、炭化物については「材・物・粒」で表記した。

粘－粘性　締－締まり

Ａ－強い　　Ｂ－普通　　Ｃ－弱い　　○’－極めて

5　遺構・遺物一覧の表記は、次のとおりである。

(1) 計測値の単位はｍ、㎝、ｇで示した。なお、現存値は（　）を、推定値は［　］を付して示した。

(2) 遺物番号は遺構ごとの通し番号とし、本文、挿図、挿表、写真図版に記した番号と同一とした。

(3) 遺物一覧の備考欄は、残存率、写真図版番号とその他必要と思われる事項を記した。

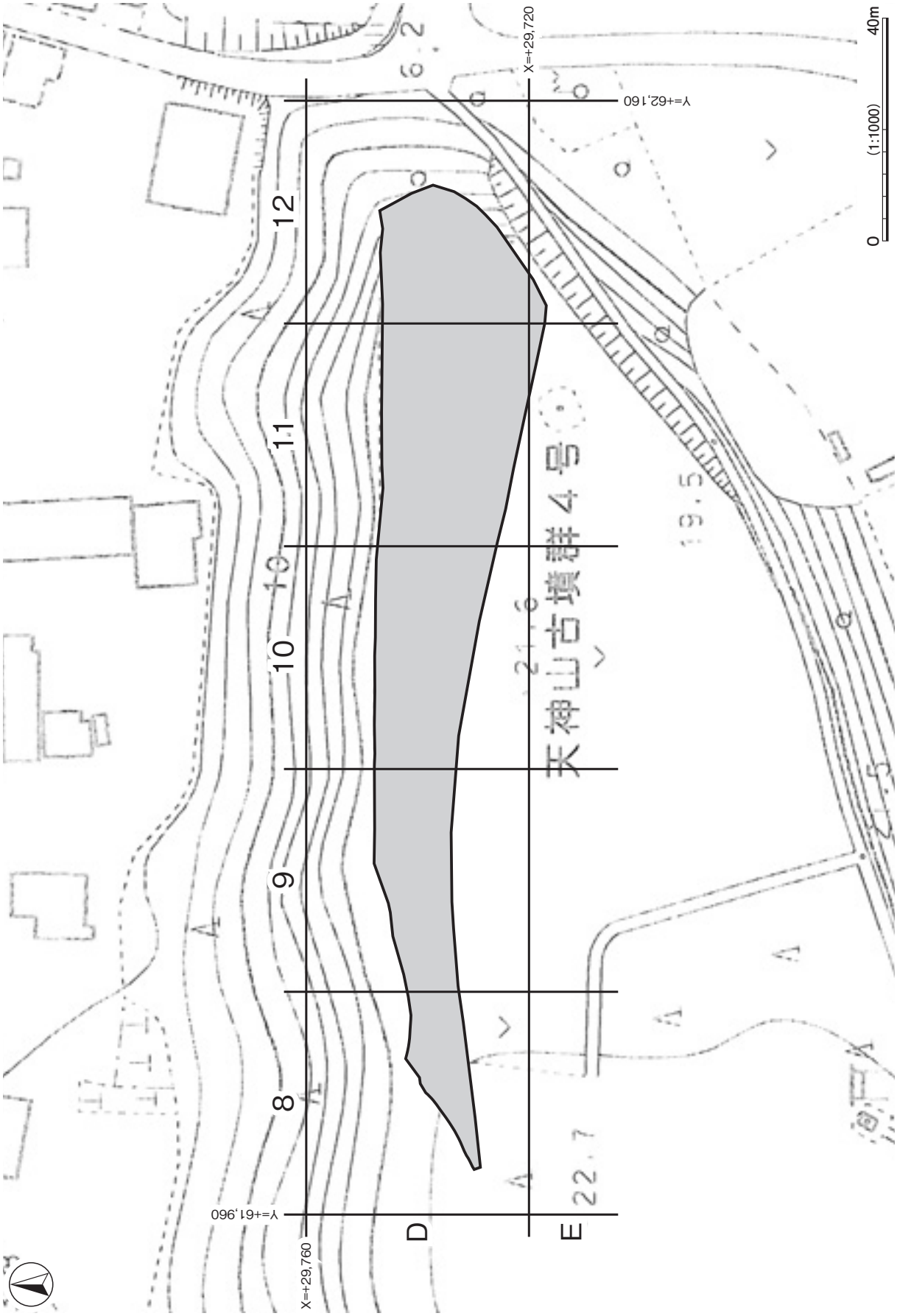
6　竪穴建物の「主軸」は、炉を通る軸線とし、主軸方向は、その他の遺構の長軸（径）方向とともに、座標北からみて、どの方向にどれだけ振れているかを角度で表示した（例　Ｎ－10°－Ｅ）。

7　整理の段階で遺構名を変更したものは、以下のとおりである。

変更　SK21→第１号竪穴遺構

目　　次

序
例　言
凡　例
目　次
第１章　調査経緯 …… 1
　第１節　調査に至る経緯 …… 1
　第２節　調査経過 …… 1
第２章　位置と環境 …… 2
　第１節　位置と地形 …… 2
　第２節　歴史的環境 …… 2
第３章　調査の成果 …… 7
　第１節　調査の概要 …… 7
　第２節　基本層序 …… 7
　第３節　遺構と遺物 …… 8
　　１　旧石器時代の遺構と遺物 …… 8
　　石器集中地点 …… 8
　　２　縄文時代の遺構と遺物 …… 18
　　陥し穴 …… 18
　　３　古墳時代の遺構と遺物 …… 18
　　(1) 竪穴建物跡 …… 18
　　(2) 竪穴遺構 …… 35
　　(3) 土　坑 …… 36
　　(4) 古　墳 …… 42
　　４　時期不明の遺構と遺物 …… 49
　　(1) 土　坑 …… 49
　　(2) 溝　跡 …… 53
　　(3) 遺構外出土遺物 …… 54
　第４節　総　括 …… 57
付　章　　自然科学分析 …… 62
写真図版 …… PL 1 ～ PL12
抄　録



大谷川遺跡・天神山古墳群調査区設定図（鉾田市都市計画図 2,500 分の 1 に加筆）

第１章　調　査　経　緯

第１節　調査に至る経緯

令和元年５月 20 日、茨城県鉾田工事事務所長は、茨城県教育委員会教育長あてに主要地方道大洗友部線バイパス整備事業地内における埋蔵文化財の所在の有無とその取扱いについて照会した。これを受けて、茨城県教育委員会は令和元年６月 13 日に現地踏査を、令和元年 12 月 25 日、令和２年２月 10 日・13 日、４月８日・９日・21 日・22 日に試掘調査を実施し、遺跡の所在を確認した。令和２年５月 27 日、茨城県教育委員会教育長は茨城県鉾田工事事務所長あてに、事業地内に大谷川遺跡・天神山古墳群が所在することと、その取扱いについて別途協議が必要であることを回答した。

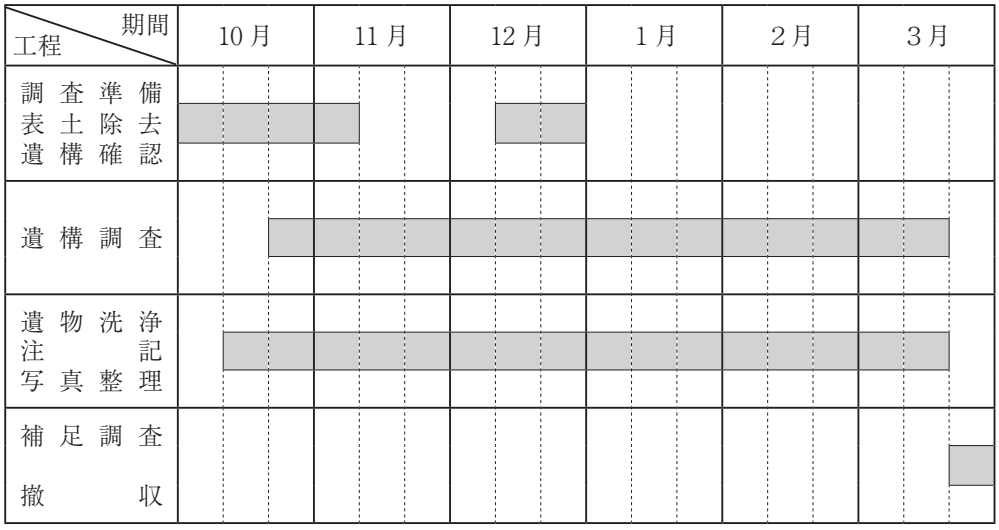
令和２年８月 11 日、茨城県鉾田工事事務所長は、茨城県教育委員会教育長あてに文化財保護法第 94 条に基づく土木工事の通知を提出した。令和２年８月 13 日、茨城県教育委員会教育長は、茨城県鉾田工事事務所長あてに現状保存が困難であることから、記録保存のための発掘調査が必要であると決定し、工事着手前に発掘調査を実施するよう通知した。

令和２年８月 17 日、茨城県鉾田工事事務所長は、茨城県教育委員会教育長あてに主要地方道大洗友部線バイパス整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査の実施について協議書を提出した。令和２年８月 18 日、茨城県教育委員会教育長は、茨城県鉾田工事事務所長あてに大谷川遺跡・天神山古墳群について、発掘調査の範囲と、その面積などについて回答し、併せて調査機関として公益財団法人茨城県教育財団を紹介した。

公益財団法人茨城県教育財団は、茨城県鉾田工事事務所長から埋蔵文化財発掘調査事業について委託を受け、令和２年 10 月１日から令和３年３月 31 日まで調査を実施した。

第２節　調　査　経　過

大谷川遺跡と天神山古墳群の調査は、令和２年 10 月１日から令和３年３月 31 日までの６か月間にわたって実施した。以下、その概要を表で記載する。



第2章　位　置　と　環　境

第1節　位 置 と 地 形

大谷川遺跡〈①〉と天神山古墳群〈②〉は、茨城県鉾田市箕輪字大谷川1684番地２ほかに所在しており、大谷川遺跡の範囲内に天神山古墳群がある。

鉾田市は、平成17年に鹿島郡旭村、同郡鉾田町、同郡大洋村の３町村の合併により誕生した市で、茨城県南東部に位置している。市の地形は、東は鹿島灘に面し、北は涸沼、西は巴川、北浦に接しており、市域の大部分は平坦な鹿島台地である。鹿島台地は、大洗町南部から鹿嶋市に分布する台地で、東西は狭く南南東へ細長く延びている。標高は30～40ｍで北から南、西から東に向かってしだいに高くなっている[1)]。東の太平洋側は急傾斜の海食崖で比較的単調であるが、北側と西側は涸沼や北浦に注ぐ河川とその支流による浸食谷が樹枝状に発達し、台地縁辺は鋸歯状の複雑な形状をしている[2)]。地質的には、鹿島台地は第四紀完新世に堆積し、成田層と呼ばれる砂層が基盤となり、その上部に粘土・砂・砂礫からなる見和層、火山灰質粘土層である常総粘土層、さらに関東ローム層が堆積している。ローム層は武蔵野層、立川層に相当し、ローム層中に鹿沼軽石層が堆積している[3)]。

当遺跡は、旧旭村の北端部に位置し、鹿島台地を北流する大谷川が涸沼に流れ込む地点の西側台地上にある。遺跡が立地する台地は大谷川と涸沼の低地部に舌状に突出しており、北に涸沼、東から南に大谷川の低地を望むことができる。舌状台地の南側は過去の土砂採取によって大きく改変を受けている。標高は約20ｍで、低地との比高は約16ｍである。遺跡の調査前の現況は、山林と畑地である。

第2節　歴 史 的 環 境

大谷川遺跡と天神山古墳群は、前述のとおり旧旭村の北端部に位置しており、大洗町と茨城町との境界付近にある。ここでは、大谷川の東西両岸に広がる旧旭村を中心に涸沼川東岸の大洗町、涸沼・涸沼川の南北両岸に広がる茨城町の事例を含めて各時代の様相を概観する。

旧石器時代の遺跡は、旧旭村で７か所、大洗町で４か所、茨城町で15か所が確認されている。周辺では、大谷川の東岸台地上に位置する北山遺跡〈31〉で後世の遺構覆土から槍先形尖頭器が出土している[4)]。また、前野遺跡、小和峰Ｂ遺跡、田道遺跡などでナイフ形石器や細石刃核が採集されている。茨城町では涸沼南岸に位置する向地南遺跡で槍先形尖頭器が採集されているほか、涸沼川支流の涸沼前川の河岸段丘上には、大畑遺跡、大戸富士山遺跡、羽黒山遺跡がある。大畑遺跡では、瑪瑙製ナイフ形石器などを主体とした石器集中地点１か所[5)]、大戸富士山遺跡でも瑪瑙製ナイフ形石器などを主体とした石器集中地点４か所、羽黒山遺跡では、細石刃とナイフ形石器などを主体とした石器集中地点３か所が確認されている[6)]。いずれの遺跡も涸沼川流域の河岸段丘上に立地しており、流域の台地縁辺部が活発に利用されていたことを窺わせる。

縄文時代になると、旧旭村では草創期から晩期の遺跡が329か所確認されている。草創期の遺跡数は17か所、早・前期と遺跡数は倍増し、中期には229か所とピークを迎える。後期になると遺跡数は減少し、晩期はわずか５か所と激減する。その中で八日山遺跡〈44〉では、前期とみられるヤマトシジミを主とする小規模な貝塚が確認されており、集落跡の存在が推定されている。茨城町の小堤貝塚や大洗町の大貫落神南貝塚、大貫落神

北貝塚では、貝類と共に海洋性の魚骨、漁労具などが出土しており、漁労活動が盛んに行われていたことを物語っている。

弥生時代の涸沼川・那珂川下流域は、県内でも遺跡が多数確認されている地域である。旧旭村で 28 か所、大洗町で 57 か所、茨城町で 46 か所が確認されている。中期の遺跡は少なく、大谷川東岸の浜山 B 遺跡や涸沼川東岸の大洗町旧陣屋遺跡〈７〉などである。浜山 B 遺跡では、中期後半の足洗式期とみられる土器棺墓や炉跡が確認されている[7)]。後期の遺跡は大幅に増加し、大谷川東岸の北山遺跡で集落跡が確認されている[8)]。また、明烏舞山遺跡〈53〉、日明田 B 遺跡、造谷遺跡、上ノ台遺跡などの遺跡も確認されている。大洗町では 100 棟以上の竪穴建物跡が確認された髭釜遺跡をはじめ、南藤太郎遺跡〈３〉、旧陣屋遺跡、ヨナ川遺跡〈10〉、皿沼遺跡〈27〉、一本松遺跡などで集落跡が確認されている。一本松遺跡の竪穴建物跡からは、十王台式土器と共に巴形銅器が出土している[9)]。また、茨城町の綱山遺跡とその周辺遺跡では、十王台式土器と土師器が共伴した例があり、古墳文化の受容のあり方や集落の移動が考察されている[10)]。このように涸沼川・那珂川下流域は、茨城県における弥生時代から古墳時代への移行期の遺跡が数多く存在する地域として注目されている。

古墳時代の遺跡は、前期では大谷川東岸で下太田遺跡〈35〉、日明田 B 遺跡、小和峰 A 遺跡、町田原遺跡、山ノ崎 C 遺跡で土器が採集されているが、大谷川西岸では、当遺跡の 2.4km 西に所在する大岑遺跡で土器が採集されている程度である。大洗町では千天遺跡、長峰遺跡、常福寺遺跡、落神遺跡で、茨城町内では涸沼川北岸の南小割遺跡で集落跡が調査されている[11)]。中期では大谷川東岸で下太田遺跡、上太田遺跡、日明田 B 遺跡、小和峰 A 遺跡で土器が採集されている。大谷川西岸でも、当遺跡と仙神上 A 遺跡〈59〉がある。また、大洗町の落神遺跡、登城遺跡、ヨナ川遺跡で集落跡が調査されている。後期では大谷川東岸の北山遺跡、大谷川西岸の天神道 B 遺跡〈55〉、大平遺跡〈75〉、大洗町のおんだし遺跡〈22〉、常福寺遺跡、登城遺跡、ヨナ川遺跡で集落跡が調査されている。古墳は、涸沼川東岸で全長 101 m の前方後円墳である日下ヶ塚（常陸鏡塚）古墳を含む前期から中期初頭の古墳６基からなる国史跡の磯浜古墳群がある。大谷川東岸の浜山古墳群は、中期の方墳２基であることが確認されている[12)]。そのほか、涸沼東岸には旧陣屋古墳〈８〉、椎木古墳〈12〉、神ノ下古墳、宮久保古墳、下宿古墳、大谷川東岸には下太田古墳群〈38〉、上ノ台古墳、梶又古墳群など、大谷川西岸では、当古墳群と和田台古墳〈79〉、田崎古墳群などが確認されている。当古墳群は、前方後円墳１基と円墳 14 基からなる古墳群である。第４号墳は昭和 57 年に調査が実施され、埋葬施設が横穴式石室で、内部から直刀、鉄鏃、轡・咬具・辻・イモ貝の殻頂部を利用した雲珠などの馬具が出土し、６世紀後半の築造と考えられている[13)]。また、第１号墳は測量調査が実施され、径 18 m の円墳であることが確認されている[14)]。

奈良・平安時代になると、大谷川流域と涸沼川東岸の大洗町・成田町の一帯は、鹿島郡大屋郷に比定されている（『新編常陸国誌』）。北山遺跡、大平遺跡、千天遺跡、ヨナ川遺跡、皿沼遺跡、おんだし遺跡で集落跡が調査されており、千天遺跡からは「大屋厨」と墨書された土器が出土している[15)]。また、七日原 A 遺跡〈49〉、高岡前遺跡〈60〉、下太田遺跡などでも土器が採集されている。

鎌倉時代になると、当地は常陸平氏流の鹿島成幹の孫家系である宮崎氏の支配下に、室町時代には烟田氏、江戸氏、佐竹氏一族の東義久の支配下に入ったが、江戸時代には大部分が旗本領となっている。中・近世の遺跡としては、小館跡〈16〉、大館跡〈18〉、下太田館跡〈34〉、天神山館跡〈57〉などの城館跡、新田前塚〈39〉などの塚が確認されている。

第１図　大谷川遺跡・天神山古墳群周辺遺跡分布図（国土地理院 25,000 分の１「磯浜」「徳宿」）

註

１）　茨城新聞社編『茨城県大百科事典』茨城新聞社　1981 年 10 月

２）「角川日本地名大辞典」編纂委員会編『角川地名大辞典 8 茨城県』角川書店　1983 年 12 月

３）　日本の地質「関東地方」編集委員会編『日本の地質 3 関東地方』共立出版　1986 年 10 月

４）　井上義安『北山遺跡　定使面遺跡』旭村埋蔵文化財発掘調査会　1994 年７月

５）　長谷川聡「北関東自動車道（友部～水戸）建設事業地内埋蔵文化財調査報告書　大作遺跡　大畑遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第 136 集　1998 年３月

６）　小室弘毅ほか「やさしさのまち「桜の郷」整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告書Ⅶ　羽黒山遺跡　大戸富士山遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第 279 集　2007 年３月

７）　黒沢春彦ほか『浜山古墳群発掘調査報告書－１号墳・２号墳－』旭村教育委員会・浜山古墳群発掘調査会 1988 年３月

８）　４）と同じ

９）　井上義安『一本松遺跡』一本松埋蔵文化財発掘調査会　2001 年３月

10）　荒蒔克一郎ほか「やさしさのまち「桜の郷」整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告書Ⅵ　綱山遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第 243 集　2005 年３月

第１表　大谷川遺跡・天神山古墳群周辺遺跡一覧

番号	遺跡名	時代						
		旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良・平安	鎌倉～桃山	江戸
①	大谷川遺跡	○	○	○	○	○		
②	天神山古墳群				○			
3	南藤太郎遺跡		○	○	○	○		
4	日中内遺跡		○	○		○	○	
5	大峯遺跡			○	○	○		
6	與吾遺跡		○	○	○			
7	旧陣屋遺跡			○	○		○	○
8	旧陣屋古墳				○			
9	松川陣屋跡							○
10	ヨナ川遺跡		○	○	○	○	○	
11	椎木下遺跡		○	○	○	○		
12	椎木古墳				○			
13	居尻遺跡		○	○	○	○		
14	成田塙遺跡		○	○		○	○	
15	エモデ遺跡					○		
16	小館跡						○	
17	小館遺跡		○	○	○	○	○	
18	大館跡						○	
19	大館遺跡			○		○		
20	石塚遺跡		○	○	○	○	○	
21	国屋遺跡					○		
22	おんだし遺跡		○	○	○	○		
23	舘山館跡						○	
24	高塚A遺跡		○					
25	南向B遺跡		○			○		
26	南向A遺跡		○		○	○		
27	皿沼遺跡		○	○		○		
28	尖山C遺跡		○					
29	高塚B遺跡		○					
30	南向C遺跡		○					
31	北山遺跡	○		○	○		○	○
32	太田山遺跡				○			
33	舘遺跡				○			
34	下太田館跡						○	
35	下太田遺跡		○		○	○		
36	金弓舘遺跡		○			○	○	○
37	茶畑遺跡					○	○	○
38	下太田古墳群				○			
39	新田前塚						○	
40	山野道添遺跡		○			○	○	
41	下太田皿沼遺跡		○					
42	さんや遺跡		○					
43	尖山B遺跡		○			○		
44	八日山遺跡		○			○		
45	上釜飛沢B遺跡		○			○		
46	上釜飛沢A遺跡		○					
47	沢尻飛沢遺跡		○					
48	尖山A遺跡		○					
49	七日原A遺跡		○			○		
50	遠原遺跡		○			○	○	○
51	古山道遺跡					○	○	○
52	仲太田遺跡					○	○	○
53	明烏舞山遺跡		○	○	○	○		○
54	仲太田B遺跡		○	○				
55	天神道B遺跡				○		○	○
56	天神道遺跡		○			○	○	○
57	天神山館跡						○	
58	和田台遺跡				○	○		
59	仙神上A遺跡		○		○	○		○
60	高岡前遺跡		○		○	○		
61	仙神上C遺跡		○		○	○		
62	白幡遺跡		○			○		
63	仙神上B遺跡		○			○		
64	出山遺跡		○			○	○	○
65	ミスマ遺跡		○				○	○
66	箕輪中丸遺跡		○			○		
67	田向遺跡		○		○			
68	矢神遺跡		○			○		
69	左道内遺跡		○			○	○	○
70	大峰A遺跡		○					
71	西台遺跡		○					
72	大峯B遺跡		○			○		
73	向遺跡				○	○		
74	滑石遺跡		○			○	○	○
75	大平遺跡		○		○	○		
76	松虫遺跡		○					
77	大和田遺跡		○				○	
78	千葉遺跡		○					
79	和田台古墳				○			
80	愁綱遺跡		○					

11）　中村敬治ほか「茨城中央工業団地造成工事地内埋蔵文化財調査報告書　南小割遺跡・権現堂遺跡・親塚古墳・後原遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第129集　1998年３月

12）　７）に同じ

13）　和田正年ほか『天神山古墳群（４号墳)』旭村教育委員会・天神山古墳群発掘調査会　1983年３月

14）　天野早苗「天神山古墳群第１号墳測量の測量調査報告」『研究ノート　第18号』公益財団法人茨城県教育財団　2021年８月

15）　寺内久永「主要地方道大洗友部線道路改良事業地内埋蔵文化財調査報告書　千天遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第384集　2014年３月

参考文献

平石尚和ほか「主要地方道大洗友部線バイパス整備事業地内埋蔵文化財調査報告書　天神道Ｂ遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』 第463集　2022年１月

茨城県教育委員会『茨城県遺跡地図』 2023年３月

旭村史編さん委員会『旭村の歴史　通史編』旭村教育委員会　1998年３月

大洗町史編さん委員会『大洗町史（通史編)』大洗町　1986年３月

茨城町史編さん委員会『茨城町史　通史編』茨城町　1995年２月

第3章　調　査　の　成　果

第1節　調　査　の　概　要

大谷川遺跡と天神山古墳群は、鉾田市の北部に位置し、涸沼南側の標高約 20 mの台地上に立地している。当遺跡は、東西 220 m、南北 120 mの範囲で、調査区はその北東部にあたる。調査面積は 3,279㎡で、調査前の現況は山林と畑地である。

調査の結果、竪穴建物跡４棟（古墳時代）、竪穴遺構１基（古墳時代）、古墳２基（古墳時代）、陥し穴１基（縄文時代）、土坑 41 基（古墳時代 12、時期不明 29）、石器集中地点２か所（旧石器時代）、溝跡２条（時期不明）を確認した。

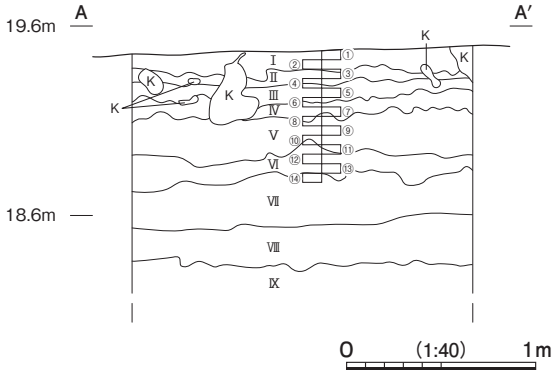
遺物は、遺物収納コンテナ（60 × 40 × 20cm）に 19 箱出土している。主な遺物は、縄文土器（深鉢）、弥生土器（広口壺・壺）、土師器（坏・蓋・器台・高坏・鉢・壺・甕）、須恵器（坏・瓶・甕）、土製品（管状土錘・球状土錘・丸玉）、石器（ナイフ形石器・尖頭器・楔形石器・石核・剥片・石鏃・磨製石斧・磨石・敲石・砥石）、金属製品（耳環・鉄砲玉・不明鉄製品）などである。

第2節　基　本　層　序

調査区（D12i4 区）にテストピットを設定し、基本土層（第２図）の観察を行った。以下、各層の特徴を述べる。なお、ローム層の自然科学分析の結果は、付章に掲載した。

第Ⅰ層は、褐色を呈するローム漸移層である。炭化粒子を極微量、黒色粒子を微量含み、粘性・締まりはともに普通である。層厚は７～16cmである。第Ⅱ層は、褐色を呈するソフトローム層である。黒色粒子を微量含み、粘性・締まりはともに普通である。層厚は５～10cmである。第Ⅲ層は、褐色を呈するハードローム層である。黒色粒子を微量含み、粘性・締まりはともに普通である。層厚は５～12cmである。第Ⅳ層は、暗褐色を呈するハードローム層である。黒色粒子と白色粒子を微量含み、粘性・締まりはともに強い。層厚は５～14cmである。第Ⅴ層は、褐色を呈するハードローム層である。黒色粒子と白色粒子を微量含み、粘性・締まりはともに強い。層厚は８～37cmである。第Ⅵ層は、オリーブ褐色を呈するハードローム層である。鹿沼パミスを中量、黒色粒子を微量含む。粘性は普通で、締まりは極めて強い。層厚は６～20cmである。第Ⅶ層は、明黄褐色を呈する鹿沼軽石層である。鹿沼パミスを多量、黒色粒子とハードロームブロックを微量含み、粘性は弱く、締まりは普通である。層厚は 15 ～ 30cmである。第Ⅷ層は、暗褐色を呈するハードローム層である。黒色粒子を微量含み、粘性・締まりはともに強い。層厚は 14 ～ 28cmである。第Ⅸ層は、暗褐色を呈するハードローム層である。黒色粒子を微量含み、粘性・締まりはともに強い。層厚は 18cmまで確認した。

旧石器時代の遺物は第Ⅳ層を中心に、縄文時代以降の遺構は第Ⅰ層上面で確認した。



第２図　基本土層図（遺構全体図参照）

第３節　遺 構 と 遺 物

１　旧石器時代の遺構と遺物

石器集中地点２か所を確認した。以下、遺構と遺物について記述する。

石器集中地点

第１号石器集中地点（第３・４図　第２・３表　PL １・６）

出土位置　調査区西部のＤ８f6 ～Ｄ８g9 区、標高 21 mほどの台地上に位置している。

出土層位　基本層序の第Ⅱ層から第Ⅲ層にかけて出土している。

出土状況　石器は東西 10.6 m、南北 4.5 mの範囲に分布している。平面分布からは、散在した状況が認められ、密集した状況は確認できなかった。垂直分布からは、標高 20.677 ～ 21.146 m、平均標高は 20.990 mで、垂直分布の最大幅は約 47㎝である。石材別の分布状況は、流紋岩がＤ８g8 区の北西部から１点、ガラス質黒色安山岩はＤ８g6 区の南部から２点、Ｄ８h6 区の北西部とＤ８g8 区の北東部、Ｄ８g7 区のローム層中からそれぞれ１点が出土している。頁岩はＤ８g7 区のローム層中から５点出土している。

出土遺物　石器 11 点（122.38g）が出土している。石器の器種構成は、二次加工のある剥片１点（31.99g）、剥片８点（76.81g）、砕片１点（0.09g）、礫片１点（13.49g）である。石材構成は、ガラス質黒色安山岩５点（95.77g）、頁岩５点（24.96g）、流紋岩１点（1.65g）である。同じ石材同士の接合関係は認められず、また、石核や製品などは、確認できなかった。

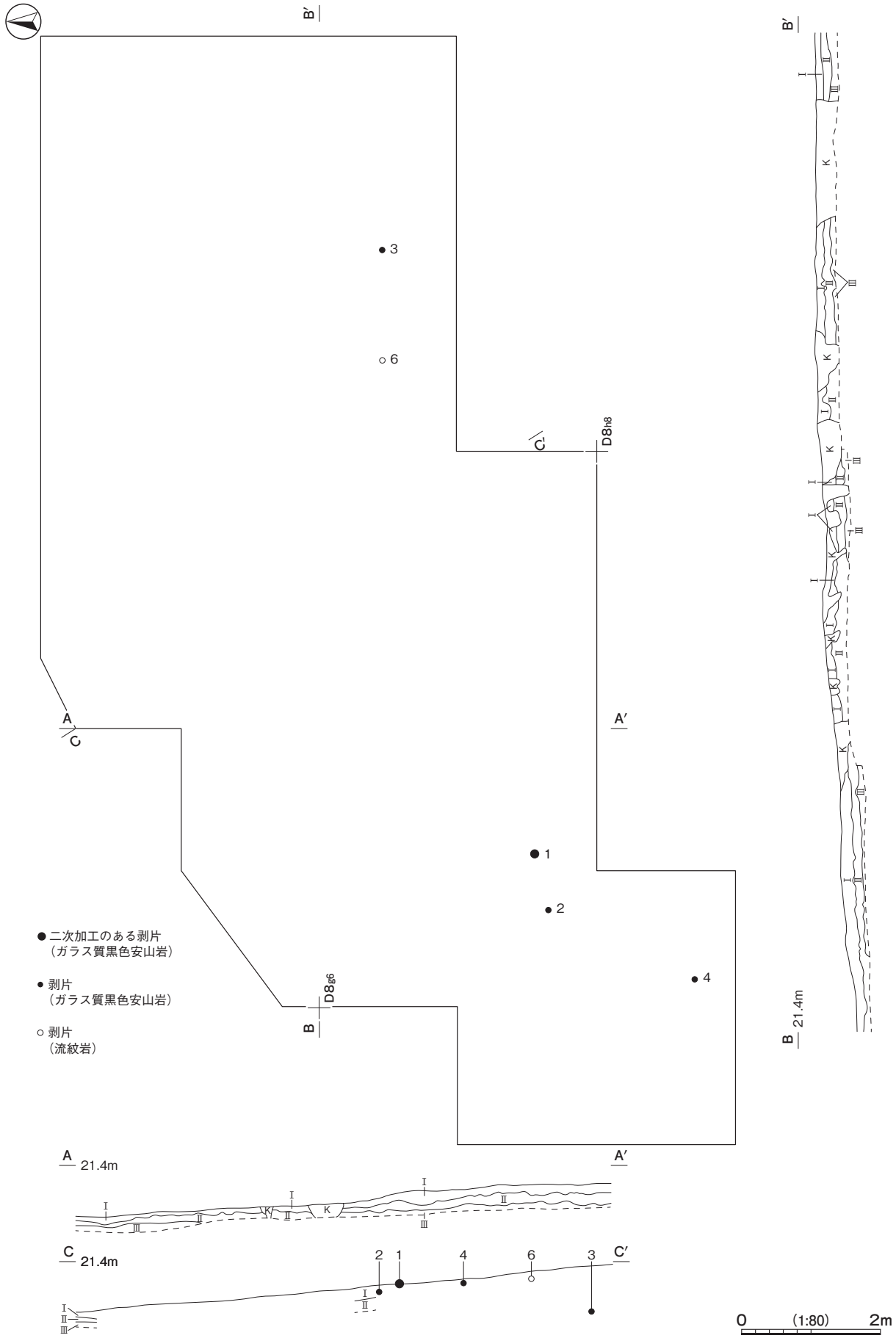
所見　ローム層の自然科学分析の結果、当遺跡で確認したローム層の第Ⅳ・Ⅴ層が北関東地域に広く認められる暗色帯にほぼ対比できること、第Ⅳ層が概ねＡＴ降灰層準にあたることが判明した。接合関係が認められず、石核なども確認できなかったため、本地点の性格は不明である。時期は出土層位からＡＴ降灰期以降と考えられる。

第２表　第１号石器集中地点出土遺物一覧（第４図）

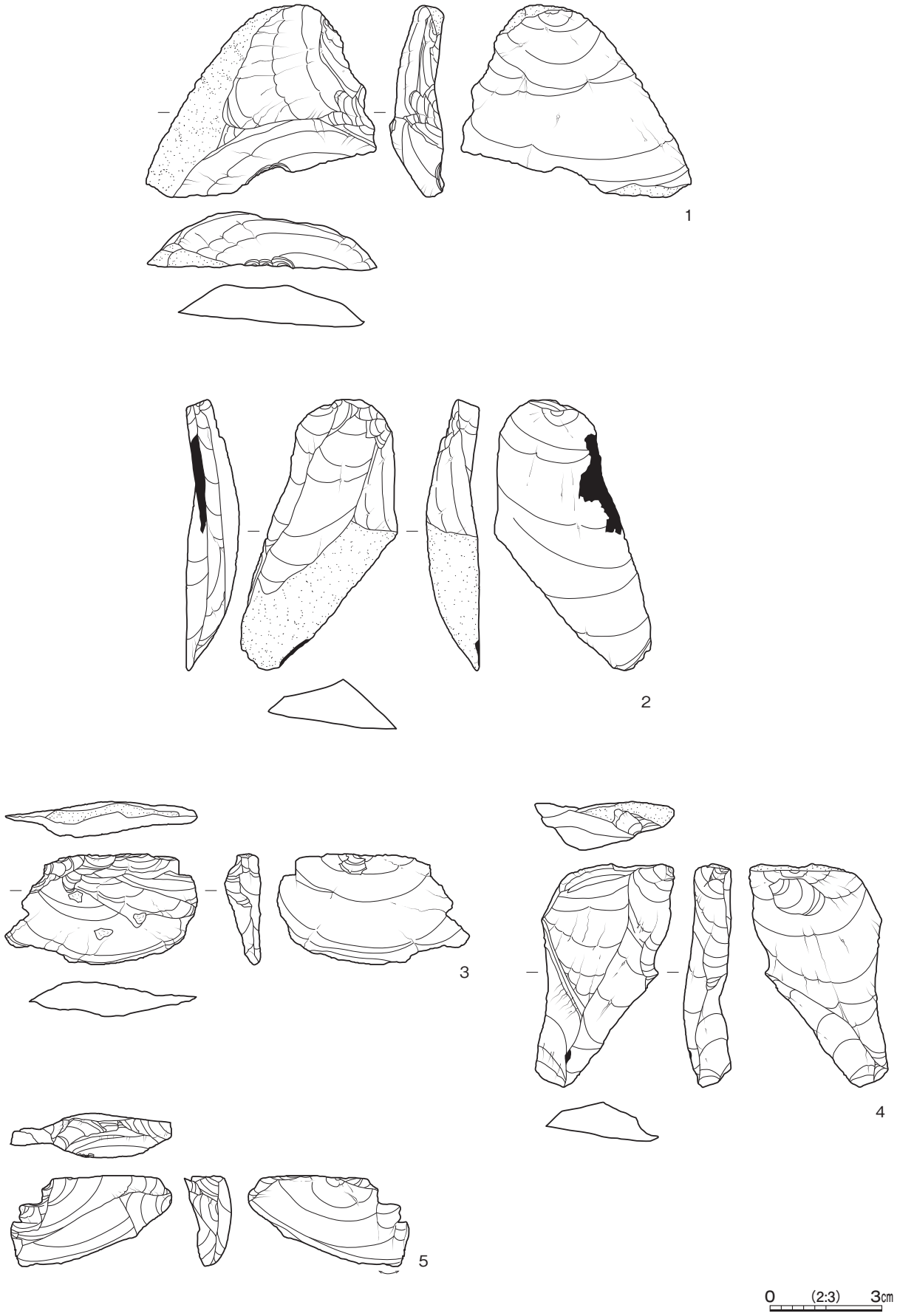
番号	器　種	長さ	幅	厚さ	重量	材　　質	特　　徴	X 座標	Y 座標	Z 座標	備　考（台帳番号）
1	二次加工のある剥片	5.2	6.2	1.5	31.99	ガラス質黒色安山岩	横長剥片　自然面打面　下端縁辺部腹面側からの剥離痕　背面多方向の剥離痕　自然面残す	29732.933	61982.184	21.082	PL ６（５）
2	剥片	7.3	4.2	1.4	29.08	ガラス質黒色安山岩	縦長剥片　単剥離面打面　背面同一方向の剥離痕　自然面残す	29732.716	61981.448	20.957	PL ６（６）
3	剥片	3.0	5.2	1.0	12.02	ガラス質黒色安山岩	横長剥片　自然面打面　背面連続した打面周縁調整	29735.131	61990.882	20.677	PL ６（２）
4	剥片	6.0	3.7	1.3	22.59	ガラス質黒色安山岩	縦長剥片　自然面打面　背面多方向からの剥離痕	29730.617	61980.444	21.086	PL ６（７）
5	剥片	2.5	4.3	1.3	9.21	頁岩	横長剥片　打面縁辺部と腹面縁辺部の一部に微細剥離痕　複剥離面打面	Ｄ８g7			PL ６（４）

第３表　第１号石器集中地点未掲載出土遺物一覧

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材　質	特　　徴	X 座標	Y 座標	Z 座標	備　考（台帳番号）
6	剥片	2.7	1.2	0.6	1.65	流紋岩	横長剥片　自然面残す	29735.119	61989.293	21.146	（１）
7	剥片	1.6	1.0	0.5	0.52	頁岩	節理面と自然面残す	Ｄ８g7			（４）
8	剥片	1.8	1.1	0.4	0.46	頁岩	単剥離面断面　９と同一母岩	Ｄ８g7			（４）
9	剥片	1.4	1.4	0.8	1.28	頁岩	打点部切断　８と同一母岩	Ｄ８g7			（４）
10	砕片	1.1	0.7	0.1	0.09	ガラス質黒色安山岩	線状打面	Ｄ８g7			（３）
11	礫片	3.6	2.1	1.7	13.49	頁岩	節理面と自然面残す	Ｄ８g7			（４）



第３図　第１号石器集中地点実測図



第４図　第１号石器集中地点出土遺物実測図

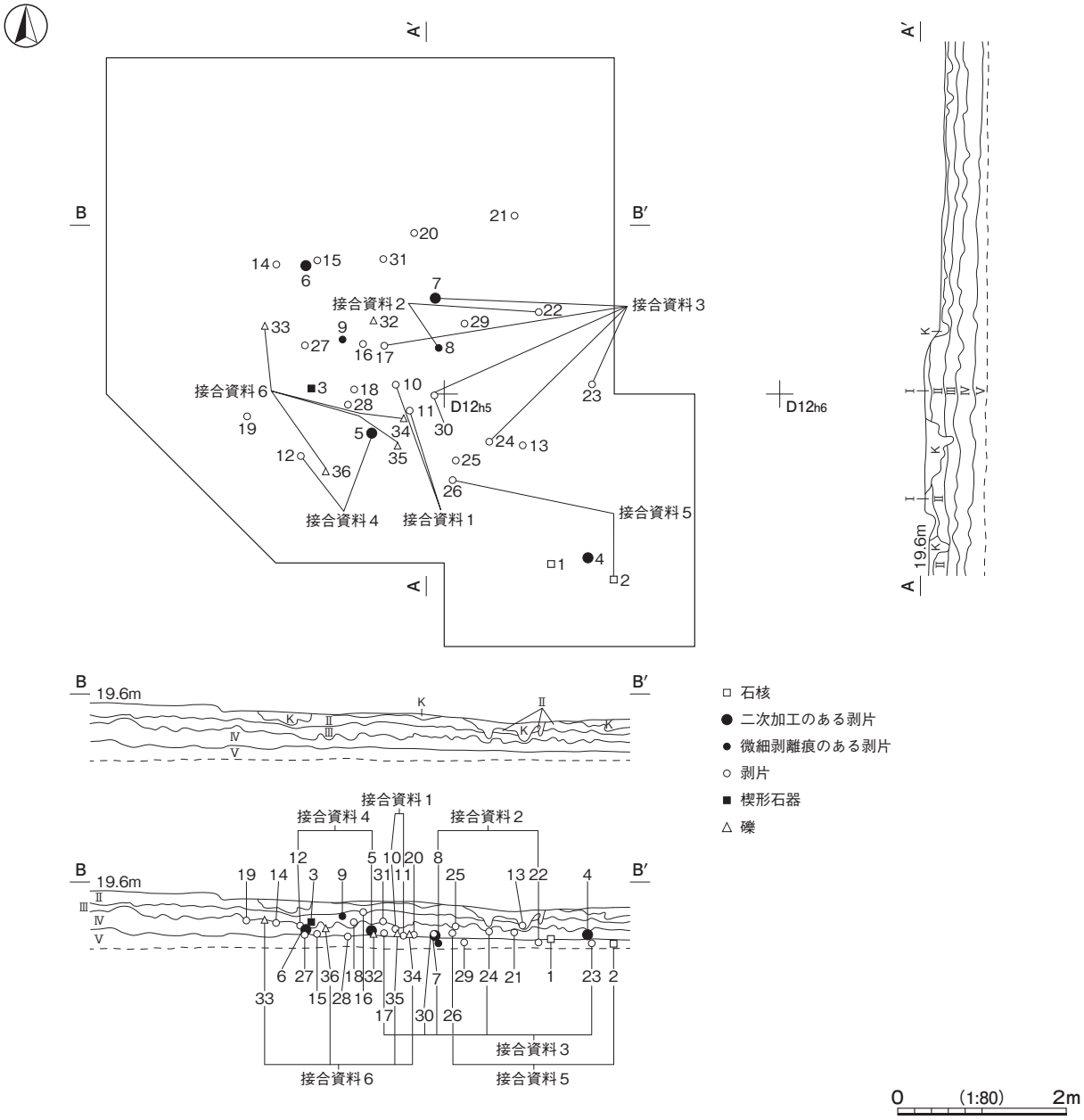
第２号石器集中地点（第５～10図　第４～６表　PL １・６～８）

出土位置　調査区西部のD12g4～D12h5区、標高20ｍほどの台地上に位置している。

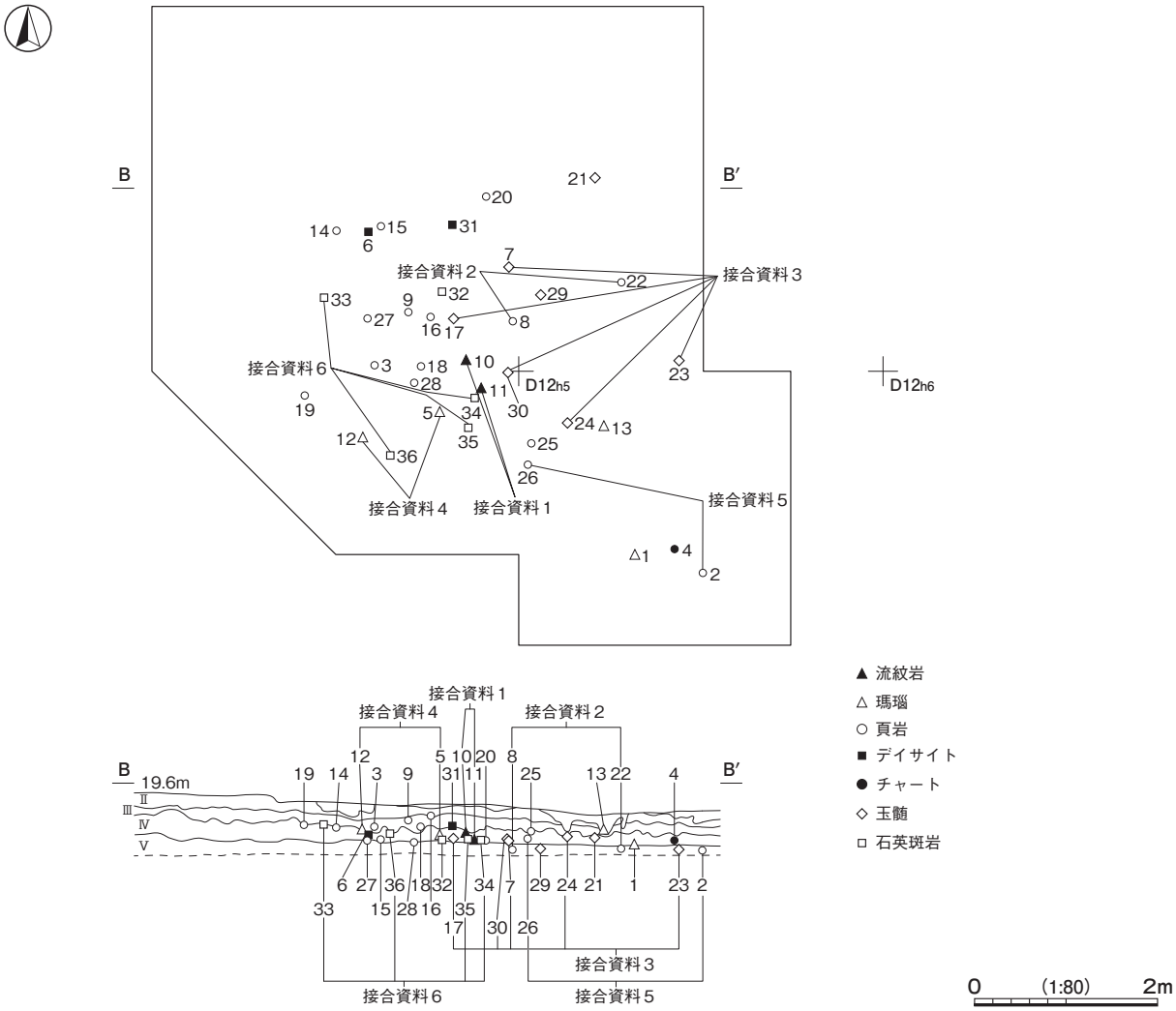
重複関係　本地点上に、第４号竪穴建物、第37・39・41号土坑、第５号墳が構築されている。

出土層位　基本層序の第Ⅳ層を中心に、第Ⅲ層から第Ⅴ層にかけて出土している。

出土状況　石器は東西4.4ｍ、南北4.4ｍの範囲に分布している。平面分布からは、D12h5グリッド付近に密集した状況が認められる。垂直分布からは、標高18.858～19.237ｍ、平均標高は19.010ｍで、垂直分布の最大幅は約38㎝である。石材別の分布状況は、頁岩はD12h5グリッドを中心に半径約2.7mの範囲から15点が出土している。瑪瑙はD12h4区とD12h5区から各２点、流紋岩はD12h5グリッドの西側から２点、デイサイトはD12g4区の中央部と東部からそれぞれ１点、チャートはD12h5区の中央部から１点が出土している。玉髄はD12g4～D12h5区にかけて７点が出土している。石英斑岩はD12g4区の南東部から２点と隣接するD12h4区から３点が出土している。



第５図　第２号石器集中地点実測図（1）

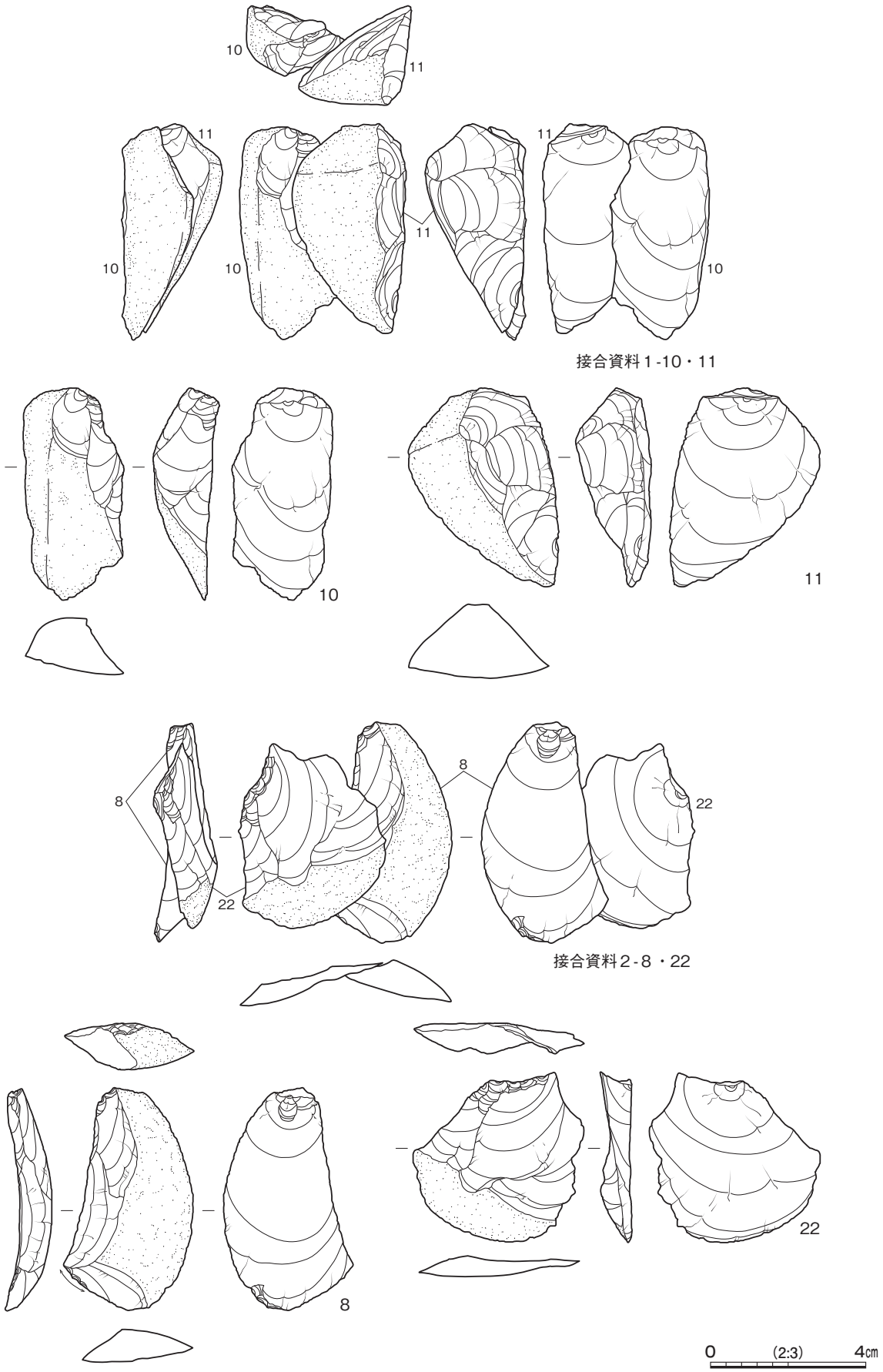


第６図　第２号石器集中地点実測図（2）

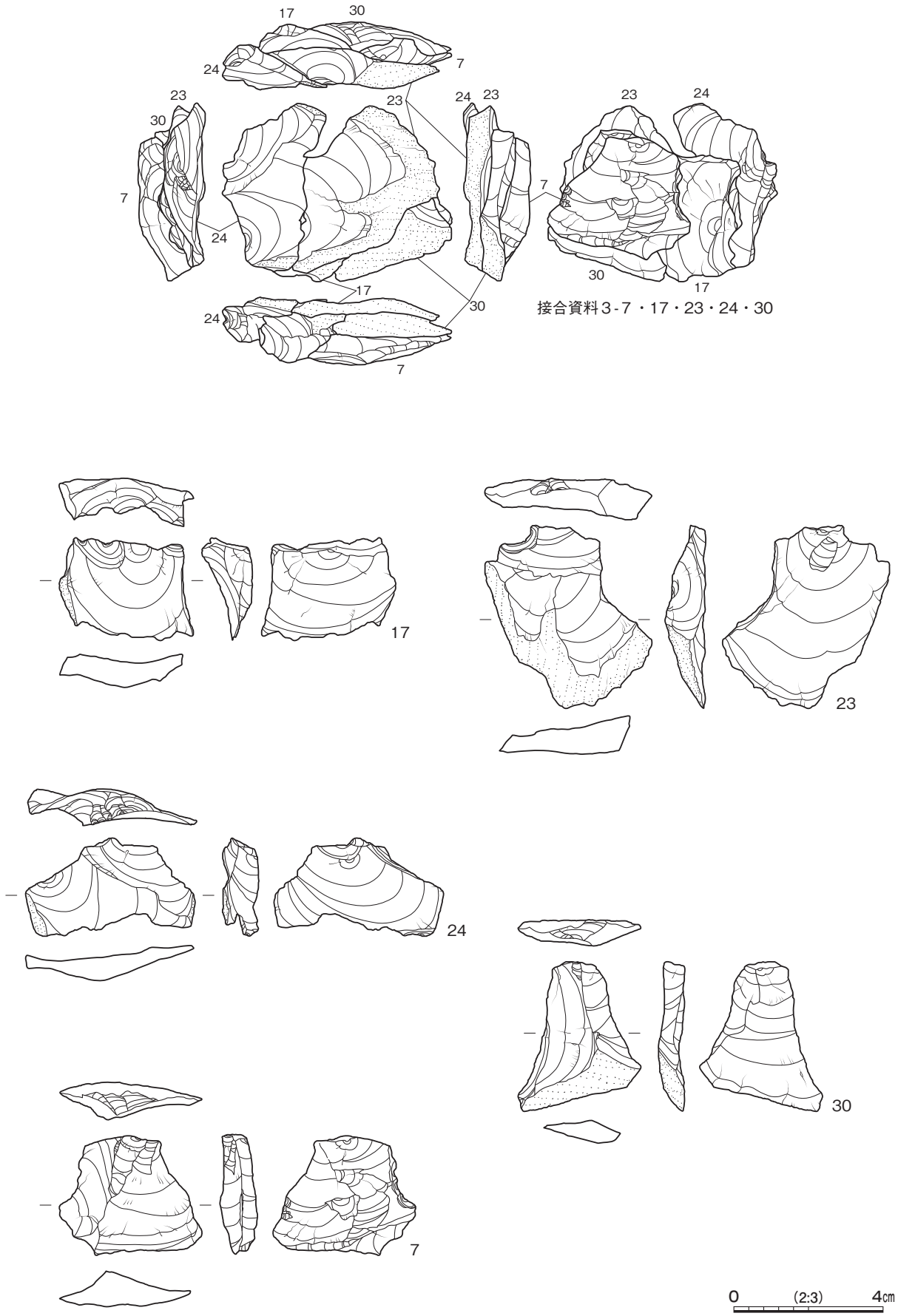
出土遺物　石器 31 点（341.22g）と礫５点（4766.4g）が出土している。石器の器種構成は、石核２点（48.70g）、楔形石器１点（19.88g）、二次加工のある剥片４点（86.56g）、微細剥離痕のある剥片２点（19.97g）、剥片 22 点（166.11g）である。石材構成は、頁岩 15 点（92.17g）、チャート１点（24.01g）、瑪瑙４点（44.16g）、流紋岩２点（46.98g）、デイサイト２点（49.71g）、玉髄７点（84.19g）、石英斑岩５点（4766.4g）である。接合資料１は距離 0.35 m、比高差 7.7㎝の流紋岩製剥片２点、接合資料２は距離 1.28 m、比高差 1.1㎝の頁岩製剥片２点、接合資料３は距離が最短 0.89 m、最長 2.50 m、比高差最大 14.7㎝の玉髄製剥片５点が接合している。接合資料４は距離 0.90 m、比高差 5.9㎝の瑪瑙製剥片２点、接合資料５は距離約 2.26 m、比高差 13.6㎝の頁岩製石核と剥片の２点が接合している。接合資料６は距離が最短約 0.33 m、最長 2.12 m、最大比高差 17.0㎝の被熱を受けた礫片（石英斑岩）４点が接合している。

所見　ローム層の自然科学分析の結果、当遺跡で確認したローム層の第Ⅳ層が概ねＡＴ降灰層準にあたることが判明した。時期は出土層位からＡＴ降灰期前後と考えられる。製品としては、頁岩製楔形石器があり、小規模な礫群を伴い在地石材で構成されていることなどから、ＡＴ降灰期以前の角錐状石器出現期以前の石器群の可能性がある。性格は、石器の出土範囲が狭く、５割近くに接合関係が認められることから、東方向へ下がる緩斜面を利用した石器製作跡と考えられる。

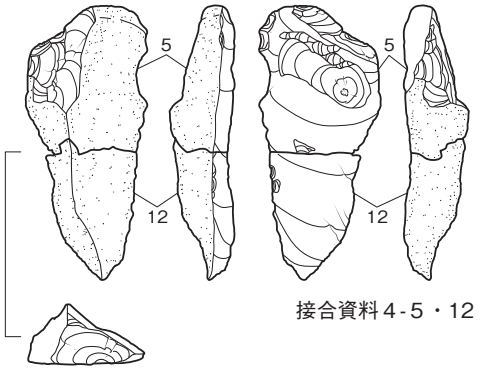
第７図　第２号石器集中地点出土遺物実測図（1）



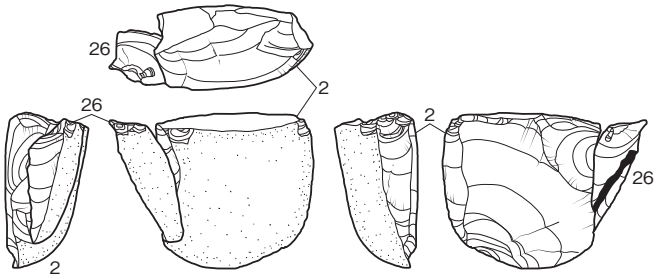
第８図　第２号石器集中地点出土遺物実測図（2）



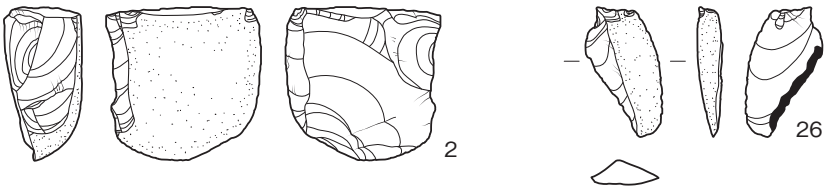
第９図　第２号石器集中地点出土遺物実測図（3）



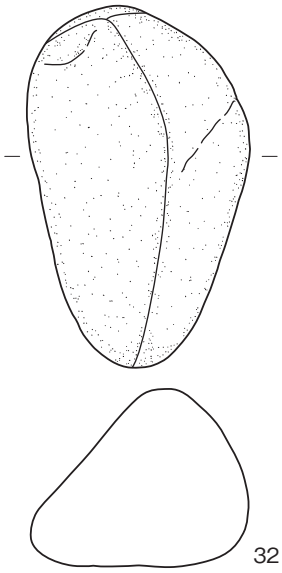
接合資料４-５・12

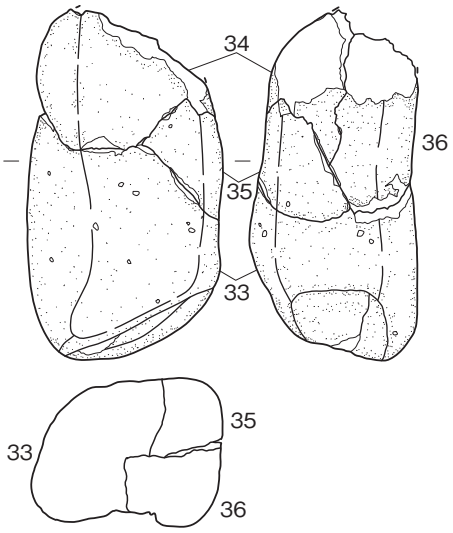


接合資料５-2・26



0 (2:3) 4cm





接合資料６-33・34・35・36

0 (1:4) 10cm

第 10 図　第２号石器集中地点出土遺物実測図（4）

第４表　第２号石器集中地点出土遺物一覧（第７～10図）

番号	器　種	長さ	幅	厚さ	重量	材　　質	特　　徴	X座標	Y座標	Z座標	備　考（台帳番号）
1	石核	3.3	3.7	1.9	28.49	瑪瑙	小型石核　打面２か所　自然面残す	29729.981	62137.275	18.916	PL 6 (31)
2	石核	3.1	3.1	1.6	20.21	頁岩	小型石核　単剥離面打面　自然面残す	29729.796	62138.020	18.858	PL 8 (36)
3	楔形石器	5.4	2.9	1.6	19.88	頁岩	素材は縦長剥片　両面対向する剥離痕	29732.065	62134.429	19.117	PL 6 (15)
4	二次加工のある剥片	2.9	5.6	1.7	24.01	チャート	素材は横長剥片　複剥離面打面　右側縁部に連続した剥離痕　背面右側に剥離痕と打面周縁調整痕有　自然面残す	29730.052	62137.711	18.965	PL 6 (28)
5	二次加工のある剥片	3.0	2.4	1.3	7.49	瑪瑙	素材は縦長剥片　打点部・両側縁部に剥離痕　背面ほぼ自然面	29731.535	62135.145	19.016	PL 8 (18)
6	二次加工のある剥片	6.8	3.0	2.2	45.54	デイサイト	縦長剥片　単剥離面打面　背面多方向の剥離痕　右側縁部不連続な剥離痕　自然面残す	29733.524	62134.364	19.033	PL 6 (7)
7	二次加工のある剥片	3.2	3.8	1.0	9.52	玉髄	横長剥片　複剥離面打面　背面二方向の剥離痕　左側縁部連続した剥離痕	29733.137	62135.900	18.964	PL 7 (32)
8	微細剥離痕のある剥片	5.7	3.4	1.2	15.15	頁岩	縦長剥片　単剥離面打面　背面多方向の剥離痕　下端縁辺部微細剥離痕　自然面残す	29732.547	62135.940	18.868	PL 7 (34)
10	剥片	5.5	2.6	1.7	19.57	流紋岩	縦長剥片　単剥離面打面　背面同一方向の剥離痕　自然面残す	29732.110	62135.430	19.037	PL 7 (13)
11	剥片	5.1	3.9	2.0	27.41	流紋岩	縦長剥片　単剥離面打面　背面多方向の剥離痕　自然面残す	29731.701	62135.525	18.960	PL 7 (19)
12	剥片	2.8	1.8	1.2	3.35	瑪瑙	自然面打面　背面ほぼ自然面	29731.263	62134.303	19.075	PL 8 (17)
16	剥片	4.4	2.4	0.7	6.58	頁岩	縦長剥片　背面多方向の剥離痕　自然面残す	29732.594	62135.041	19.237	PL 6 (11)
17	剥片	2.7	3.6	1.3	7.84	玉髄	複剥離面打面　背面同一方向の剥離痕　自然面を残す	29732.573	62135.294	18.992	PL 7 (12)
20	剥片	2.8	1.8	0.4	1.75	頁岩	縦長剥片　単剥離面打面　左側縁折断　背面多方向の剥離痕　自然面残す	29733.911	62135.649	18.973	PL 6 (20)
21	剥片	3.0	2.2	0.8	4.01	玉髄	縦長剥片　単剥離面打面　背面同一方向の剥離痕　自然面残す　接合資料３と同一母岩	29734.116	62136.840	18.999	PL 6 (21)
22	剥片	4.4	4.4	0.8	10.07	頁岩	横長剥片　単剥離面打面　背面同一方向の剥離痕　自然面残す	29732.973	62137.128	18.879	PL 7 (22)
23	剥片	4.9	4.5	1.1	15.71	玉髄	縦長剥片　背面多方向の剥離痕　右側縁背面側からの剥離（７の打面）	29732.113	62137.761	18.866	PL 7 (23)
24	剥片	2.6	4.5	1.0	6.89	玉髄	横長剥片　背面二方向の剥離痕　自然面残す	29731.432	62136.541	19.013	PL 7 (25)
26	剥片	2.6	1.5	0.5	1.51	頁岩	縦長剥片　単剥離面打面　自然面残す	29730.977	62136.106	18.994	PL 8 (27)
29	剥片	5.6	4.1	2.3	34.61	玉髄	縦長剥片　複剥離面打面　背面同一方向の剥離痕　自然面残す	29732.835	62136.246	18.884	PL 6 (33)
30	剥片	4.0	3.3	0.7	5.61	玉髄	縦長剥片　複剥離面打面　背面二方向の剥離痕　自然面残す	29731.983	62135.889	18.978	PL 7 (35)
31	剥片	4.2	1.6	0.8	4.17	デイサイト	縦長剥片　単剥離面打面　背面同一方向の剥離痕　風化顕著	29733.602	62135.282	19.126	PL 6 (9)
32	礫	19.1	11.3	9.4	2503.3	石英斑岩	全面被熱痕	29732.865	62135.167	18.971	(2)
33	礫片	(13.0)	10.2	8.8	1440.7	石英斑岩	表面・剥離面被熱痕	29732.800	62133.876	19.143	(1)
34	礫片	(8.2)	9.4	4.7	353.7	石英斑岩	表面・剥離面被熱痕	29731.802	62135.595	18.973	(3)
35	礫片	(6.5)	4.2	4.8	103.6	石英斑岩	表面・剥離面被熱痕	29731.378	62135.452	18.981	(4)
36	礫片	(9.5)	9.9	4.4	365.1	石英斑岩	表面・剥離面被熱痕	29731.071	62134.601	19.042	(5)

第５表　第２号石器集中地点接合資料一覧（第８～10図）

番　号	遺物番号	長さ	幅	厚さ	重量	材　質	特　　徴	接合距離（m）	比高差（cm）	備　考（台帳番号）
接合資料１	10・11	5.6	4.3	2.6	46.98	流紋岩	剥片同士	0.35	7.7	PL 7 (13) (19)
接合資料２	8・22	5.7	5.5	1.6	25.22	頁岩	微細剥離痕のある剥片と剥片	1.28	1.1	PL 7 (34) (22)
接合資料３	7・17・23・24・30	4.8	6.1	1.8	45.57	玉髄	二次加工のある剥片と剥片	短 0.89 長 2.50	14.7	PL 7 (32) (12) (23) (25) (35)
接合資料４	5・12	5.4	2.4	1.3	10.84	瑪瑙	二次加工のある剥片と剥片	0.90	5.9	PL 8 (18) (17)
接合資料５	2・26	3.1	4.0	1.6	21.72	頁岩	石核と剥片	2.26	13.6	PL 8 (36) (27)
接合資料６	33・34・35・36	(18.6)	10.2	9.0	2263.1	石英斑岩	礫片同士	短 0.33 長 2.12	17.0	(1) (3) (4) (5)

第６表　第２号石器集中地点未掲載出土遺物一覧

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材　質	特　　徴	X座標	Y座標	Z座標	備　考（台帳番号）
9	微細剥離痕のある剥片	3.0	1.9	1.5	4.82	頁岩	素材は横長剥片　単剥離面打面　背面多方向の剥離痕　微細剥離痕有	29732.646	62134.799	19.188	(10)
13	剥片	3.3	1.6	1.0	4.83	瑪瑙	素材は縦長剥片　複剥離面打面　背面同一方向の剥離痕　左側面背面側からの剥離痕　自然面残す	29731.390	62136.938	19.075	(24)
14	剥片	3.2	1.3	0.8	4.13	頁岩	縦長剥片　線状打面　自然面残す　接合資料５と同一母岩	29733.537	62134.012	19.105	(6)
15	剥片	2.2	1.6	0.4	2.17	頁岩	縦長剥片　単剥離面打面　背面対向する剥離痕　下部腹面側からの折断　自然面残す　接合資料５と同一母岩	29733.586	62134.499	18.979	(8)
18	剥片	1.3	1.1	0.1	0.17	頁岩	打点部折断　自然面残す	29732.054	62134.937	19.120	(14)
19	剥片	2.7	1.8	0.6	2.18	頁岩	横長剥片　単剥離面打面　背面多方向からの剥離痕　接合資料５と同一母岩	29731.734	62133.665	19.135	(16)
25	剥片	2.0	1.3	0.5	1.13	頁岩	複剥離面打面　背面多方向の剥離痕　接合資料２と同一母岩	29731.210	62136.143	19.067	(26)
27	剥片	1.4	1.1	0.3	0.32	頁岩	複剥離面打面　接合資料２と同一母岩	29732.577	62134.352	18.966	(29)
28	剥片	2.6	1.2	0.8	2.10	頁岩	縦長剥片　単剥離面打面　接合資料５と同一母岩	29731.874	62134.863	18.950	(30)

２　縄文時代の遺構と遺物

陥し穴１基を確認した。以下、遺構について記述する。

陥し穴

第１号陥し穴（第 11 図　PL ２）

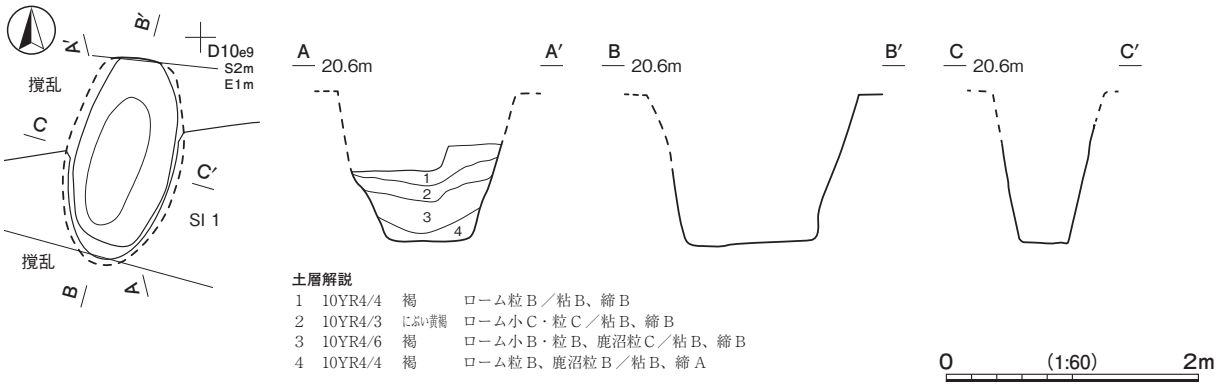
位置　調査区中央部の D10e9 区、標高 20 mほどの台地上に位置している。

重複関係　第１号竪穴建物に掘り込まれている。

規模と形状　撹乱や重複のため、確認できた規模は長径 1.66 m、短径 0.92 mである。平面形は楕円形で、主軸方向はＮ－ 13°－Ｅである。深さは 120cmで、壁は外傾している。底面は平坦である。

覆土　４層に分層できる。周囲からの流入を示す堆積状況から、自然堆積である。

所見　遺物が出土していないため、時期は明確に特定できないが、特徴的な形状から縄文時代の陥し穴と考えられる。



第 11 図　第１号陥し穴実測図

３　古墳時代の遺構と遺物

竪穴建物跡４棟、竪穴遺構１基、土坑 12 基を確認した。以下、遺構と遺物について記述する。

(1)　竪穴建物跡

第１号竪穴建物跡（第 12・13 図　第７表　PL ２・８）

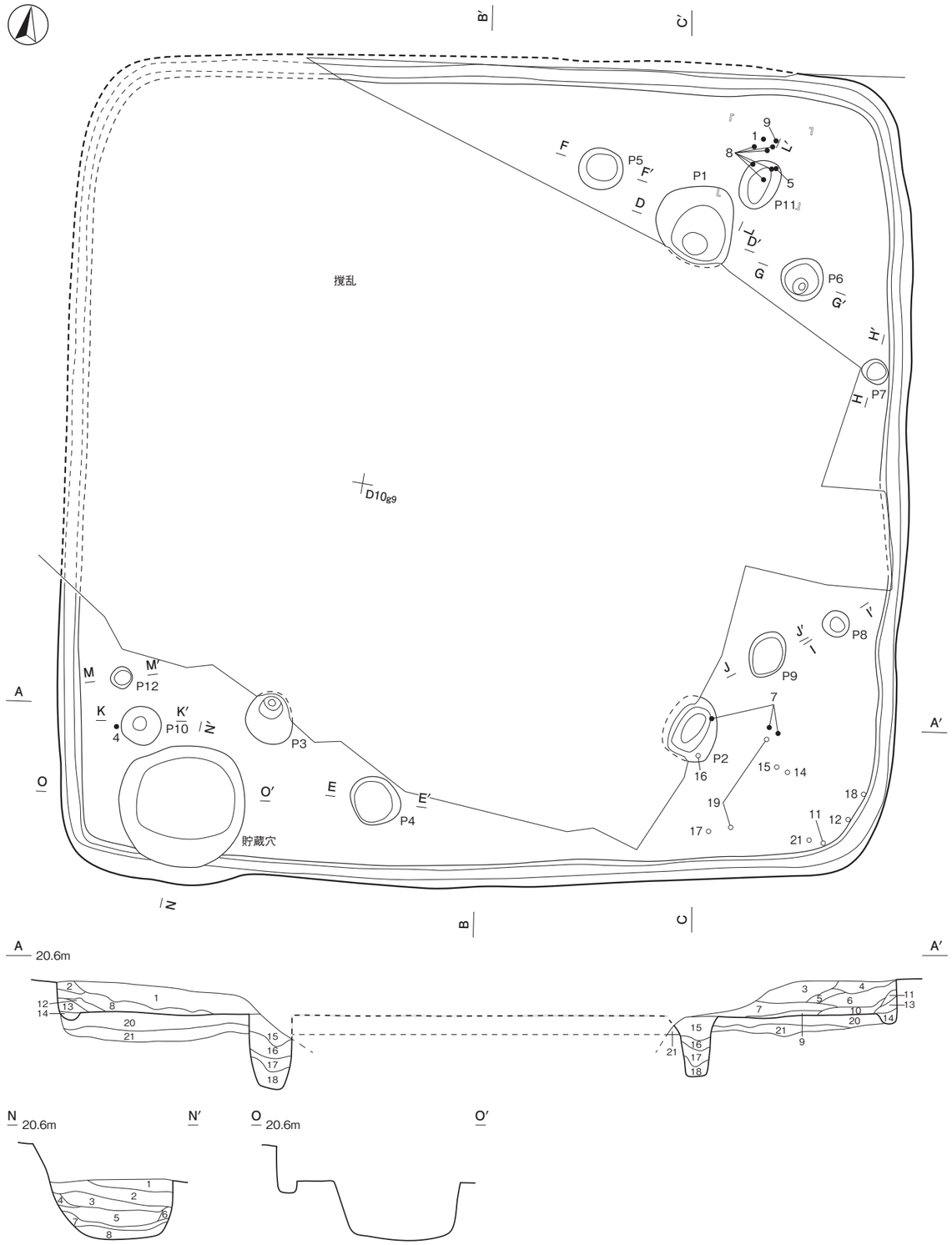
位置　調査区中央部の D10g9 区、標高 20 mほどの台地上に位置している。

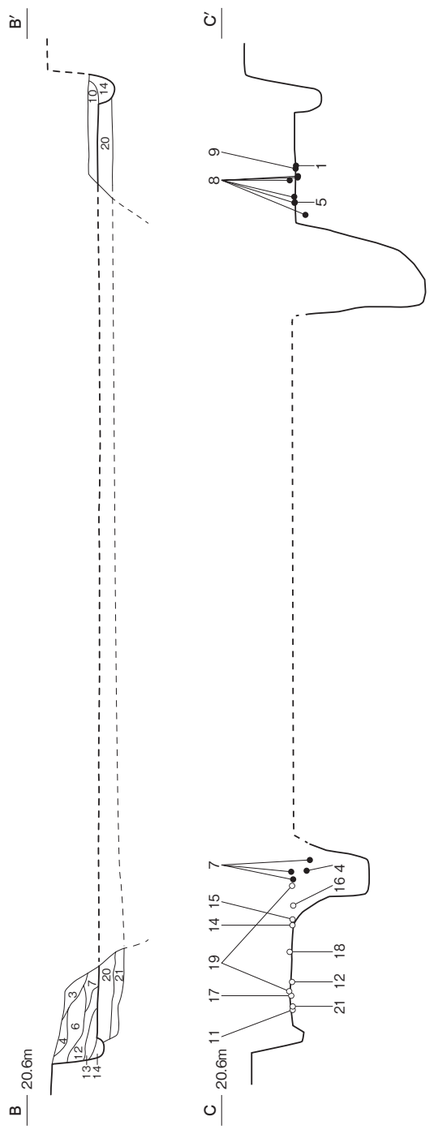
重複関係　第１号陥し穴を掘り込んでいる。

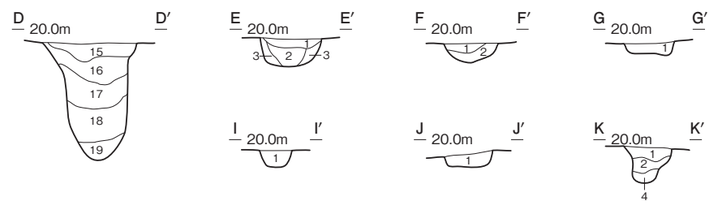
規模と形状　撹乱のため、確認できた規模は長軸 9.83m、短軸 9.73 mである。平面形は隅丸方形で、主軸方向はＮ－ 10°－Ｗである。壁は高さ最大 44cmで、直立している。

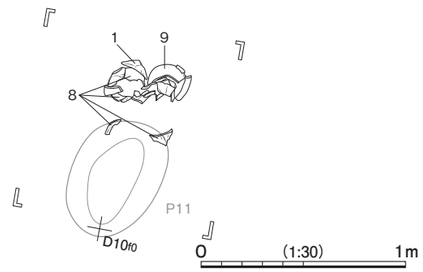
床　確認できた範囲では平坦で、硬化はしていない。壁溝が貯蔵穴の南側を除いて巡っている。貼床は地山を最大 35cmほど掘り下げ、ロームブロックを含む第 20・21 層を埋土して構築している。

ピット　12 か所。Ｐ１～Ｐ３は深さ 72 ～ 120cmで、配置から主柱穴である。Ｐ１・Ｐ２は上部が広がっており、覆土はいずれも柱抜き取り後の流入土である。Ｐ４は深さ 32cmで、配置から出入口施設に伴うピットと考えられる。Ｐ５～Ｐ 12 は、深さ 14 ～ 36cmで、性格は不明である。覆土は、いずれもロームブロックや鹿沼パミスを含むことから、人為堆積である。









土層解説

1	10YR2/3	黒褐	ローム中D・小C・粒B、焼土粒D、炭化粒D／粘C、締B
2	10YR3/4	暗褐	ローム中C、焼土粒D、炭化粒D／粘C、締B
3	10YR4/4	褐	ローム大A・中B・粒C、炭化粒D／粘A、締B
4	10YR3/3	暗褐	ローム小D・粒B、焼土粒D、炭化粒C、鹿沼粒C／粘B、締B
5	10YR3/4	暗褐	ローム小C・粒B、焼土粒D、炭化粒C／粘B、締B
6	10YR4/2	灰黄褐	ローム小C・粒C、焼土粒C、炭化粒C／粘B、締B
7	10YR3/4	暗褐	ローム小D・粒B、焼土粒D、炭化粒D／粘B、締B
8	10YR3/3	暗褐	ローム小C・粒B、炭化粒D／粘B、締B
9	10YR4/3	にぶい黄褐	ローム中A・小C・粒C／粘A、締B
10	10YR3/4	暗褐	ローム中D・小C・粒C、鹿沼粒C／粘B、締B
11	10YR4/3	にぶい黄褐	ローム中D・小B・粒B／粘B、締B
12	10YR3/4	暗褐	ローム小C・粒B、焼土粒D、炭化粒D、鹿沼粒C／粘B、締B
13	10YR3/3	暗褐	ローム小C・粒D、焼土粒C、炭化粒B／粘C、締B
14	10YR3/4	暗褐	ローム小D・粒C、焼土粒D／粘C、締B
15	10YR2/3	黒褐	ローム小D・粒C、焼土粒D、炭化粒D／粘B、締B
16	10YR3/3	暗褐	ローム小C・粒C、炭化粒D／粘B、締B
17	10YR3/4	暗褐	ローム粒D、炭化粒D／粘B、締B
18	10YR4/4	褐	ローム小D・粒C／粘B、締B
19	10YR4/3	にぶい黄褐	ローム中D・小C、鹿沼中B・粒B／粘B、締B
20	10YR4/6	褐	ローム小A・粒A、鹿沼小C／粘B、締B
21	10YR4/6	褐	ローム中C・小B・粒A、鹿沼中B・小C／粘B、締B

P4～P12土層解説

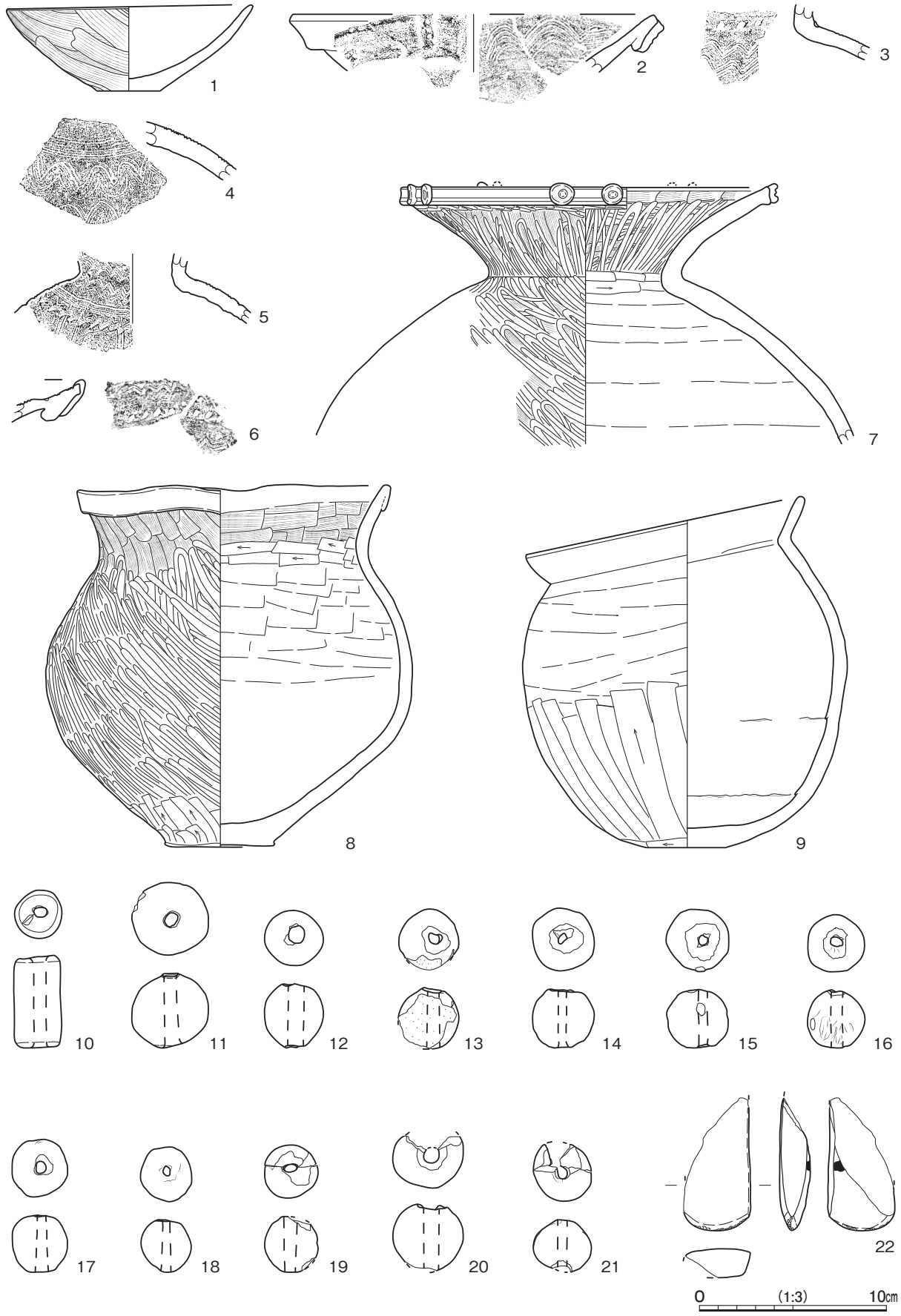
1	10YR3/3	暗褐	ローム小D・粒C、炭化粒D／粘B、締B
2	10YR3/4	暗褐	ローム小C・粒B、鹿沼粒D／粘B、締B
3	10YR3/4	暗褐	ローム小B・粒B／粘B、締B
4	10YR3/3	暗褐	ローム小B・粒B、焼土粒D、炭化粒D、鹿沼粒C／粘B、締B

貯蔵穴土層解説

1	10YR3/2	黒褐	ローム小D・粒C、焼土粒D、炭化粒D／粘C、締B
2	10YR3/3	暗褐	ローム中D・小D・粒C／粘B、締B
3	10YR4/3	にぶい黄褐	ローム中C・小C・粒B／粘B、締B
4	10YR3/3	暗褐	ローム小C・粒B／粘C、締B
5	10YR5/4	にぶい黄褐	ローム中B・小B・粒A、鹿沼中C／粘B、締B
6	10YR3/1	黒褐	ローム小D・粒C、焼土小D・粒D／粘C、締B
7	10YR4/4	褐	ローム粒C、鹿沼小C／粘B、締B
8	10YR4/6	褐	ローム中B・小A・粒A／粘B、締B

0 (1:60) 2m

第12図　第1号竪穴建物跡実測図



第 13 図　第 1 号竪穴建物跡出土遺物実測図

貯蔵穴　南西コーナーからやや東寄りに位置している。長軸148cm、短軸143cmの隅丸方形で、深さ72cmである。底面は平坦で、壁は外傾している。覆土は８層に分層でき、ロームブロックや鹿沼パミスを含むことから、人為堆積である。

覆土　14層に分層できる。ロームブロックや鹿沼パミスを含むことから、人為堆積である。

遺物出土状況　弥生土器片50点（広口壺）、土師器片499点（器台12、高坏27、鉢１、壺147、甕312）、土製品12点（管状土錘１、球状土錘11）、石器２点（ホルンフェルス製磨製石斧、砥石）が出土している。ほかに混入した須恵器片27点（坏２、瓶11、長頸瓶13、甕１）、石器４点、礫１点、鉄製品１点、瓦１点が出土している。遺物は主に北東・南東コーナー部から出土している。１・８・９は北東コーナー部の床面から密集して横位の状態で出土している。７は南東コーナー部の床面とＰ２の覆土上層から、11・12・14～19・21は狭い範囲にまとまって床面から出土している。

所見　時期は、出土土器から前期前葉と考えられる。

第７表　第１号竪穴建物跡出土遺物一覧（第13図）

番号	種　別	器種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	特　　徴	出土位置	備　考
1	土師器	鉢	13.0	4.6	3.4	長石・石英・赤色粒子	にぶい橙	普通	体部外面ハケ目　内面ナデ	床面	100% PL 8
2	土師器	壺	［19.4］	(3.0)	－	長石・石英・赤色粒子	明褐	普通	二重口縁壺　口縁部外面ヘラナデ後棒状浮文２条１対貼付（内１条ハガレ）　内面ヘラナデ後櫛歯状工具による連続波状文	覆土	５％
3	土師器	壺	－	(3.0)	－	長石・石英・赤色粒子	明赤褐	普通	口縁部内外面ハケ目後磨き　赤彩　体部外面ハケ目後連続刺突文・櫛歯状工具による連続波状文　内面ヘラナデ	覆土	５％
4	土師器	壺	－	(3.1)	－	長石・石英・赤色粒子	にぶい橙	普通	外面赤彩　７条の櫛歯状工具による直線文・波状文	掘方	５％
5	土師器	壺	－	(3.8)	－	長石・石英・赤色粒子	明褐	普通	外面ハケ目調整後、５条の櫛歯状工具による直線文・波状文	床面	５％
6	土師器	壺	－	(2.3)	－	長石・石英・赤色粒子	明赤褐	普通	口唇部棒状浮文　内面刺突文・３条の櫛歯状工具による波状文	覆土	５％
7	土師器	壺	19.5	(14.0)	－	長石・石英・赤色粒子	にぶい橙	普通	口唇部円形附文　口縁部内外面ハケ目後磨き　体部外面ハケ目後磨き　体部内面ヘラナデ	床面 Ｐ２覆土上層	20% PL 8
8	土師器	甕	16.2	19.3	5.6	長石・石英	橙	普通	折り返し口縁　口縁部内面ハケ目後ナデ　頸部外面ハケ目　内面ヘラ削り　体部外面磨き　下端ヘラ削り　内面ヘラナデ	床面 P11 覆土下層	90% PL 8
9	土師器	甕	14.7	18.8	4.4	長石・石英	にぶい褐	普通	口縁部～体部外面上半ナデ　体部外面下半ヘラ削り　体部内面摩滅	床面	90% PL 8

番号	器　種	径	高さ	孔径	重量	胎　土	色　調	特　　徴	出土位置	備　考
10	管状土錘	2.6	5.0	0.8	(40.33)	長石・石英	にぶい褐	一方向からの穿孔　外面ナデ調整　両端部平滑	覆土	
11	球状土錘	4.1	4.0	0.7	(57.03)	長石・石英	にぶい褐	一方向からの穿孔　外面ナデ調整	床面	
12	球状土錘	3.3	3.4	0.8	29.56	長石・石英	明褐	一方向からの穿孔　外面ナデ調整	床面	
13	球状土錘	3.3	3.2	0.8	(29.79)	長石・石英	にぶい褐	一方向からの穿孔　外面一部剥落	覆土	
14	球状土錘	3.3	3.1	0.5	33.20	長石・石英	にぶい褐	一方向からの穿孔　外面ナデ調整	床面	
15	球状土錘	3.4	3.1	0.5	32.72	長石・石英	橙	一方向からの穿孔　外面ナデ調整	床面	
16	球状土錘	3.1	3.1	0.6	28.19	長石・石英・赤色粒子	にぶい黄橙	一方向からの穿孔　外面ナデ調整	床面	
17	球状土錘	3.1	3.0	0.7	27.81	長石・石英	黒褐	一方向からの穿孔　外面ナデ調整	床面	
18	球状土錘	2.9	2.8	0.5	20.44	長石・石英	にぶい黄橙	一方向からの穿孔　外面ナデ調整	床面	
19	球状土錘	2.9	3.0	0.8	(22.30)	長石・石英	橙	一方向からの穿孔　外面ナデ調整	床面	
20	球状土錘	3.8	3.6	0.8	(30.88)	長石・石英	橙	一方向からの穿孔　一部欠損	覆土	
21	球状土錘	3.1	(2.8)	0.5	(18.03)	長石・石英・赤色粒子	黒褐	一方向からの穿孔　外面ナデ調整　一部欠損	床面	

番号	器　種	長さ	幅	厚さ	重量	材　質	特　　徴	出土位置	備　考
22	磨製石斧	(7.1)	(3.6)	(1.7)	(41.29)	ホルンフェルス	下部に敲打調整　全面研磨　刃部欠損	覆土	

第２号竪穴建物跡（第 14 ～ 18 図　第８表　ＰＬ２・８～ 10）

位置　調査区東部の D11h3 区、標高 21 ｍほどの台地上に位置している。

規模と形状　撹乱のため、確認できた規模は長軸 5.82m、短軸 4.85 ｍである。平面形は隅丸方形と推定でき、主軸方向はＮ－ 13°－Ｅである。壁は高さ最大 45cmで、直立している。

床　確認できた範囲では平坦で、壁際を除いて硬化している。貼床は地山を最大 20cmほど掘り下げ、ロームブロックを多く含む第 11 層を埋土して構築している。

炉　中央部西寄りに位置している。長径 150cm、短径 80cmの不整楕円形で、深さ最大６cmの凹凸がある地床炉である。炉床面は赤変硬化している。

ピット　13 か所。Ｐ１～Ｐ３は深さ 65 ～ 70cmで、配置から主柱穴である。いずれも柱を抜き取っている。覆土は周囲からの流入土である。Ｐ４は深さ 13cmで、配置から出入口施設に伴うピットと考えられる。Ｐ５～Ｐ 13 は深さ 10 ～ 55cmで、性格は不明である。

貯蔵穴　南西コーナー部に位置している。長径 65cm、短径 52cmの楕円形で、深さは 35cmである。底面は皿状で、壁は外傾している。不規則な堆積状況を示していることから、人為堆積である。

覆土　10 層に分層できる。第１～６層はローム粒子とロームブロックを少量含み、周囲からの流入を示す堆積状況から、自然堆積である。第７～９層は、床上に水平に堆積している不自然な状況から、人為堆積と考えられる。

遺物出土状況　土師器片 586 点（坏４、器台 28、高坏８、鉢１、壺 51、甕 493、手捏土器１）、土製品 42 点（管状土錘４、球状土錘 38）、石器２点（砂岩製敲石、粘板岩製砥石）、不明石製品１点が出土している。ほかに混入した石器１点、礫２点、軽石２点が出土している。１・４・８は中央部やや北壁寄り、６は南西コーナー部の覆土下層から、10・15 は北東部の床面から、それぞれ出土している。13 は中央部南寄りと貯蔵穴付近、14 は南西コーナー部の床面とＰ３付近の覆土下層から出土した破片が接合したものである。球状土錘は炉の周辺と北東コーナー寄り、南壁中央部付近、南西コーナー部付近などの３か所から比較的まとまって出土している。出土層位では、床面から覆土下層にかけて出土した遺物が多い。21・24・27・33・37 は覆土上層から出土している。北部と壁際にかけての覆土下層から、焼土層７か所を確認した。また、炉床面から炭化材が２点出土している。樹種同定の結果、試料№１は不明で、試料№２はブナ科クリ属と同定された。年代測定の結果、補正年代で試料№１が 1865 ± 20yrBP、試料№２が 1915 ± 20yrBP であった（付章参照）。

所見　時期は、出土土器から前期前葉と考えられる。

土層解説

1	10YR2/2	黒褐	ローム小Ｄ・粒Ｄ゛、焼土粒Ｄ／粘Ｂ、締Ｂ
2	10YR3/3	暗褐	ローム小Ｄ・粒Ｄ、焼土粒Ｄ、炭化粒Ｄ／粘Ｂ、締Ｂ
3	10YR4/2	灰黄褐	ローム粒Ｄ、焼土粒Ｄ、炭化粒Ｄ゛／粘Ｂ、締Ｂ
4	10YR4/3	にぶい黄褐	ローム小Ｄ・粒Ｃ、焼土小Ｄ・粒Ｄ、炭化粒Ｄ／粘Ｂ、締Ｂ
5	10YR4/4	褐	ローム粒Ｃ、焼土中Ｄ・小Ｄ・粒Ｃ、炭化粒Ｄ／粘Ｂ、締Ｂ
6	10YR4/6	褐	ローム小Ｃ・粒Ｂ、焼土中Ｃ・小Ｂ・粒Ｂ、炭化粒Ｄ／粘Ｂ、締Ｂ
7	10YR5/6	黄褐	ローム中Ｃ・小Ｂ・粒Ａ、焼土中Ｃ・小Ｂ・粒Ｂ、炭化粒Ｃ／粘Ｂ、締Ｂ
8	10YR5/4	にぶい黄褐	ローム小Ｂ・粒Ａ、焼土小Ｃ・粒Ｃ、炭化粒Ｃ／粘Ｂ、締Ｂ
9	10YR2/2	黒褐	ローム粒Ｃ、焼土粒Ｄ、炭化粒Ａ／粘Ｂ、締Ｂ
10	10YR2/3	黒褐	ローム小Ｄ・粒Ｃ、焼土粒Ｃ、炭化粒Ａ／粘Ｃ、締Ｃ
11	10YR4/4	褐	ローム小Ｂ・粒Ｂ、焼土粒Ｃ、炭化物Ｄ・粒Ｃ／粘Ｂ、締Ｂ

炉土層解説

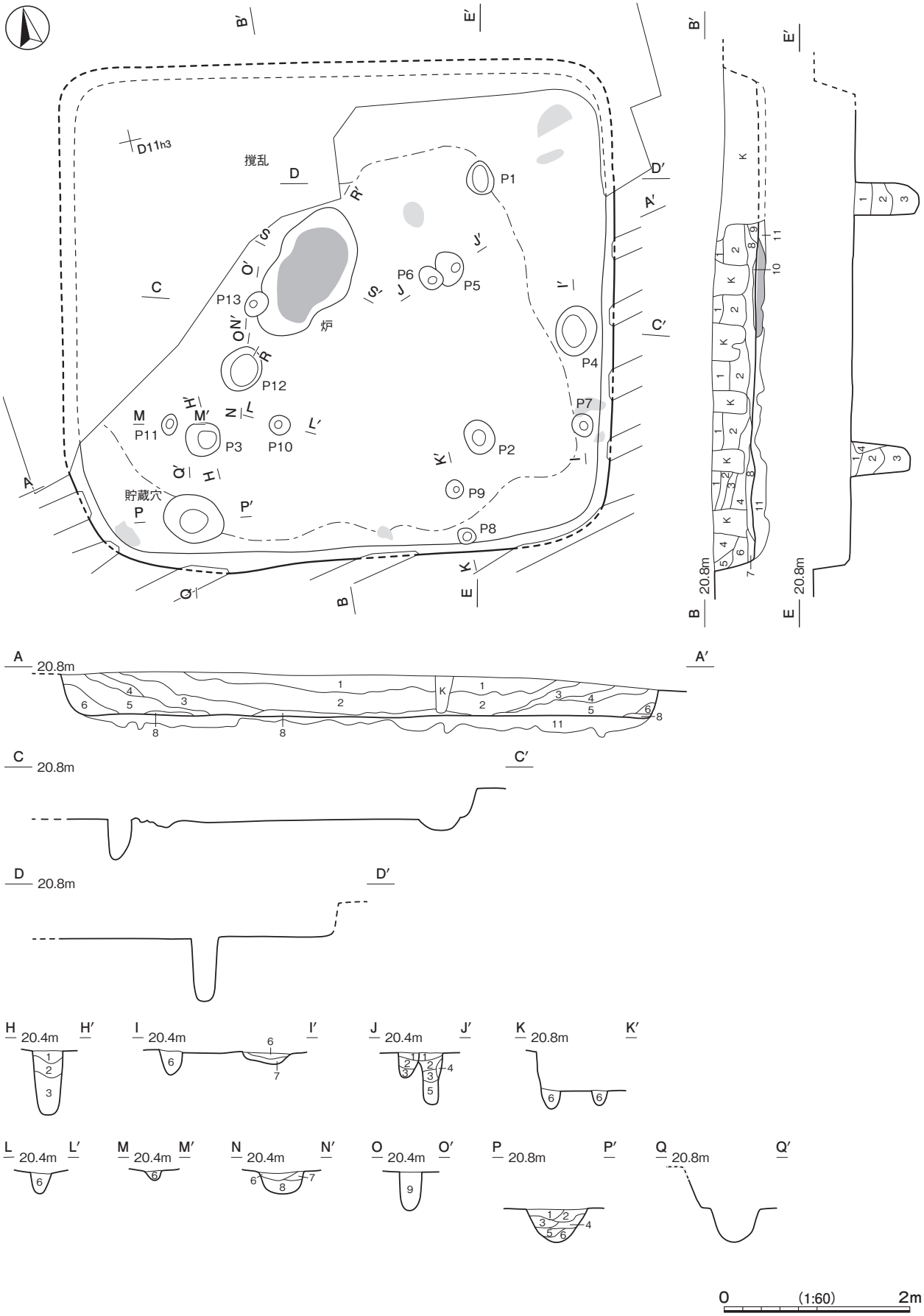
1	10YR2/3	黒褐	ローム小Ｄ・粒Ｃ、焼土粒Ｃ、炭化粒Ａ／粘Ｃ、締Ｃ

ピット土層解説（各ピット共通）

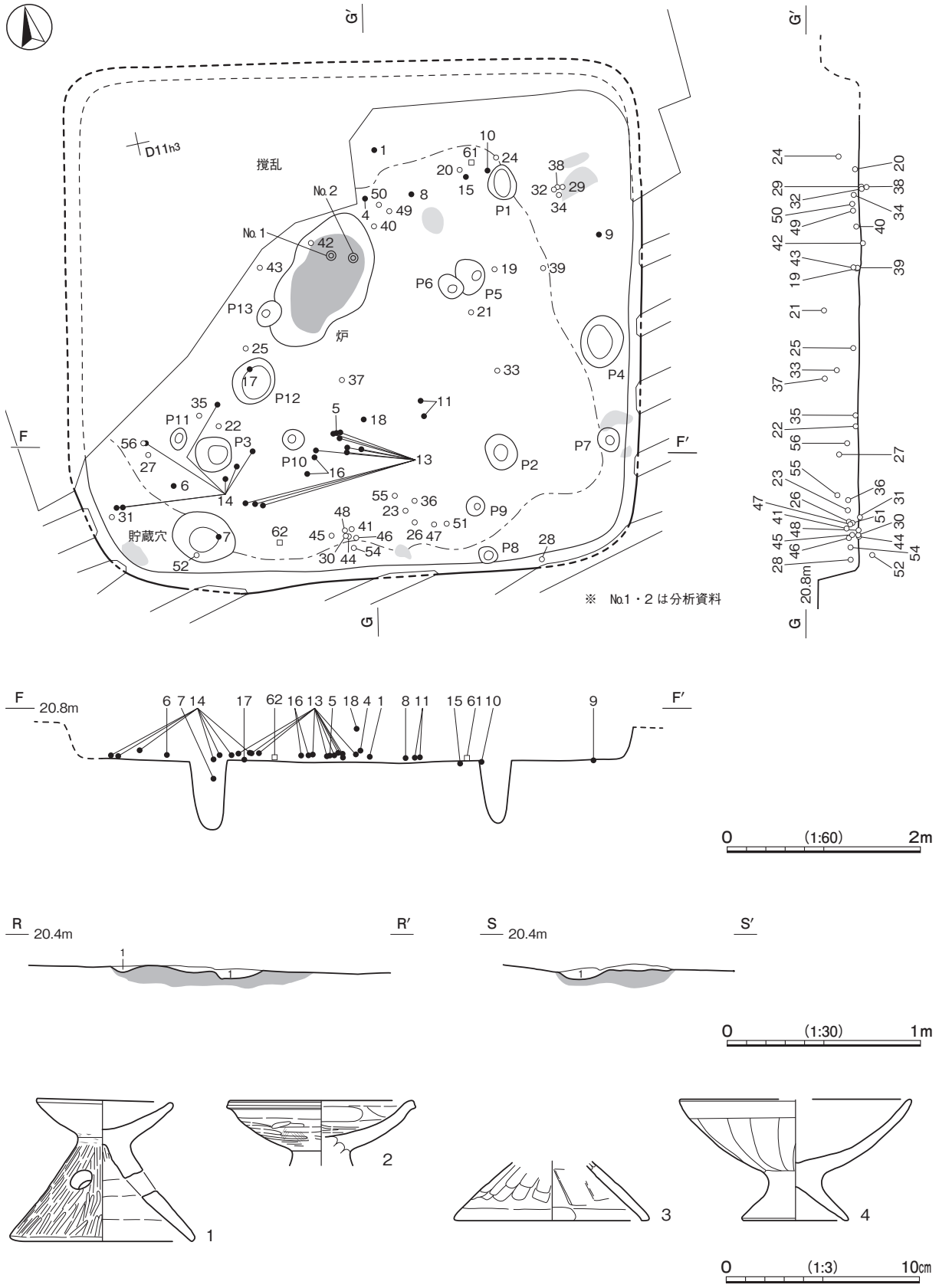
1	10YR3/2	黒褐	ローム小Ｃ・粒Ｃ、炭化粒Ｃ／粘Ｃ、締Ｃ
2	10YR4/3	にぶい黄褐	ローム中Ｃ・小Ｄ・粒Ｃ、炭化粒Ｄ／粘Ｂ、締Ｃ
3	10YR3/4	暗褐	ローム中Ｂ・小Ｂ／粘Ｂ、締Ｃ
4	10YR4/4	褐	ローム中Ｂ・小Ａ／粘Ｂ、締Ｂ
5	10YR3/3	暗褐	ローム小Ｃ・粒Ｃ／粘Ｂ、締Ｂ
6	10YR3/2	黒褐	ローム小Ｃ・粒Ｂ／粘Ｃ、締Ｃ
7	10YR3/4	暗褐	ローム中Ｄ・小Ｃ・粒Ｂ／粘Ｂ、締Ｂ
8	10YR4/6	褐	ローム中Ａ・小Ｂ／粘Ｂ、締Ｂ
9	10YR2/3	黒褐	ローム小Ｄ・粒Ｃ、焼土粒Ｄ、炭化粒Ｄ／粘Ｂ、締Ｂ

貯蔵穴土層解説

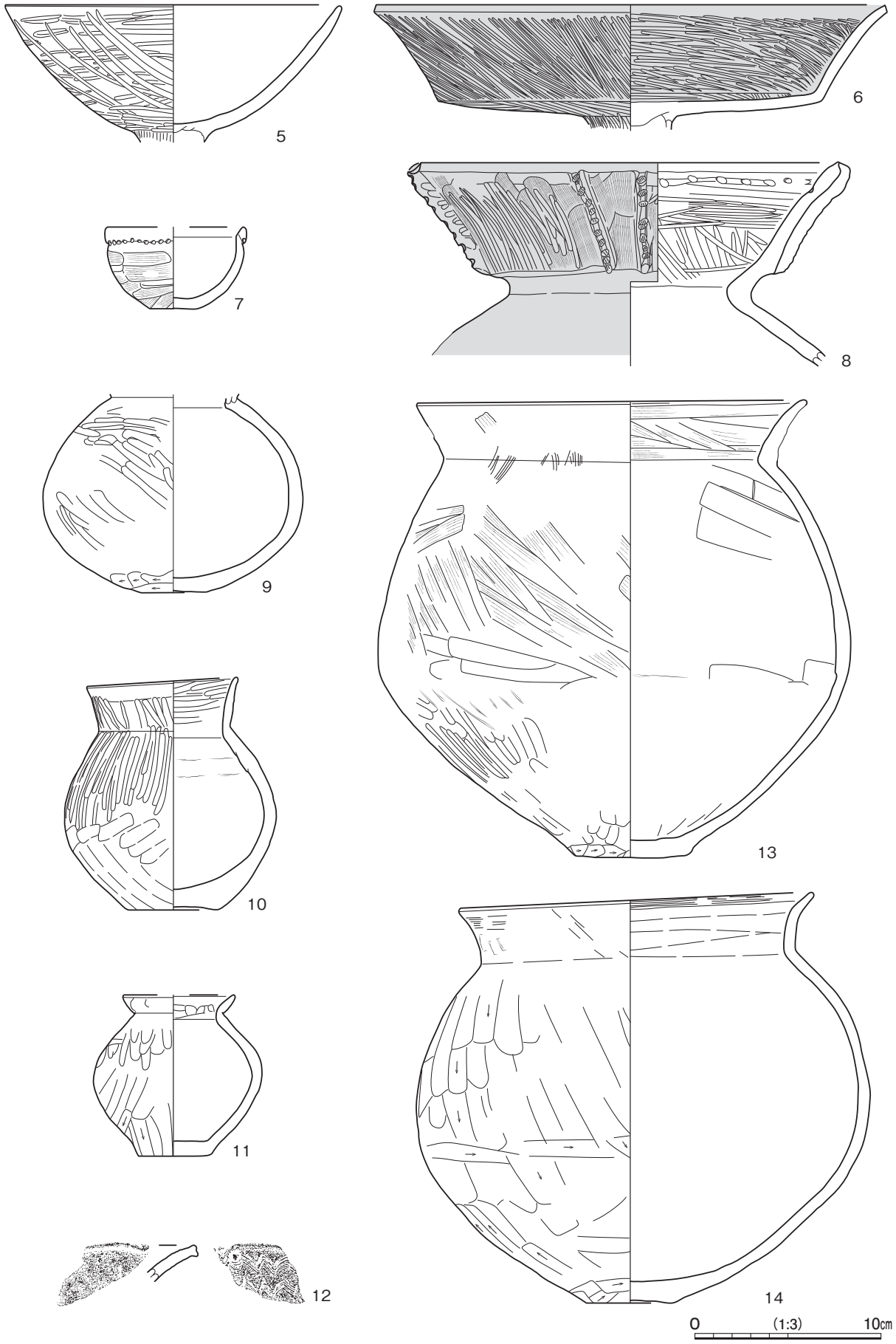
1	10YR3/4	暗褐	ローム小Ｄ・粒Ｃ、焼土小Ｄ・粒Ｄ、炭化粒Ｄ／粘Ｂ、締Ｃ
2	10YR3/2	黒褐	ローム小Ｄ・粒Ｃ、焼土粒Ｃ、炭化粒Ｃ／粘Ｂ、締Ｃ
3	10YR2/3	黒褐	ローム小Ｄ・粒Ｃ、焼土粒Ｄ゛、炭化粒Ｄ／粘Ｂ、締Ｃ
4	10YR3/3	暗褐	ローム小Ｃ・粒Ｃ、炭化粒Ｄ゛／粘Ｂ、締Ｃ
5	10YR3/2	黒褐	ローム小Ｄ・粒Ｃ／粘Ｂ、締Ｃ
6	10YR3/4	暗褐	ローム中Ｄ・小Ｃ・粒Ｂ／粘Ｂ、締Ｂ



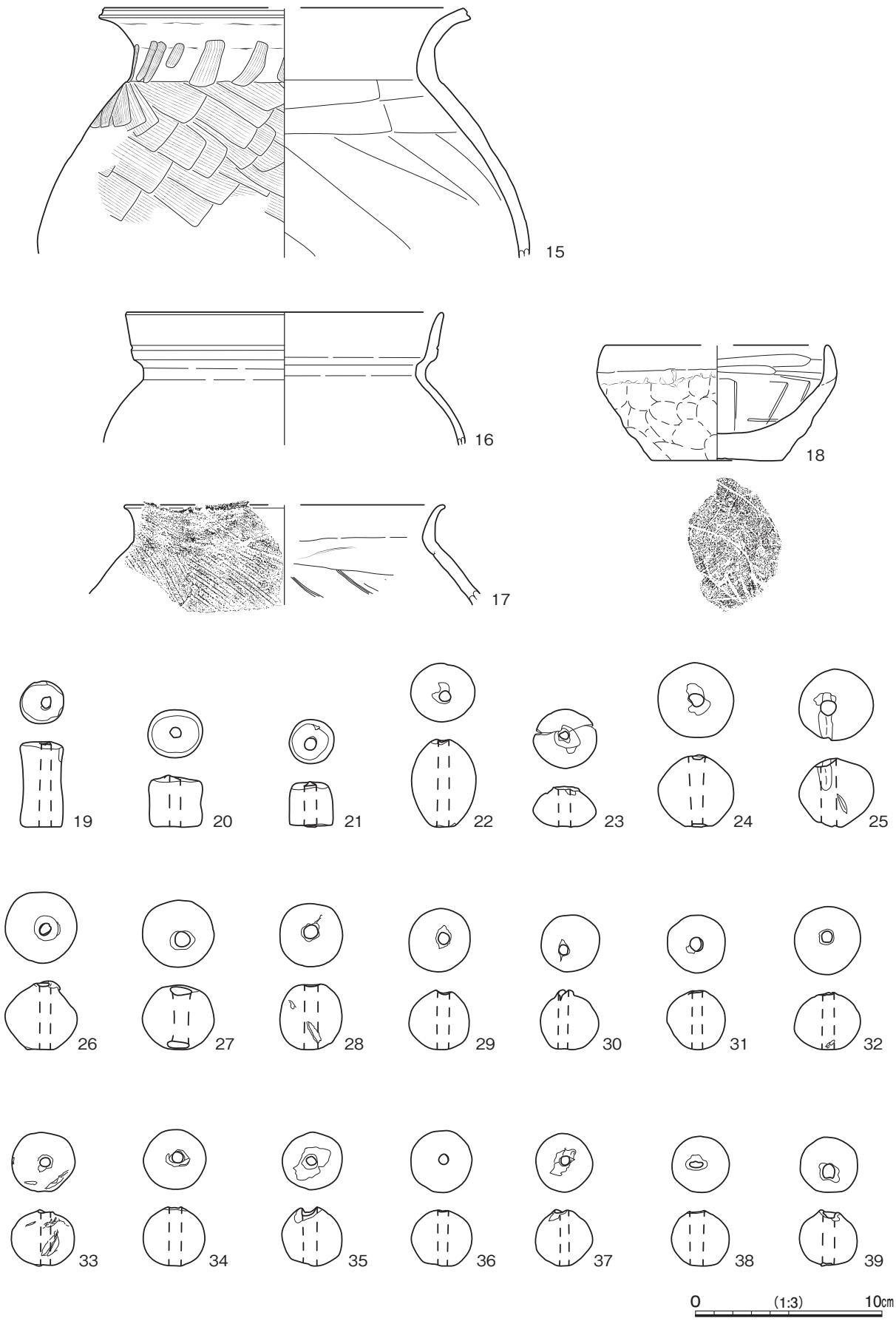
第 14 図　第 2 号竪穴建物跡実測図



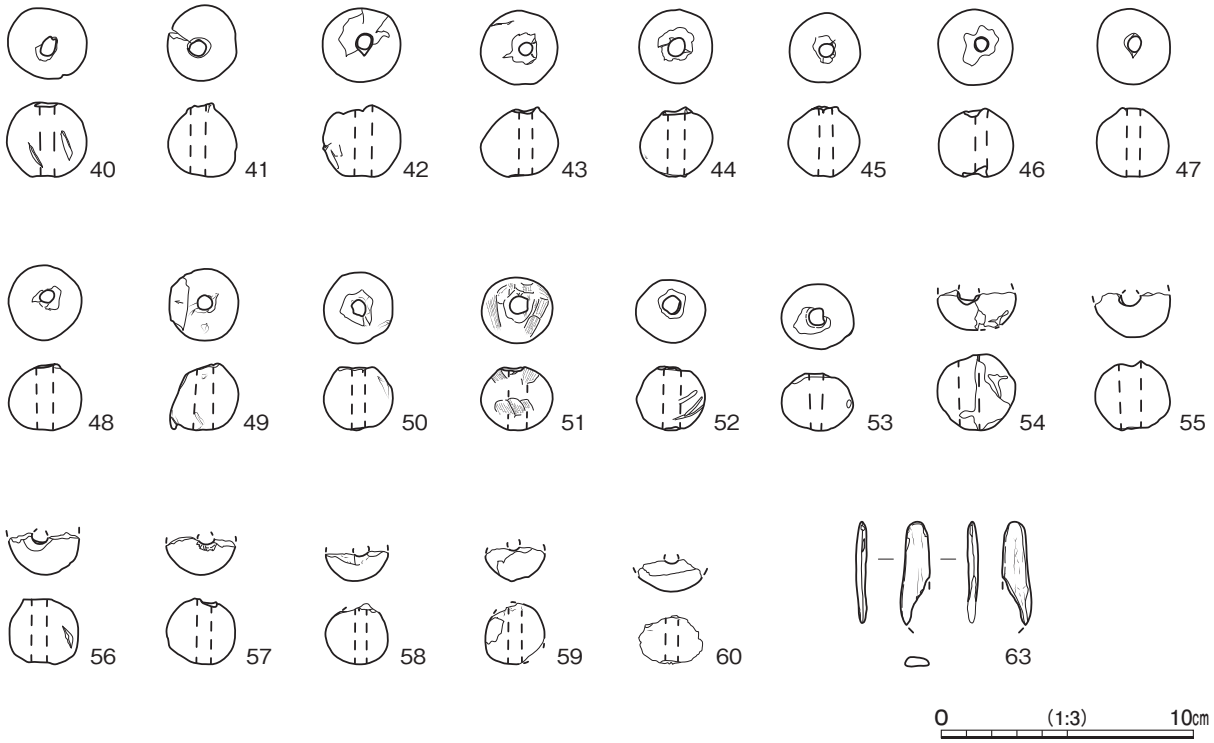
第15図　第2号竪穴建物跡・出土遺物実測図

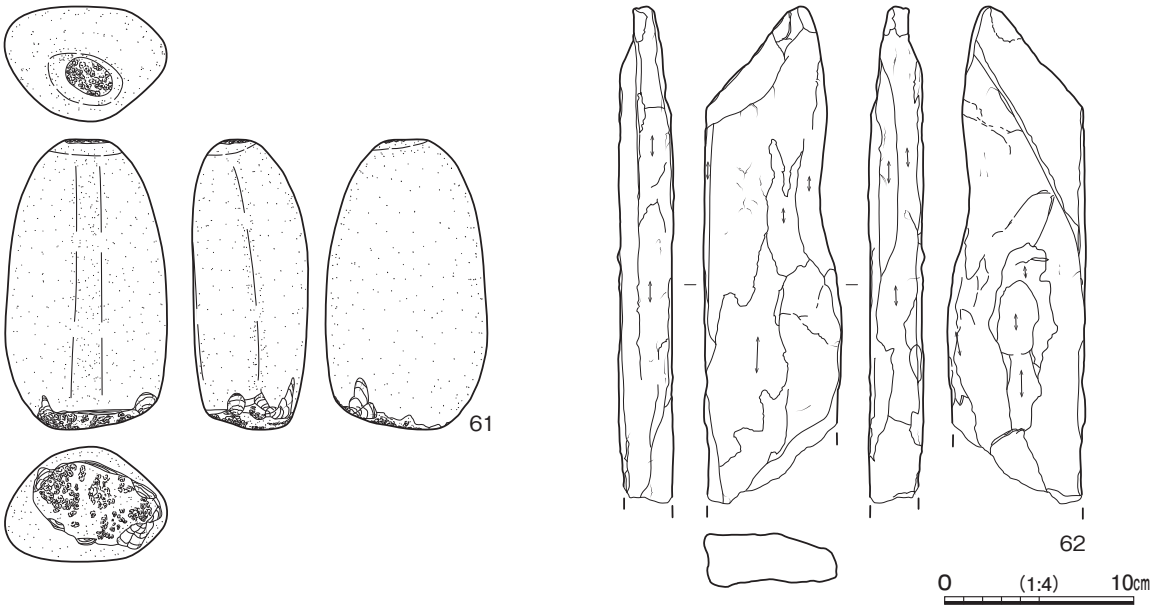


第16図　第2号竪穴建物跡出土遺物実測図（1）



第 17 図　第 2 号竪穴建物跡出土遺物実測図（2）





第 18 図　第２号竪穴建物跡出土遺物実測図（3）

第８表　第２号竪穴建物跡出土遺物一覧（第 15 ～ 18 図）

番号	種　別	器種	口径	器高	底径	胎　　土	色　調	焼成	特　　徴	出土位置	備　考
1	土師器	器台	7.0	7.4	9.2	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	３孔式　脚部外面磨き　内面ハケ目状のナデ	覆土下層	100% PL 8
2	土師器	器台	9.4	(3.4)	－	長石・石英	にぶい橙	普通	口縁部ナデ　坏部外面ハケ目後ヘラナデ 内面ヘラナデ	覆土	20%
3	土師器	器台	－	(3.1)	[10.0]	長石・石英	橙	普通	脚部内外面ヘラナデ	覆土	20%
4	土師器	高坏	[11.8]	6.3	[5.4]	長石・石英	明褐	普通	口縁部ナデ　坏部外面ヘラナデ	覆土下層	30%
5	土師器	高坏	18.0	(7.4)	－	長石・石英	橙	普通	坏部外面粗い磨き　脚部との接点にハケ目残存	覆土下層	50% PL 8
6	土師器	高坏	27.3	(6.8)	－	長石・石英・赤色粒子	明赤褐 橙	普通	北陸系高坏　坏部緻密な磨き　脚部との接合部凸状　内外面赤彩　外面二次焼成により赤彩薄化　煤付着	覆土下層	60% PL 9

番号	種　別	器種	口径	器高	底径	胎　　土	色　調	焼成	特　　徴	出土位置	備　考
7	土師器	鉢	[7.4]	4.4	2.6	長石・石英・黒色粒子	橙	普通	口縁部外面粘土紐下端連続刺突文　体部外面ハケ目　内面ナデ	貯蔵穴 覆土上層	50% PL 8
8	土師器	壺	22.4	(11.0)	－	長石・石英・赤色粒子	にぶい橙	普通	二重口縁壺　口縁部外面ハケ目後棒状浮文貼付内面連続刺突文　内外面磨き　外面赤彩	覆土下層	20% PL 9
9	土師器	壺	－	(10.7)	3.6	長石・石英・白色粒子	明褐	普通	体部外面ヘラナデ　下端ヘラ削り	床面	90% PL 9
10	土師器	壺	8.0	12.5	5.0	長石・石英・赤色粒子・針状物質	にぶい橙	普通	口縁部外面ナデ　体部外面上半磨き　下半ヘラナデ　口縁部内面磨き　体部内面輪積痕　底部ヘラケズリ	床面	95% PL 9
11	土師器	壺	[6.0]	8.7	3.9	長石・石英	にぶい黄橙	普通	口縁部指頭痕　体部外面ヘラナデ　ヘラ削り	覆土下層	70% PL 9
12	土師器	壺	－	(2.0)	－	長石・石英・赤色粒子	明赤褐	普通	二重口縁壺ヵ　口縁部内面櫛歯状工具による波状文	覆土	5％
13	土師器	甕	20.8	24.6	6.1	長石・石英・赤色粒子	にぶい橙	普通	口縁部ハケ目後ナデ　体部外面ハケ目　ヘラナデ　下端ヘラ削り　体部内面ヘラナデ　底部ヘラ削り　外面全体剥落	覆土下層	60% PL 9
14	土師器	甕	18.9	22.1	4.5	長石・石英・赤色粒子・針状物質	にぶい橙 黒褐	普通	口縁部ヘラナデ後ナデ　体部外面ヘラナデ　ヘラ削り	床面 覆土下層	80% PL 9
15	土師器	甕	[19.2]	(13.4)	－	長石・石英・赤色粒子	にぶい黄橙	普通	口縁部・頸部外面ハケ目後ナデ　体部外面ハケ目　内面ヘラナデ	床面	10%
16	土師器	甕	17.0	(7.1)	－	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	北陸系有段口縁甕　口縁部ナデ　口縁部下端凸帯	覆土下層	10% PL 9
17	土師器	甕	[17.0]	(5.4)	－	長石・石英	明褐	普通	口縁部ナデ　体部外面ハケ目　内面ヘラナデ	床面	5％
18	土師器	手捏土器	[11.8]	6.2	[7.0]	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	口縁部外面ナデ　体部外面指頭痕　口縁部・体部内面ヘラナデ　底部木葉痕　内面黒色	覆土上層	50% PL 9

番号	器　種	径	高さ	孔径	重量	胎　土	色　調	特　　徴	出土位置	備　考
19	管状土錘	2.3	4.6	0.7	27.95	長石・石英	にぶい黄橙	一方向からの穿孔　外面ナデ調整	床面	PL10
20	管状土錘	2.9	2.7	0.5	26.05	長石・石英	にぶい黄橙	一方向からの穿孔　外面ナデ調整	床面	PL10
21	管状土錘	2.4	2.3	0.7	15.17	長石・石英	橙	一方向からの穿孔　外面ナデ調整	覆土上層	PL10
22	管状土錘	3.5	4.7	0.6	46.68	長石・石英	にぶい黄橙	一方向からの穿孔　外面ナデ調整	床面	PL10
23	球状土錘	3.4	2.1	0.6	(19.24)	長石・石英・赤色粒子	にぶい黄橙	一方向からの穿孔　外面ナデ調整	覆土下層	PL10
24	球状土錘	4.1	3.9	0.8	60.22	長石・石英	にぶい橙	一方向からの穿孔　外面ナデ調整	覆土上層	PL10
25	球状土錘	4.0	3.7	0.8	50.71	長石・石英	にぶい赤褐	一方向からの穿孔　外面ナデ調整	覆土下層	PL10
26	球状土錘	3.9	3.7	0.8	48.03	長石・石英	にぶい褐	一方向からの穿孔　外面ナデ調整	覆土下層	PL10
27	球状土錘	3.9	3.5	1.1	44.19	長石・石英・赤色粒子	にぶい褐	一方向からの穿孔　外面ナデ調整	覆土上層	PL10
28	球状土錘	3.4	3.5	0.7	42.09	長石・石英	にぶい橙	一方向からの穿孔　外面ナデ調整	覆土下層	PL10
29	球状土錘	3.4	3.2	0.6	32.04	長石・石英	にぶい黄橙	一方向からの穿孔　外面ナデ調整	床面	PL10
30	球状土錘	3.2	3.2	0.7	26.84	長石・石英・赤色粒子	にぶい黄橙	一方向からの穿孔　外面ナデ調整	床面	PL10
31	球状土錘	3.1	3.2	0.8	27.08	長石・石英・赤色粒子	にぶい橙	一方向からの穿孔　外面ナデ調整	床面	PL10
32	球状土錘	3.7	3.1	0.7	36.66	長石・石英	にぶい黄褐	一方向からの穿孔　外面ナデ調整	床面	PL10
33	球状土錘	3.4	3.1	0.5	29.92	長石・石英	にぶい褐	一方向からの穿孔　外面ナデ調整	覆土上層	PL10
34	球状土錘	3.4	3.1	0.7	32.75	長石・石英	にぶい黄橙	一方向からの穿孔　外面ナデ調整	床面	PL10
35	球状土錘	3.2	3.1	0.8	29.36	長石・石英	にぶい黄橙	一方向からの穿孔　外面ナデ調整	床面	PL10
36	球状土錘	3.3	3.0	0.5	31.48	長石・石英	にぶい黄橙	一方向からの穿孔　外面ナデ調整	覆土下層	PL10
37	球状土錘	3.2	3.0	0.5	23.44	長石・石英・赤色粒子	にぶい褐	一方向からの穿孔　外面ナデ調整	覆土上層	PL10
38	球状土錘	3.1	3.0	0.7	28.41	長石・石英・赤色粒子	にぶい橙	一方向からの穿孔　外面ナデ調整	床面	PL10
39	球状土錘	3.1	3.0	0.8	25.02	長石・石英・赤色粒子	にぶい橙	一方向からの穿孔　外面ナデ調整	床面	PL10
40	球状土錘	3.1	3.0	0.8	25.52	長石・石英・赤色粒子・針状物質	にぶい橙	一方向からの穿孔　外面ナデ調整	床面	PL10
41	球状土錘	3.0	2.9	0.6	19.35	長石・石英・赤色粒子	橙	一方向からの穿孔　外面ナデ調整	覆土下層	PL10
42	球状土錘	3.1	2.8	0.8	22.68	長石・石英・赤色粒子	にぶい黄橙	一方向からの穿孔　外面ナデ調整	床面	PL10
43	球状土錘	3.1	2.8	0.6	22.48	長石・石英・赤色粒子	にぶい黄褐	一方向からの穿孔　外面ナデ調整	床面	PL10
44	球状土錘	2.9	2.8	0.6	19.30	長石・石英・赤色粒子	にぶい橙	一方向からの穿孔　外面ナデ調整	床面	PL10
45	球状土錘	2.9	2.8	0.6	19.49	長石・石英	にぶい黄褐	一方向からの穿孔　外面ナデ調整	覆土下層	PL10
46	球状土錘	3.0	2.7	0.5	21.43	長石・石英・赤色粒子	にぶい橙	一方向からの穿孔　外面ナデ調整	覆土下層	PL10
47	球状土錘	3.0	2.7	0.9	20.72	長石・石英・赤色粒子	橙	一方向からの穿孔　外面ナデ調整	覆土下層	PL10
48	球状土錘	3.0	2.7	0.8	19.75	長石・石英	にぶい褐	一方向からの穿孔　外面ナデ調整	床面	PL10
49	球状土錘	2.8	2.7	0.8	18.05	長石・石英	橙	一方向からの穿孔　外面ナデ調整　一部削り	覆土下層	PL10

番号	器　種	径	高さ	孔径	重量	胎　土	色　調	特　　徴	出土位置	備　考
50	球状土錘	2.8	2.5	0.5	17.60	長石・石英	橙	一方向からの穿孔　外面ナデ調整	覆土下層	PL10
51	球状土錘	2.9	2.5	0.7	17.24	長石・石英	明黄褐	一方向からの穿孔　外面ナデ調整　ハケ状工具痕	覆土下層	PL10
52	球状土錘	2.8	2.5	0.8	14.68	長石・石英	橙	一方向からの穿孔　外面ナデ調整	貯蔵穴 覆土上層	PL10
53	球状土錘	2.9	2.3	0.6	15.11	長石・石英・赤色粒子・針状鉱物	にぶい褐	一方向からの穿孔	覆土	
54	球状土錘	［3.1］	3.0	［0.8］	（11.27）	長石・石英・赤色粒子	褐灰	一方向からの穿孔　外面ナデ調整　一部欠損	覆土下層	PL10
55	球状土錘	［3.0］	2.8	［0.8］	（10.66）	長石・石英・赤色粒子	にぶい橙	一方向からの穿孔　外面ナデ調整　一部欠損	覆土上層	PL10
56	球状土錘	［2.8］	2.6	［0.6］	（10.14）	長石・石英・赤色粒子・針状物質	にぶい橙	一方向からの穿孔　外面ナデ調整　一部欠損	覆土下層	PL10
57	球状土錘	［2.8］	2.6	［0.6］	（8.94）	長石・石英	にぶい褐	一方向からの穿孔　外面ナデ調整　一部欠損	覆土	PL10
58	球状土錘	［2.5］	2.4	［0.5］	（5.06）	長石・石英・赤色粒子	灰黄褐	一方向からの穿孔　外面ナデ調整　一部欠損	覆土	PL10
59	球状土錘	［2.4］	（2.4）	［0.5］	（5.49）	長石・石英・赤色粒子	灰黄褐	一方向からの穿孔　外面ナデ調整　一部欠損	覆土	PL10
60	球状土錘	（2.5）	（1.9）	［0.5］	（5.10）	長石・石英	にぶい橙	一方向からの穿孔　外面ナデ調整　一部欠損	覆土	PL10

番号	器　種	長さ	幅	厚さ	重量	材　　質	特　　徴	出土位置	備　考
61	敲石	15.4	8.5	6.1	1157.8	砂岩	両端部敲打痕	床面	PL10
62	砥石	（26.3）	7.3	2.8	（810.6）	粘板岩	砥面４面　表面平滑な研磨痕　裏面溝状の研磨痕　右側面凸状の研磨痕　玉砥石ヵ	床面	PL10
63	不明石製品	（4.1）	（1.05）	0.45	（2.82）	片麻岩	全面研磨痕・光沢	覆土	PL10

第３号竪穴建物跡（第 19 ～ 21 図　第９表　ＰＬ２・３・10）

位置　調査区東部の D11h6 区、標高 20 ｍほどの台地上に位置している。

重複関係　第 40 号土坑、第４号墳の周溝に掘り込まれている。

規模と形状　撹乱のため、確認できた規模は長軸 8.40m、短軸 7.50 ｍである。平面形は長方形と推定され、主軸方向はＮ－４°－Ｅである。壁の高さは最大 45㎝で直立している。

床　確認できた範囲は平坦で、中央部西寄りが硬化している。貼床はロームブロックを多く含む第 11 層を埋土して構築している。南西コーナー部の床面が東西 12㎝、南北 15㎝の範囲で焼けている。

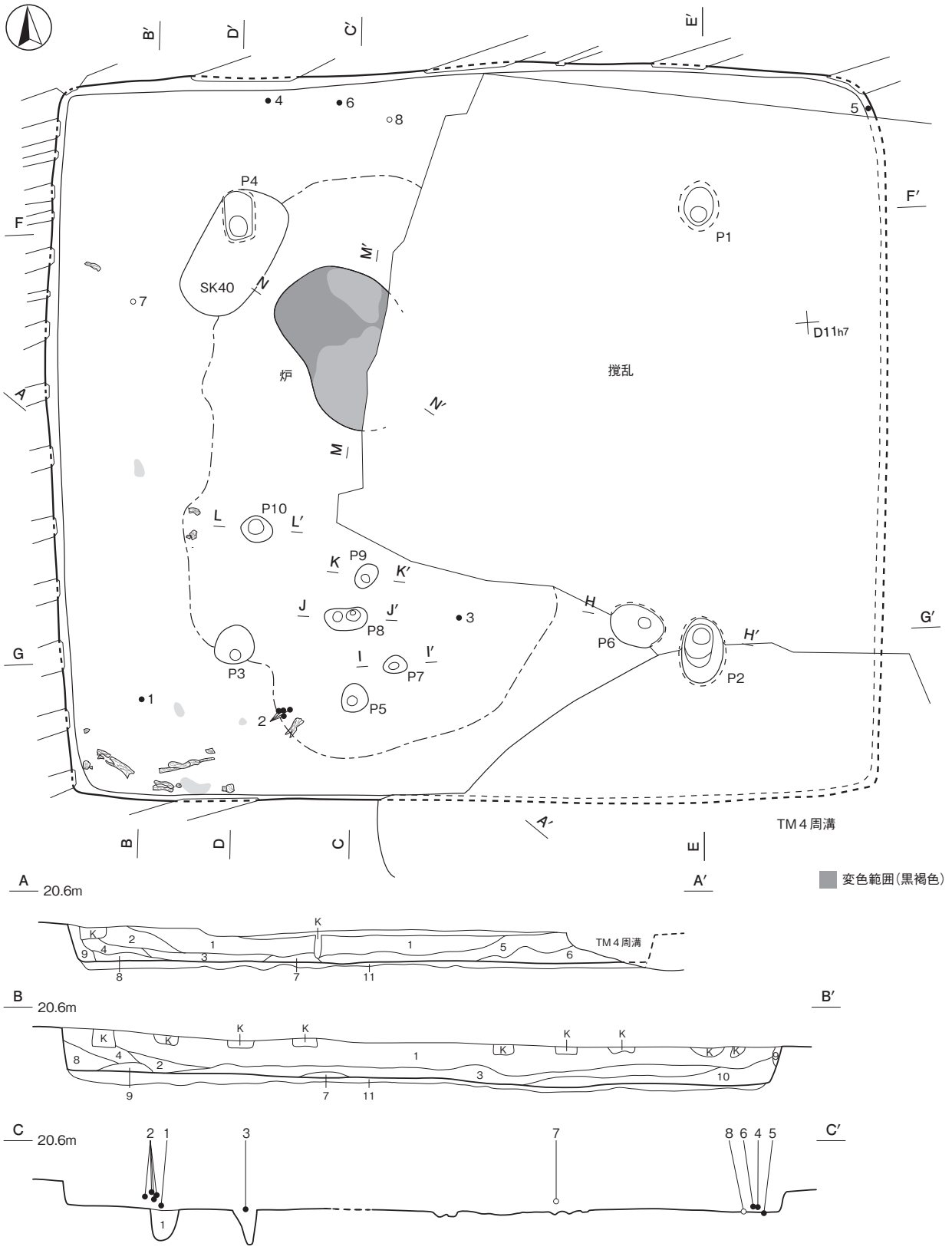
炉　中央部北西寄りに位置している。撹乱のため、確認できた規模は長径 175㎝、短径 118㎝で、平面形は不整楕円形と推定される。炉床面は最大６㎝の凹凸があり、全体的に焼けて黒褐色に変色して硬化している。また、北側の長径 70㎝、短径 35㎝の範囲と、南側の長径 106㎝、短径 62㎝の範囲は赤変している。

ピット　10 か所。Ｐ１～Ｐ４は、深さ 98 ～ 133㎝で、配置から主柱穴である。Ｐ５は深さ 34㎝で、配置から出入口施設に伴うピットと考えられる。Ｐ６～Ｐ 10 は、深さ 19 ～ 56㎝で、性格は不明である。

覆土　10 層に分層できる。第１～３層は周囲からの流入を示す堆積状況から、自然堆積で、第４層以下は不規則な堆積状況から、人為堆積である。

遺物出土状況　土師器片 135 点（坏１、蓋１、器台４、高坏 13、壺 35、甕 80、台付ミニチュア１）、土製品２点（球状土錘）が出土している。ほかに混入した須恵器片２点、石器２点、礫２点が出土している。１は南西部の床面から逆位の状態で、４は北壁際の覆土下層から斜位の状態で出土している。また、南と西壁際の床面から、炭化材と焼土塊が出土している。焼土塊の厚みは、最大 10㎝である。

所見　時期は、出土土器から前期前葉と考えられる。南西コーナー部の床面が焼けていることや、壁際の床面から炭化材が出土していることから、廃絶時に建物の部材を焼却した可能性がある。

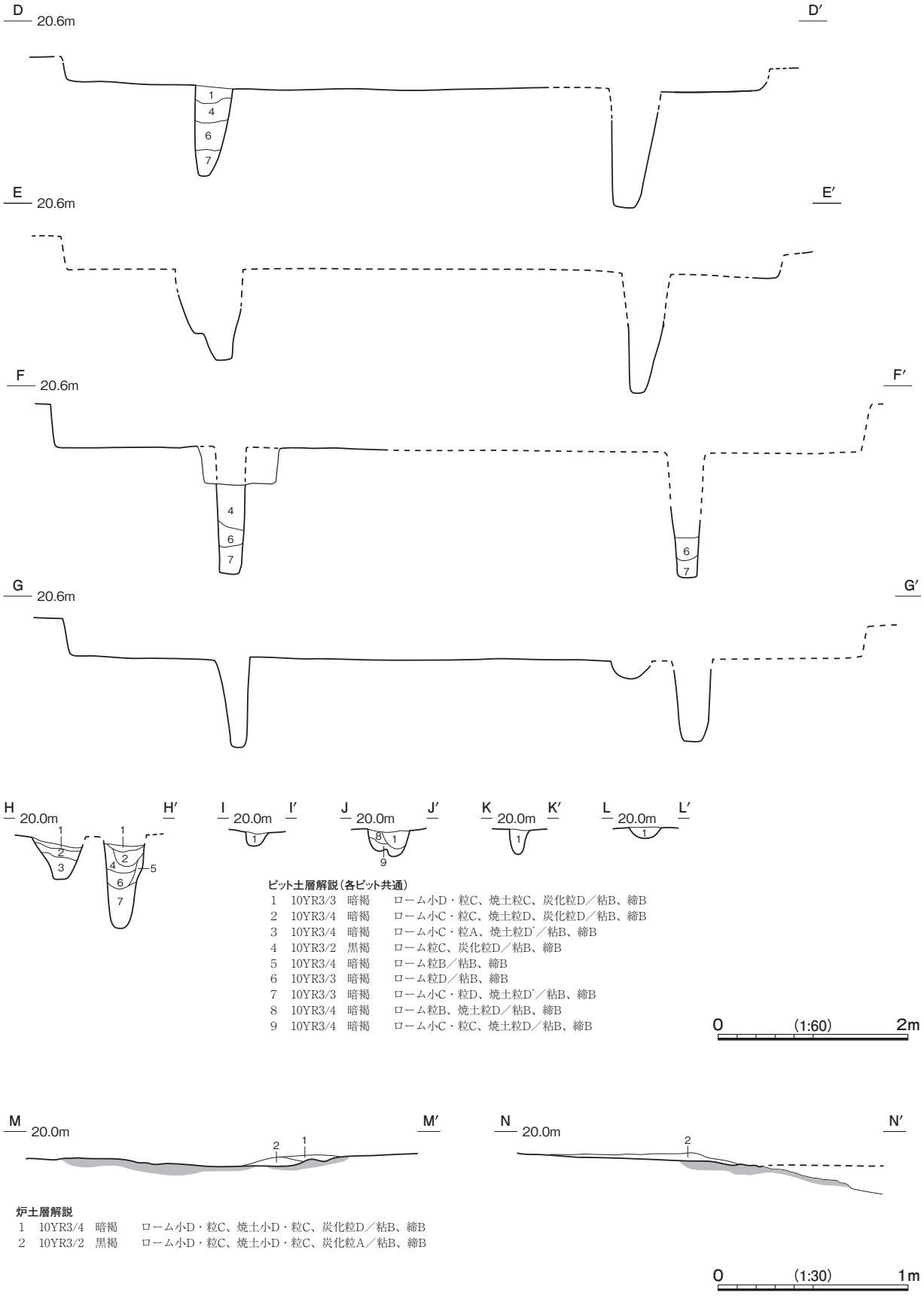


土層解説

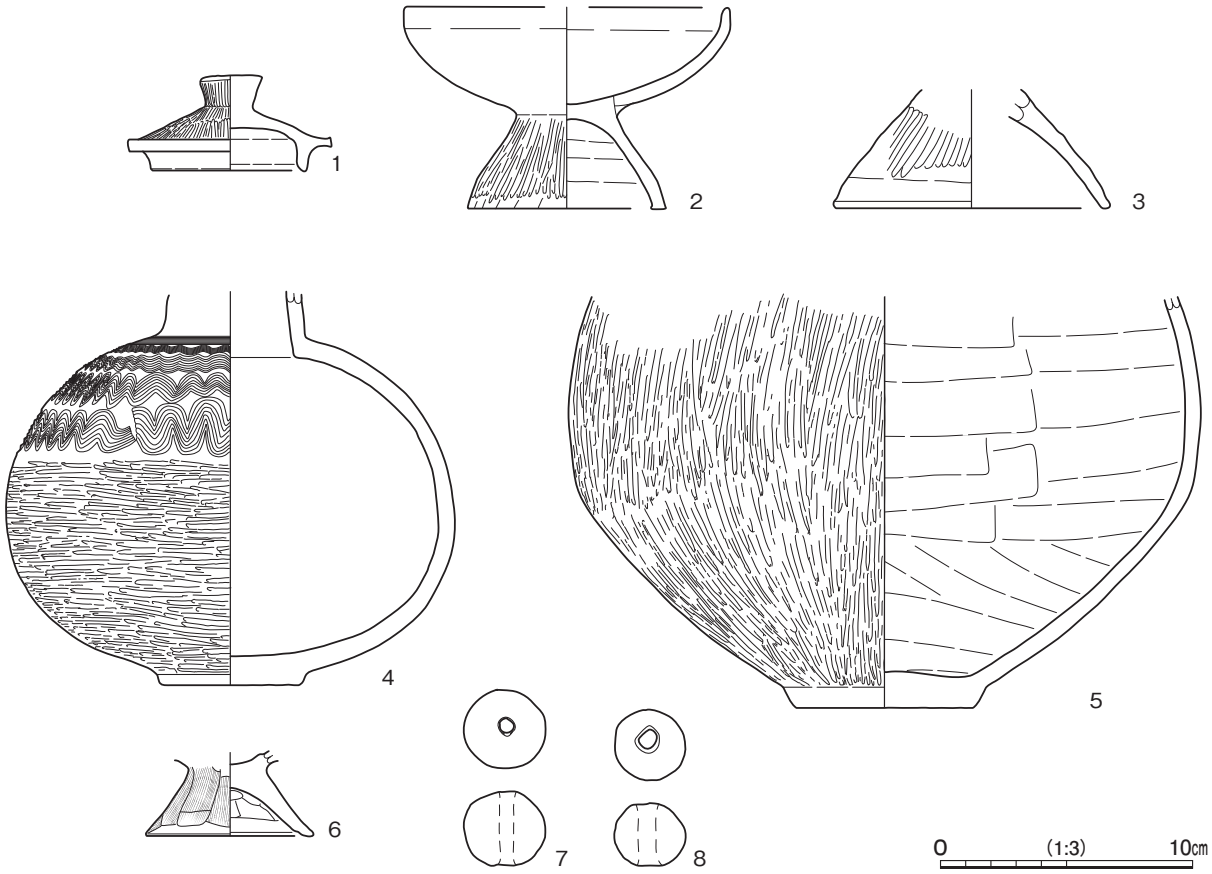
1	10YR2/2	黒褐	ローム小D・粒D′、焼土粒D／粘B、締B
2	10YR3/3	暗褐	ローム小D・粒D、焼土粒D、炭化粒D／粘B、締B
3	10YR4/2	灰黄褐	ローム粒D、焼土粒D、炭化粒D′／粘B、締B
4	10YR4/3	にぶい黄褐	ローム小D・粒C、焼土中D・小D・粒D、炭化粒D／粘B、締B
5	10YR3/4	暗褐	ローム粒C、焼土中D・小D・粒C、炭化粒D／粘B、締B
6	10YR3/4	暗褐	ローム中C・小C・粒B、焼土中C・小B・粒B、炭化粒D／粘B、締B
7	10YR4/3	にぶい黄褐	ローム中C・小B・粒A、焼土中C・小B・粒B、炭化粒C／粘B、締B
8	10YR2/2	黒褐	ローム粒C、焼土粒D、炭化粒A／粘B、締B
9	10YR4/3	にぶい黄褐	ローム小B・粒A、焼土小C・粒C、炭化粒C／粘B、締B
10	10YR3/4	暗褐	ローム小B・粒B、焼土粒C、炭化物D・粒C／粘B、締B
11	10YR4/6	褐	ローム大C・中B・小B・粒B、炭化粒D／粘B、締B

0 (1:60) 2m

第 19 図　第３号竪穴建物跡実測図（1）



第 20 図　第 3 号竪穴建物跡実測図（2）



第 21 図　第３号竪穴建物跡出土遺物実測図

第９表　第３号竪穴建物跡出土遺物一覧（第 21 図）

番号	種　別	器種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	特　　徴	出土位置	備　考
1	土師器	蓋	6.0	3.8	－	長石・石英	橙	普通	摘み部上面を除いて外面磨き　内面ナデ	床面	90% PL10
2	土師器	高坏	［12.8］	8.0	［7.8］	長石・石英	にぶい褐	普通	坏部外面摩滅　脚部外面磨き　内面ナデ	覆土下層	40% PL10
3	土師器	高坏	－	(4.7)	［10.8］	長石・石英・赤色粒子・黒色粒子	にぶい褐	普通	坏部外面磨き　内面ナデ	床面	20%
4	土師器	壺	－	(15.6)	5.7	長石・石英	にぶい橙	普通	体部外面上半８条の櫛歯状工具による直線文・波状文　外面下半磨き　内面摩滅	覆土下層	90% PL10
5	土師器	壺	－	(16.3)	7.0	長石・石英	明黄褐	普通	体部外面磨き　内面ヘラナデ	床面	40%
6	土師器	台付ﾐﾆﾁｭｱ	－	(3.4)	6.6	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	脚部外面ハケ目　内面ヘラナデ	覆土下層	10% PL10

番号	器　種	径	高さ	孔径	重量	胎　土	色　調	特　　徴	出土位置	備　考
7	球状土錘	3.2	2.9	0.7	29.06	長石・石英	にぶい黄橙	一方向からの穿孔　外面ナデ調整	覆土下層	
8	球状土錘	2.8	2.8	0.9	18.27	長石・石英・赤色粒子	にぶい褐	一方向からの穿孔　外面ナデ調整	床面	

第４号竪穴建物跡（第 22 図　第 10 表　ＰＬ３）

位置　調査区東部の D12g4 区、標高 20 mほどの台地上に位置している。

重複関係　第 39・49 号土坑を掘り込み、第 34・37 号土坑に掘り込まれている。本跡上に第５号墳が築造されている。

規模と形状　規模は長軸 4.76m、短軸 4.62 mで、平面形は隅丸方形である。主軸方向はＮ－２°－Ｗで、壁の高さは最大 32cmで、直立している。

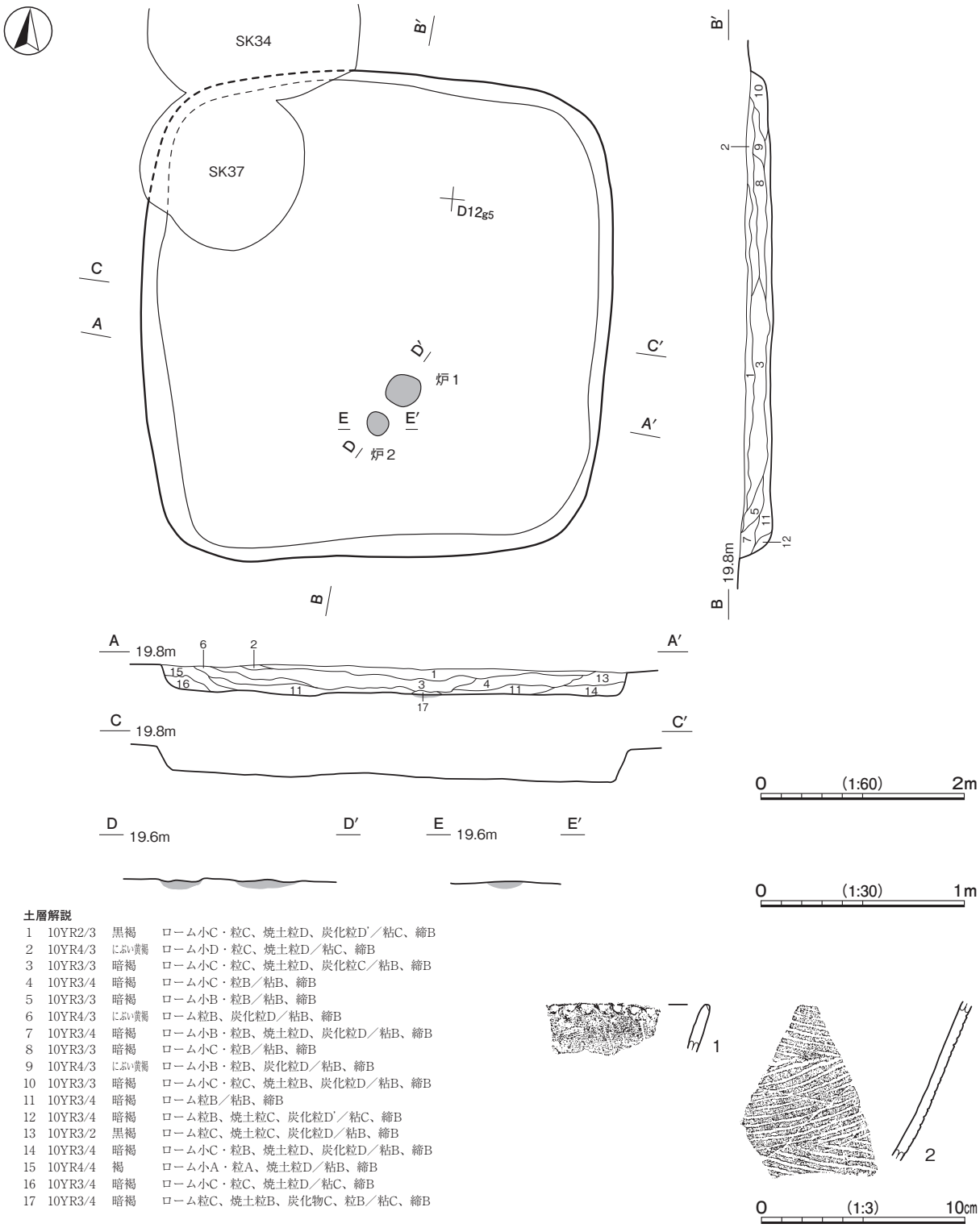
床　平坦で、硬化はしていない。

炉　２か所。いずれも中央部南寄りに位置している。炉１は径 36㎝、炉２は径 21㎝の円形で、床面と同じ高さの地床炉である。炉床面は凹凸があり、赤変硬化している。

覆土　17 層に分層できる。不自然な堆積状況から、人為堆積である。

遺物出土状況　弥生土器片 12 点（広口壺）、土師器片 22 点（壺６、甕 16）が出土している。ほかに混入した石器２点、礫１点が出土している。

所見　時期は、出土土器から前期前葉と考えられる。



土層解説

1	10YR2/3	黒褐	ローム小C・粒C、焼土粒D、炭化粒D′／粘C、締B
2	10YR4/3	にぶい黄褐	ローム小D・粒C、焼土粒D／粘C、締B
3	10YR3/3	暗褐	ローム小C・粒C、焼土粒D、炭化粒C／粘B、締B
4	10YR3/4	暗褐	ローム小C・粒B／粘B、締B
5	10YR3/3	暗褐	ローム小B・粒B／粘B、締B
6	10YR4/3	にぶい黄褐	ローム粒B、炭化粒D／粘B、締B
7	10YR3/4	暗褐	ローム小B・粒B、焼土粒D、炭化粒D／粘B、締B
8	10YR3/3	暗褐	ローム小C・粒B／粘B、締B
9	10YR4/3	にぶい黄褐	ローム小B・粒B、炭化粒D／粘B、締B
10	10YR3/3	暗褐	ローム小C・粒C、焼土粒B、炭化粒D／粘B、締B
11	10YR3/4	暗褐	ローム粒B／粘B、締B
12	10YR3/4	暗褐	ローム粒B、焼土粒C、炭化粒D′／粘C、締B
13	10YR3/2	黒褐	ローム粒C、焼土粒C、炭化粒D／粘B、締B
14	10YR3/4	暗褐	ローム小C・粒B、焼土粒D、炭化粒D／粘B、締B
15	10YR4/4	褐	ローム小A・粒A、焼土粒D／粘B、締B
16	10YR3/4	暗褐	ローム小C・粒C、焼土粒D／粘C、締B
17	10YR3/4	暗褐	ローム粒C、焼土粒B、炭化物C、粒B／粘C、締B

第 22 図　第４号竪穴建物跡・出土遺物実測図

第 10 表　第 4 号竪穴建物跡出土遺物一覧（第 22 図）

番号	種　別	器種	口径	器高	底径	胎　　土	色　調	焼成	特　　徴	出土位置	備　考
1	土師器	壺	－	(2.4)	－	長石・石英	明赤褐	普通	口唇部刻み	覆土	5 %
2	弥生土器	広口壺	－	(7.8)	－	長石・石英	橙	普通	体部外面附加条軸縄不明付加 1 条	覆土	5 %

第 11 表　古墳時代の竪穴建物跡一覧

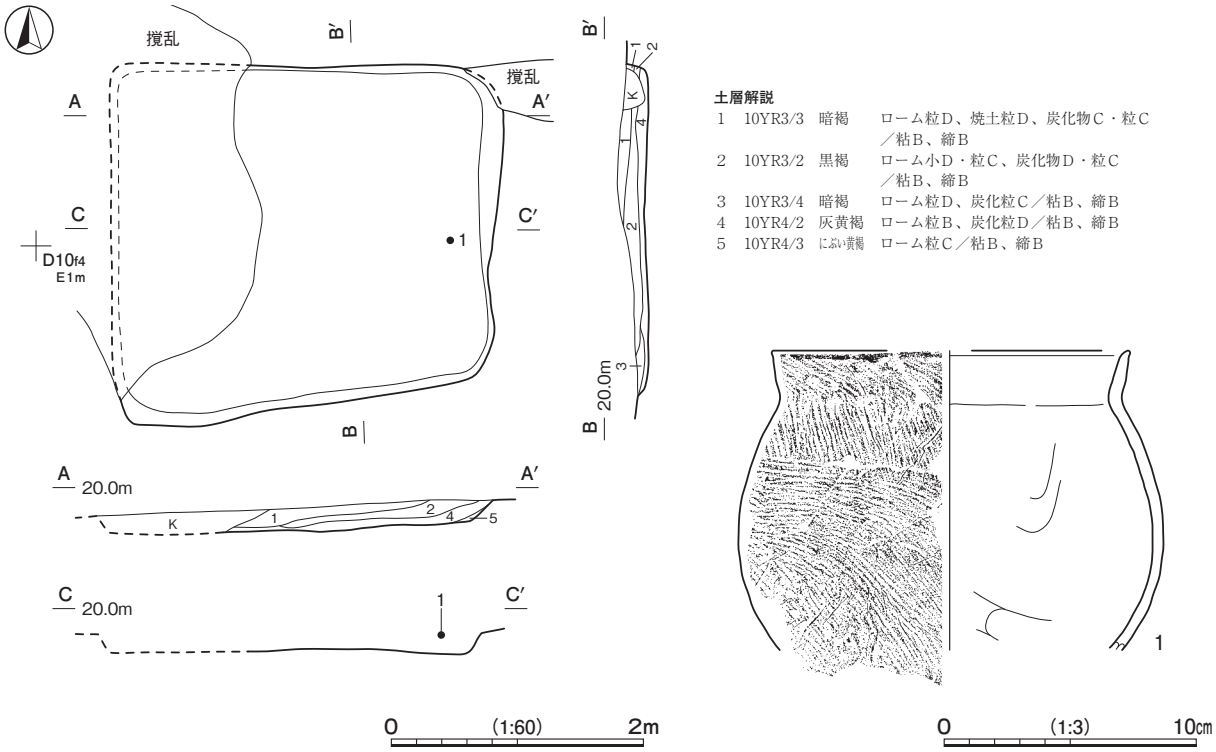
番号	位 置	主軸方向	平面形	規　模	壁 高 (cm)	床面	壁溝	内　部　施　設					覆土	主な出土遺物	時　期	備　考
				長軸×短軸 (m)				主柱穴	出入口	ピット	炉	貯蔵穴				
1	D10g9	N － 10° － W	[隅丸方形]	9.83 × [9.73]	36 ～ 44	平坦	[全周]	3	1	8	－	1	人為	弥生土器　土師器 土製品　石器	前期前葉	TP 1 →本跡
2	D11h3	N － 13° － E	[隅丸方形]	(5.82) × (4.85)	34 ～ 45	平坦	－	3	1	9	炉 1	1	自然 人為	土師器　土製品 石器　石製品	前期前葉	
3	D11h6	N － 4 ° － E	[長方形]	(8.40) × 7.50	22 ～ 45	平坦	－	4	1	5	炉 1	－	人為	土師器　土製品	前期前葉	本跡→ SK40、TM 4
4	D12g4	N － 2 ° － W	隅丸方形	4.76 × 4.62	18 ～ 32	平坦	－	－	－	－	炉 2	－	人為	弥生土器　土師器	前期前葉	SK39・49 →本跡 → SK34・37、TM 5

(2) 竪穴遺構

第 1 号竪穴遺構（第 23 図　第 12 表　ＰＬ３・11）

位置　調査区中央部の D10e4 区、標高 20 m ほどの台地上に位置している。

規模と形状　西部が撹乱のため、確認できた規模は長軸 3.13m、短軸 2.77 m である。平面形は不整隅丸長方形と推定でき、主軸方向はＮ－ 90° である。壁は高さ 18㎝で、外傾している。



第 23 図　第 1 号竪穴遺構・出土遺物実測図

第 12 表　第 1 号竪穴遺構出土遺物一覧（第 23 図）

番号	種　別	器種	口径	器高	底径	胎　　土	色　調	焼成	特　　徴	出土位置	備　考
1	土師器	甕	[14.0]	(11.9)	－	長石・石英	明赤褐	普通	口縁部外面斜位叩き　内面ナデ　体部外面上部縦位・中央部横位・下部斜位叩き　内面ヘラナデ	覆土上層	20% PL11

床　ほぼ平坦で、硬化はしていない。

覆土　５層に分層できる。不自然な堆積状況から、人為堆積である。

遺物出土状況　土師器片 29 点（甕）が出土している。ほかに混入した縄文土器片２点、弥生土器片１点が出土している。１は東壁寄りの覆土上層から出土している。

所見　時期は、出土土器から前期前葉と考えられる。性格は、簡易的な倉庫と考えられる。

(3) 土　坑

出土遺物と重複関係、覆土の様相から古墳時代と考えられる 12 基のうち３基について記載し、そのほかは実測図（第 29・30 図）と一覧表（第 15 表）で掲載する。

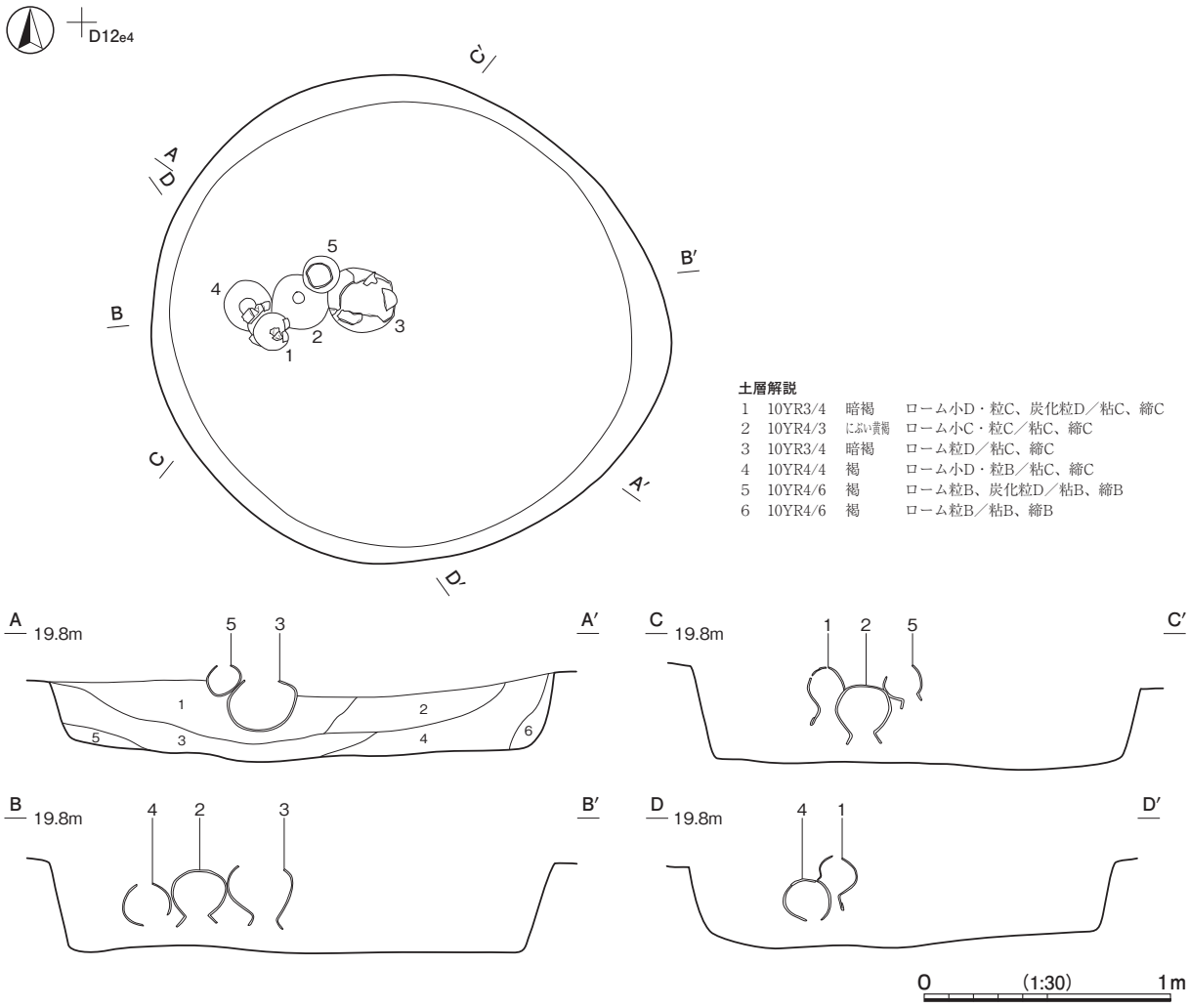
第 30 号土坑（第 24 ～ 26 図　第 13 表　ＰＬ３・11）

位置　調査区北東部の D12e4 区、標高 20 mほどの台地上に位置している。

重複関係　本跡上に第５号墳が構築されている。

規模と形状　長軸 2.12 m、短軸 1.96 mの円形である。深さは 37㎝で、底面はほぼ平坦である。壁は外傾している。

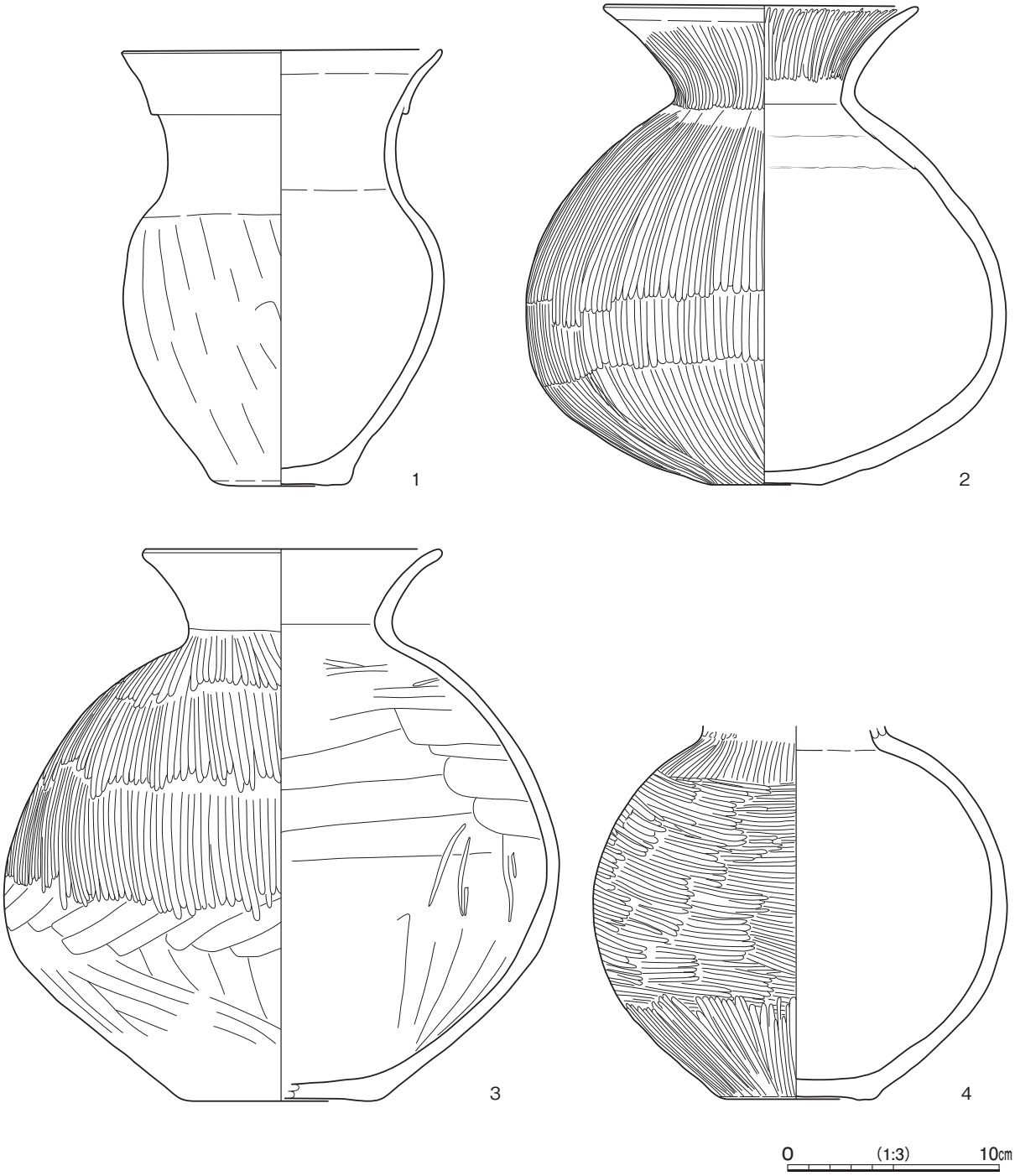
覆土　６層に分層できる。壁際の第５・６層を除き、覆土の締まりが弱いことから、人為堆積である。



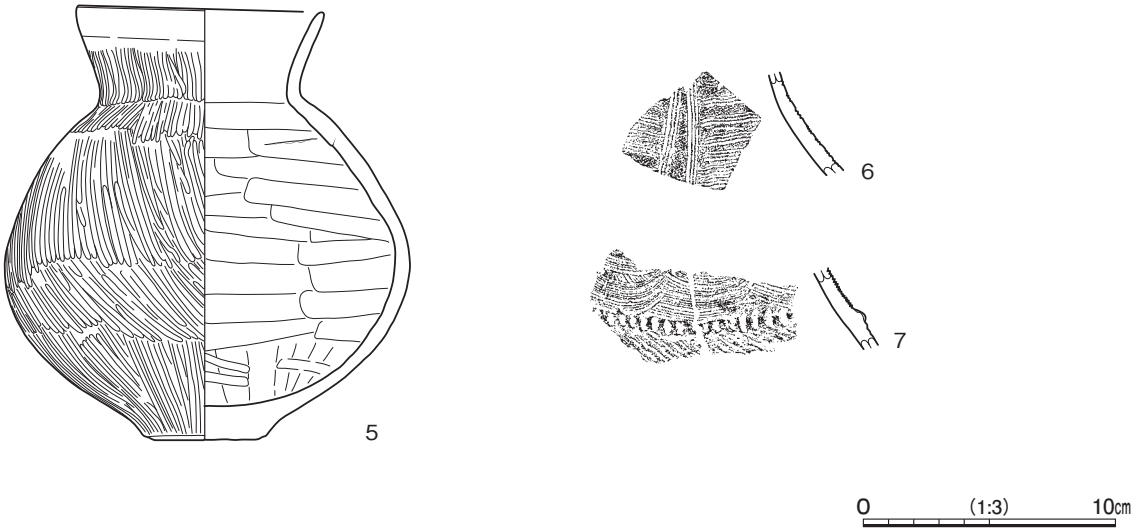
第 24 図　第 30 号土坑実測図

遺物出土状況　弥生土器片８点（広口壺）、土師器片 15 点（壺）が出土している。１～５は中央部西寄りから逆位でまとまって出土している。第３・４層を埋め戻した段階で２～４を並べ置き、第１・２層を埋め戻しながら２・４の上に１を、２・３の上に５を重ね置いている。土器内部の土壌から遺物は検出されなかった。

所見　時期は、出土土器から前期前葉と考えられる。



第 25 図　第 30 号土坑出土遺物実測図（1）



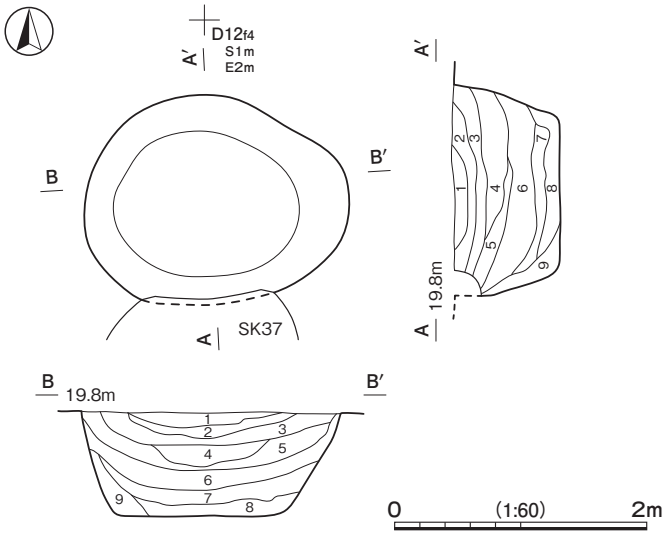
第 26 図　第 30 号土坑出土遺物実測図（2）

第 13 表　第 30 号土坑出土遺物一覧（第 25・26 図）

番号	種　別	器種	口径	器高	底径	胎　　土	色　調	焼成	特　　徴	出土位置	備　考
1	土師器	壺	15.0	20.6	6.2	長石・石英	明褐	普通	複合口縁　外面ヘラナデ　弥生土器の無文化	覆土中層	80% PL11
2	土師器	壺	14.7	22.8	5.6	長石・石英・ 赤色粒子	にぶい橙	普通	外面磨き　口縁部内面磨き　内面摩滅	覆土下層	100% PL11
3	土師器	壺	13.8	26.1	［9.0］	長石・石英・ 赤色粒子	浅黄褐	普通	体部外面上半磨き　体部外面下半・内面ヘラナデ	覆土下層	90% PL11
4	土師器	壺	－	（17.7）	7.1	長石・石英・ 雲母	橙	普通	外面磨き　内面摩滅	覆土下層	90% PL11
5	土師器	壺	9.7	17.3	4.1	長石・石英・ 赤色粒子	橙	普通	外面磨き　内面ヘラナデ	覆土上層	90% PL11
6	弥生土器	広口壺	－	（4.1）	－	長石・石英・ 雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	３条の櫛歯状工具による区画	覆土	５% PL11
7	弥生土器	広口壺	－	（3.3）	－	長石・石英・ 雲母	赤褐	普通	８条の櫛歯状工具による連弧文　貼付隆帯に縄文原体による刺突　附加条軸縄不明付加１条	覆土	５%

第 34 号土坑（第 27 図　ＰＬ３）

位置　調査区東部の D12f4 区、標高 20 mほどの台地上に位置している。



土層解説

1　10YR4/4　褐　　ローム粒Ａ、炭化物Ｄ／粘Ｂ、締Ｂ
2　10YR3/2　黒褐　　ローム粒Ｄ／粘Ｃ、締Ｃ
3　10YR3/3　暗褐　　ローム粒Ｄ、焼土粒Ｄ、炭化粒Ｄ／粘Ｂ、締Ｂ
4　10YR3/4　暗褐　　ローム粒Ｃ、焼土粒Ｄ、炭化粒Ｃ／粘Ｂ、締Ｂ
5　10YR3/3　暗褐　　ローム粒Ｃ、炭化粒Ｄ／粘Ｂ、締Ｂ
6　10YR3/4　暗褐　　ローム小Ｄ・粒Ｃ、炭化粒Ｄ／粘Ｂ、締Ｂ
7　10YR4/3　にぶい黄褐　ローム小Ｄ・粒Ｃ、炭化粒Ｃ／粘Ｂ、締Ｂ
8　10YR4/4　褐　　ローム小Ｂ・粒Ｃ／粘Ｂ、締Ｂ
9　10YR4/6　褐　　ローム粒Ａ、炭化粒Ｄ／粘Ｂ、締Ｂ

第 27 図　第 34 号土坑実測図

重複関係　第４号竪穴建物跡を掘り込み、第 37 号土坑に掘り込まれている。本跡上に第５号墳が築造されている。

規模と形状　南部が重複のため、確認できた規模は長軸 2.10m、短軸 1.62 ｍである。平面形は楕円形と推定され、長径方向はＮ－ 86°－Ｅである。深さは 83㎝で、底面は平坦である。壁は外傾している。

覆土　９層に分層できる。周囲からの流入を示す堆積状況から、自然堆積である。

遺物出土状況　弥生土器片１点（壺）が出土している。

所見　本跡に伴う遺物は出土していないが、時期は、重複関係から古墳時代前期と考えられる。

第 37 号土坑（第 28 図　第 14 表　ＰＬ３・11）

位置　調査区東部の D12f4 区、標高 20 ｍほどの台地上に位置している。

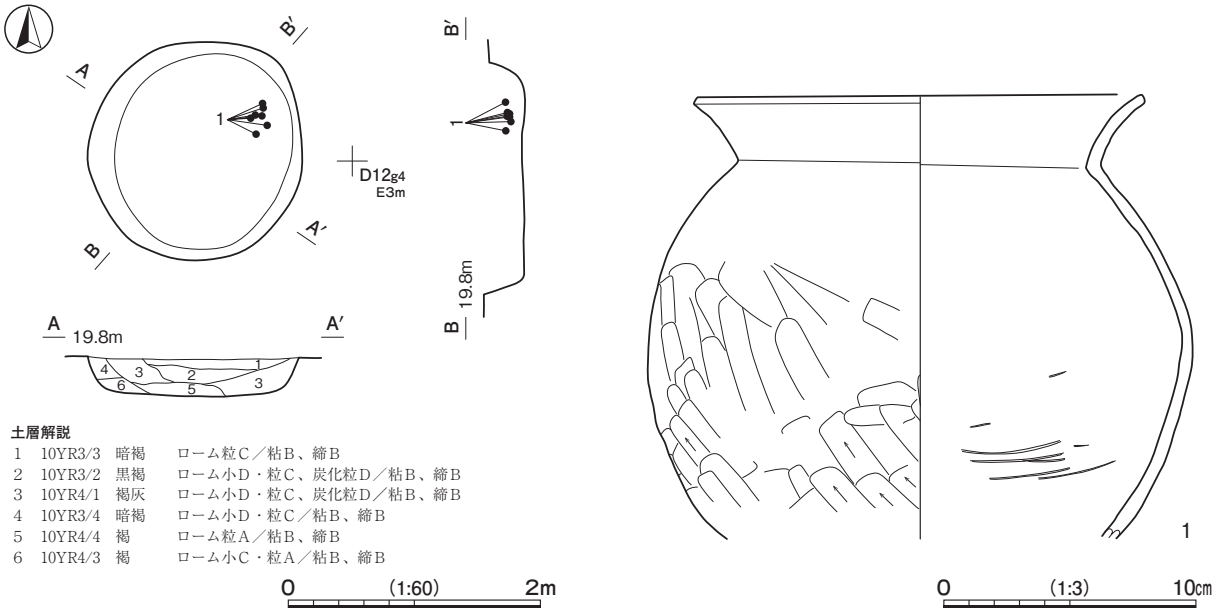
重複関係　第４号竪穴建物跡、第 34 号土坑を掘り込み、本跡上に第５号墳が築造されている。

規模と形状　長径 1.84m、短径 1.68 ｍの円形である。深さは 30㎝で、底面はほぼ平坦である。壁は外傾している。

覆土　６層に分層できる。不規則な堆積状況を示すことから、人為堆積である。

遺物出土状況　土師器片 73 点（甕）が出土している。１は北東部の覆土中層から散在した状態で出土した破片が接合したものである。

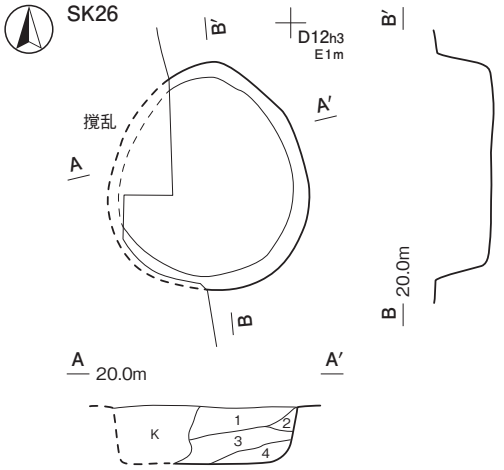
所見　時期は、出土土器から古墳時代前期と考えられる。



第 28 図　第 37 号土坑・出土遺物実測図

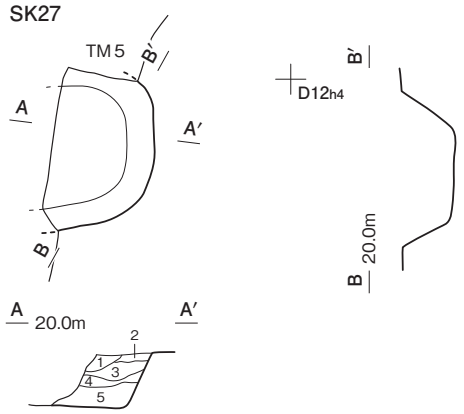
第 14 表　第 37 号土坑出土遺物一覧（第 28 図）

番号	種　別	器種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	特　　徴	出土位置	備　考
1	土師器	甕	17.6	(17.6)	－	長石・石英・雲母	橙	普通	口縁部横ナデ　体部外面斜位ヘラナデ　下半ヘラ削り　内面ヘラナデ	覆土中層	70% PL11



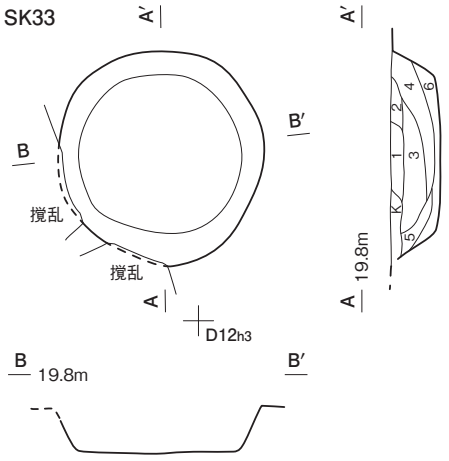
第26号土坑土層解説

1　10YR3/2　黒褐　ローム粒C、炭化粒D／粘B、締B
2　10YR4/3　にぶい黄褐　ローム粒B／粘B、締B
3　10YR4/2　灰黄褐　ローム小D・粒C／粘B、締B
4　10YR3/4　暗褐　ローム粒C／粘B、締B



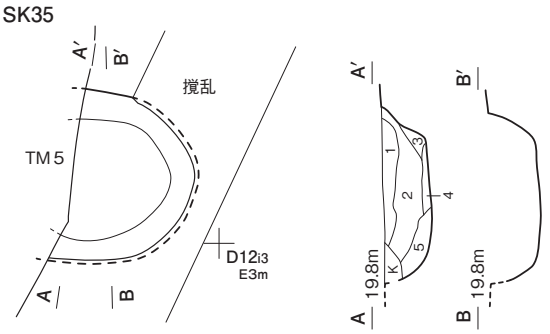
第27号土坑土層解説

1　10YR3/3　暗褐　ローム小D・粒C／粘B、締B
2　10YR3/4　暗褐　ローム小C・粒C／粘B、締B
3　10YR3/2　黒褐　ローム小D・粒C、焼土粒D、炭化粒D／粘B、締B
4　10YR3/4　暗褐　ローム小C・粒B／粘B、締B
5　10YR3/3　暗褐　ローム小D・粒D／粘B、締B



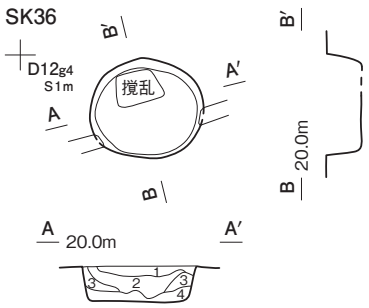
第33号土坑土層解説

1　10YR3/1　黒褐　ローム粒C、焼土粒D、炭化粒D／粘C、締B
2　10YR3/3　暗褐　ローム小D・粒C、焼土粒D／粘C、締B
3　10YR2/3　黒褐　ローム小C・粒C、焼土粒D、炭化粒D／粘C、締B
4　10YR3/3　暗褐　ローム小C・粒B／粘B、締B
5　10YR3/4　暗褐　ローム小C・粒B、炭化粒D／粘B、締B
6　10YR4/3　にぶい黄褐　ローム小B・粒B／粘B、締B



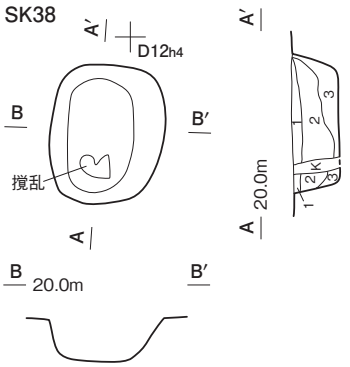
第35号土坑土層解説

1　10YR3/4　暗褐　ローム粒C／粘B、締B
2　10YR4/2　灰黄褐　ローム粒C／粘B、締B
3　10YR3/4　暗褐　ローム粒C／粘B、締B
4　10YR4/3　にぶい黄褐　ローム小D・粒B／粘B、締B
5　10YR4/3　にぶい黄褐　ローム粒B／粘B、締B



第36号土坑土層解説

1　10YR2/3　黒褐　ローム小D・粒C／粘C、締B
2　10YR3/2　黒褐　ローム小C・粒C／粘B、締B
3　10YR3/3　暗褐　ローム小B・粒C／粘B、締B
4　10YR4/4　褐　ローム小B・粒B／粘B、締B

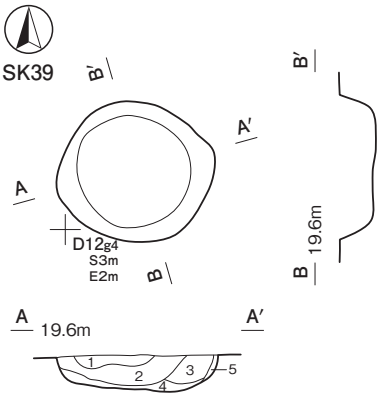


第38号土坑土層解説

1　10YR2/3　黒褐　ローム小D・粒C、焼土粒D、炭化粒D／粘B、締B
2　10YR3/1　黒褐　ローム小D・粒C／粘B、締B
3　10YR3/3　暗褐　ローム小C・粒C／粘B、締B

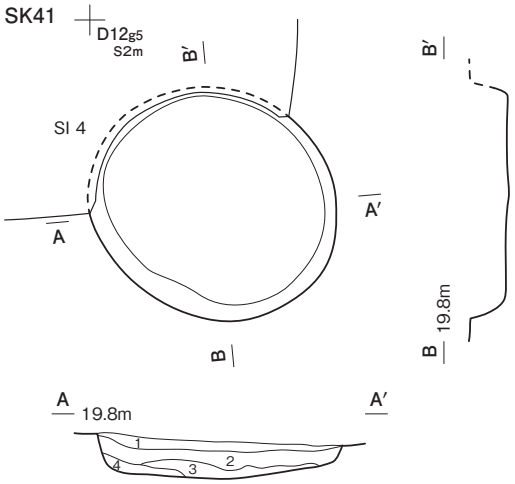
0　(1:60)　2m

第 29 図　古墳時代の土坑実測図（1）



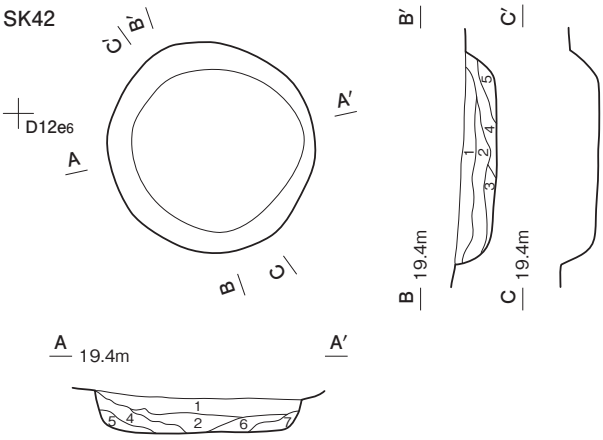
第39号土坑土層解説

1	10YR2/3	黒褐	ローム中D・小C・粒C／粘B、締B
2	10YR3/3	暗褐	ローム小C・粒B、焼土粒D'、炭化粒D／粘B、締B
3	10YR3/2	黒褐	ローム小D・粒C、炭化粒C／粘B、締B
4	10YR3/4	暗褐	ローム中C・小B・粒B／粘B、締B
5	10YR4/4	褐	ローム中B・小A・粒A／粘A、締B



第41号土坑土層解説

1	10YR3/4	暗褐	ローム小D・粒D、焼土粒D、炭化粒D／粘C、締B
2	10YR3/3	暗褐	ローム小D・粒C、炭化粒D／粘C、締B
3	10YR4/3	にぶい黄褐	ローム小B・粒C／粘B、締B
4	10YR3/4	暗褐	ローム小C・粒B／粘B、締B



第42号土坑土層解説

1	10YR3/4	暗褐	ローム小D・粒C、焼土粒C、炭化粒D／粘C、締B
2	10YR3/3	暗褐	ローム小D・粒C、焼土粒D、炭化粒C／粘B、締B
3	10YR4/3	にぶい黄褐	ローム粒B／粘B、締B
4	10YR3/4	暗褐	ローム粒B／粘B、締B
5	10YR4/4	褐	ローム粒B／粘B、締B
6	10YR4/6	褐	ローム粒B、焼土小D'・粒B、炭化粒C／粘B、締B
7	10YR3/4	暗褐	ローム小D・粒C、焼土粒C、炭化粒C／粘B、締B

0 (1:60) 2m

第 30 図　古墳時代の土坑実測図（2）

第 15 表　古墳時代の土坑一覧

番号	位置	長径方向	平面形	規模 長径×短径（m）	規模 深さ（cm）	壁面	底面	覆土	主な出土遺物	時期	備考
26	D12h3	N－1°－E	［楕円形］	1.81 × ［1.58］	45	外傾	平坦	自然		前期	本跡→ TM 5
27	D12h3	－	［円形・楕円形］	(1.26) × (0.82)	43	外傾	平坦	人為		前期	本跡→ TM 5
30	D12e4	－	円形	2.12 × 1.96	37	外傾	平坦	人為	弥生土器　土師器	前期前葉	本跡→ TM 5
33	D12g2	－	円形	1.74 × ［1.65］	40	外傾	平坦	自然		前期	本跡→ TM 5
34	D12f4	N－86°－E	［楕円形］	2.10 × (1.62)	83	外傾	平坦	自然	弥生土器	前期	SI 4 →本跡→ SK37、TM 5
35	D12h3	－	［円形・楕円形］	［1.38］ × (1.00)	40	外傾	平坦	人為		前期	本跡→ TM 5
36	D12g4	N－84°－E	楕円形	0.90 × 0.80	29	外傾 垂直	平坦	人為		前期	本跡→ TM 5
37	D12f4	－	円形	1.84 × 1.68	30	外傾	平坦	人為	土師器	前期	SI 4、SK34 → 本跡→ TM 5
38	D12h4	N－5°－E	楕円形	1.10 × 0.92	37	外傾	平坦	自然		前期	本跡→ TM 5
39	D12g4	－	円形	1.27 × 1.15	28	外傾	平坦	人為		前期	本跡→ SI 4、TM 5
41	D12g5	N－36°－W	［楕円形］	［2.00］ × 1.80	31	外傾	平坦	人為		前期	本跡→ SI 4、TM 5
42	D12e6	－	円形	1.70 × 1.63	29	外傾	平坦	人為	弥生土器　土師器	前期	本跡→ TM 5

（4）古　墳

第４号墳（第 31・32 図　ＰＬ４）

位置　調査区南東部の D11i5 ～ E12a1 区、標高 20 mほどの台地縁辺部に位置している。

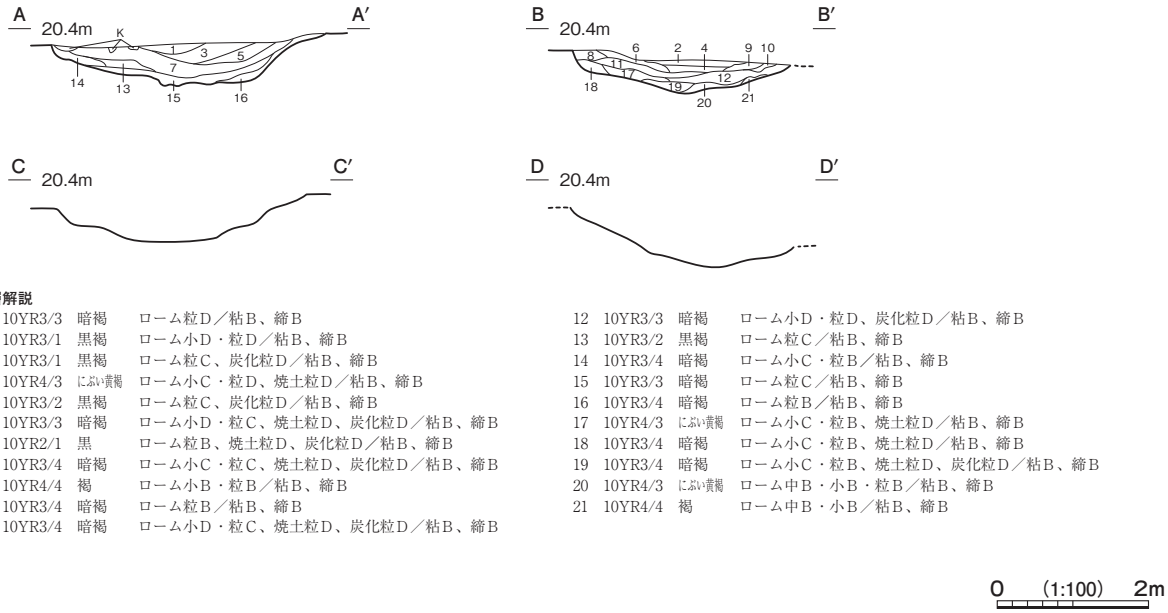
重複関係　第３号竪穴建物跡を掘り込んでいる。

規模と形状　削平と撹乱のため墳丘は失われている。周溝は確認した範囲で弧状に巡っており、形状から全長約 24 mの円墳と推定される。周溝幅は、上幅が 2.04 ～ 3.36 m、下幅が 0.92 ～ 1.64 m、深さは 30 ～ 76㎝で、削平のため、北西部で急に狭くなり、途切れている。断面は浅いＵ字形で、壁は 15 ～ 25° と緩やかに立ち上がっている。なお、昭和 57 年に旭村（現鉾田市）教育委員会が調査区域外の埋葬施設の調査を行っており、粘板岩を切石積みで積み上げた横穴式石室が確認されている。

周溝覆土　21 層に分層できる。周囲からの流入を示す堆積状況から、自然堆積である。

遺物出土状況　周溝から土師器片 65 点（高坏１、壺４、甕 60）、須恵器片１点（瓶）が出土している。ほかに混入した縄文土器片１点、弥生土器片 19 点、古墳時代前期の土師器片５点、土製品１点、石器３点が出土している。土師器片と須恵器片は細片のため、図示できない。

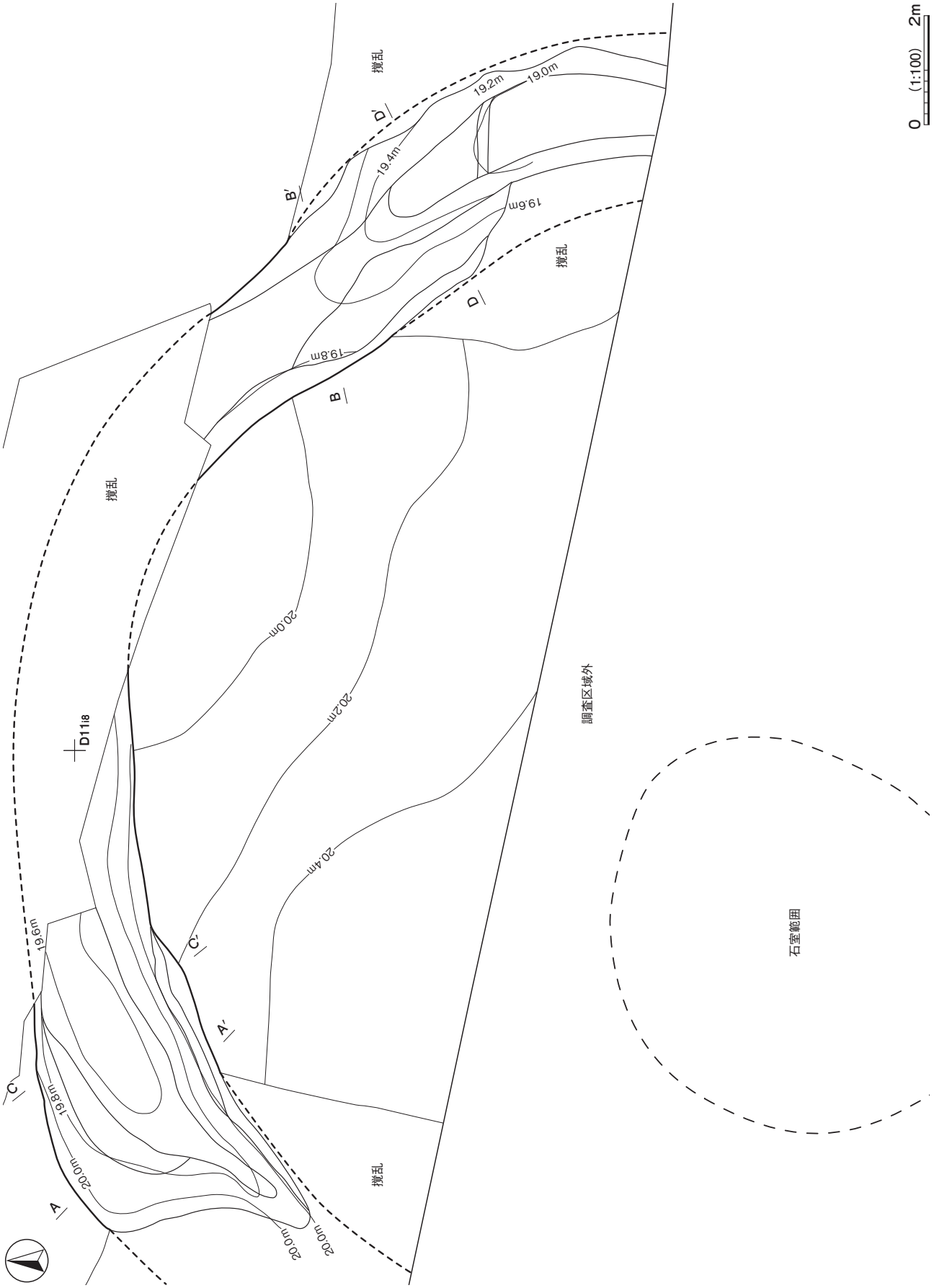
所見　本墳は、周溝の出土遺物から時期を特定できないが、昭和 57 年の埋葬施設の調査で出土した遺物から、６世紀後半に築造されたものと考えられている。



土層解説

1	10YR3/3	暗褐	ローム粒Ｄ／粘Ｂ、締Ｂ
2	10YR3/1	黒褐	ローム小Ｄ・粒Ｄ／粘Ｂ、締Ｂ
3	10YR3/1	黒褐	ローム粒Ｃ、炭化粒Ｄ／粘Ｂ、締Ｂ
4	10YR4/3	にぶい黄褐	ローム小Ｃ・粒Ｄ、焼土粒Ｄ／粘Ｂ、締Ｂ
5	10YR3/2	黒褐	ローム粒Ｃ、炭化粒Ｄ／粘Ｂ、締Ｂ
6	10YR3/3	暗褐	ローム小Ｄ・粒Ｃ、焼土粒Ｄ、炭化粒Ｄ／粘Ｂ、締Ｂ
7	10YR2/1	黒	ローム粒Ｂ、焼土粒Ｄ、炭化粒Ｄ／粘Ｂ、締Ｂ
8	10YR3/4	暗褐	ローム小Ｃ・粒Ｃ、焼土粒Ｄ、炭化粒Ｄ／粘Ｂ、締Ｂ
9	10YR4/4	褐	ローム小Ｂ・粒Ｂ／粘Ｂ、締Ｂ
10	10YR3/4	暗褐	ローム粒Ｂ／粘Ｂ、締Ｂ
11	10YR3/4	暗褐	ローム小Ｄ・粒Ｃ、焼土粒Ｄ、炭化粒Ｄ／粘Ｂ、締Ｂ
12	10YR3/3	暗褐	ローム小Ｄ・粒Ｄ、炭化粒Ｄ／粘Ｂ、締Ｂ
13	10YR3/2	黒褐	ローム粒Ｃ／粘Ｂ、締Ｂ
14	10YR3/4	暗褐	ローム小Ｃ・粒Ｂ／粘Ｂ、締Ｂ
15	10YR3/3	暗褐	ローム粒Ｃ／粘Ｂ、締Ｂ
16	10YR3/4	暗褐	ローム粒Ｂ／粘Ｂ、締Ｂ
17	10YR4/3	にぶい黄褐	ローム小Ｃ・粒Ｂ、焼土粒Ｄ／粘Ｂ、締Ｂ
18	10YR3/4	暗褐	ローム小Ｃ・粒Ｂ、焼土粒Ｄ／粘Ｂ、締Ｂ
19	10YR3/4	暗褐	ローム小Ｃ・粒Ｂ、焼土粒Ｄ、炭化粒Ｄ／粘Ｂ、締Ｂ
20	10YR4/3	にぶい黄褐	ローム中Ｂ・小Ｂ・粒Ｂ／粘Ｂ、締Ｂ
21	10YR4/4	褐	ローム中Ｂ・小Ｂ／粘Ｂ、締Ｂ

第 31 図　第４号墳実測図（1）



第 32 図　第 4 号墳実測図（2）

第５号墳（第 33 ～ 37 図　第 16・17 表　ＰＬ４・５・12）

位置　調査区東端部の D12d1 ～ D12i4 区、標高 20 mほどの台地縁辺部に位置し、西を除いた三方が崖となっている。

重複関係　第２号石器集中地点、第４号竪穴建物跡、第 26・30・33・34・36 ～ 39・41・42 号土坑の上に築造されており、第 27・35 号土坑を掘り込んでいる。

規模と形状　墳丘は、西側半分を削平されている。確認できた周溝から、全長約 22 mの円墳と推定できる。主軸方向は埋葬施設の主軸方向からＮ－ 10°－Ｅである。確認できた墳丘高は基底面から高さ 1.43 mである。周溝は西側の北西部と南西部で部分的に確認できた。東側では緩やかな傾斜の裾部から崖になっており、明確な周溝は確認できなかった。周溝の底面の標高は約 19.1m であるが、東側の周溝想定地点の地山の標高は 19.1m である。墳丘土層断面のＡ－Ａ′ラインの東端部において浅いくぼみが存在していることから、東側は周溝の掘り込みが浅く、流出や削平によって消失した可能性が高い。確認できた周溝幅は、上幅 0.72 ～ 2.60 m、下幅 0.38 ～ 1.34 m、深さは 10 ～ 68㎝で、北部が南部よりも若干幅広でやや深い。断面はＵ字形か逆台形で、壁は 15 ～ 30°と緩やかに立ち上がっている。

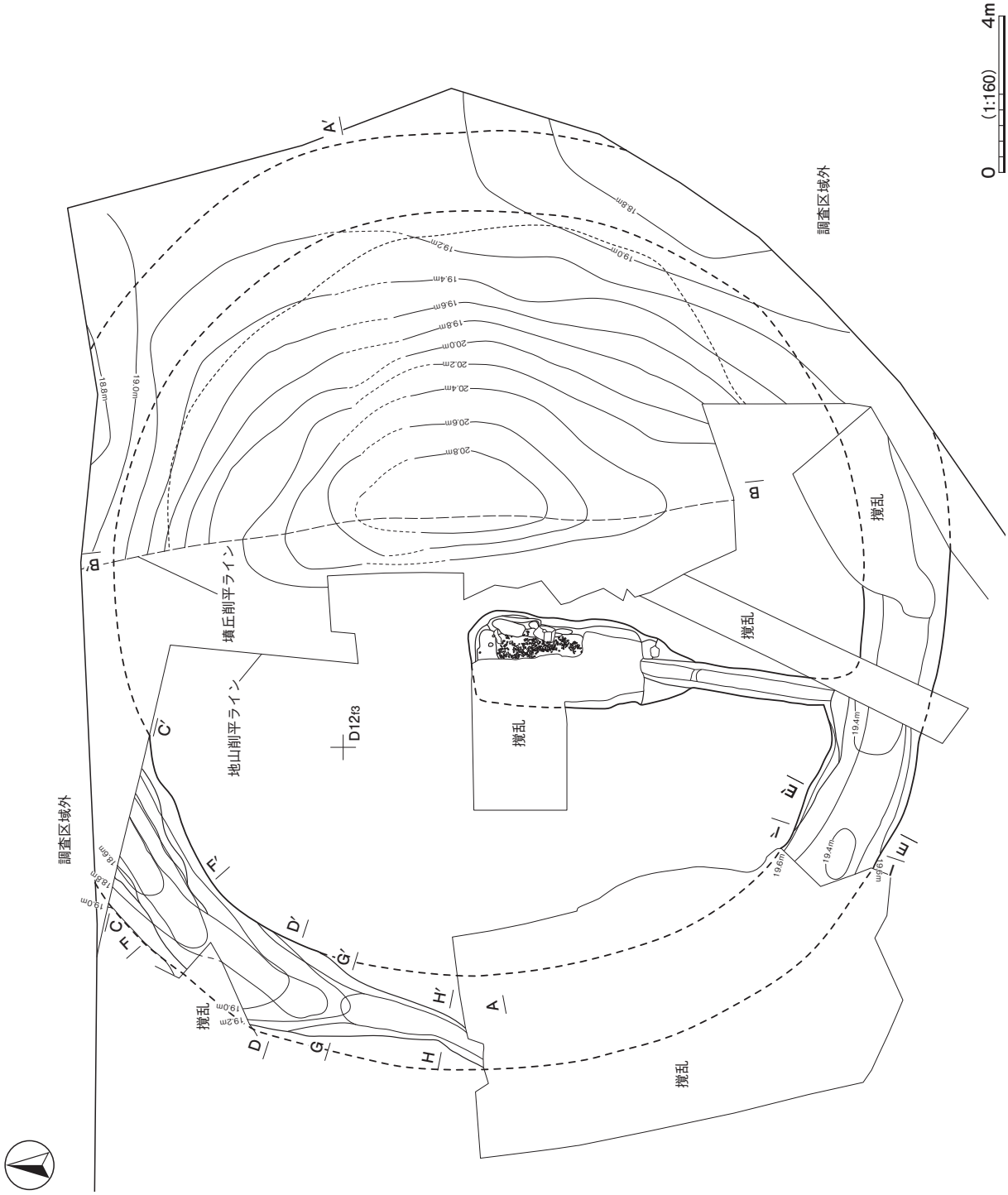
周溝覆土　25 層に分層できる。周囲からの流入を示す堆積状況から、自然堆積である。

墳丘土層　北東方向に緩やかに下がる黒色土（旧表土）上面を基底として盛土している。盛土は焼土や炭化物を若干含むロームブロックが主体で、粘性や締まりの強弱から 63 層に分層できる。東西方向の土層観察の結果、黒褐色土と暗褐色土主体に部分的に褐色土などで盛土している。南北方向の土層観察では、墳丘中央部付近の黒色土（旧表土）のわずかな窪みを埋めた後、南北２か所に盛土し、その間を埋めていく工程が看取される。

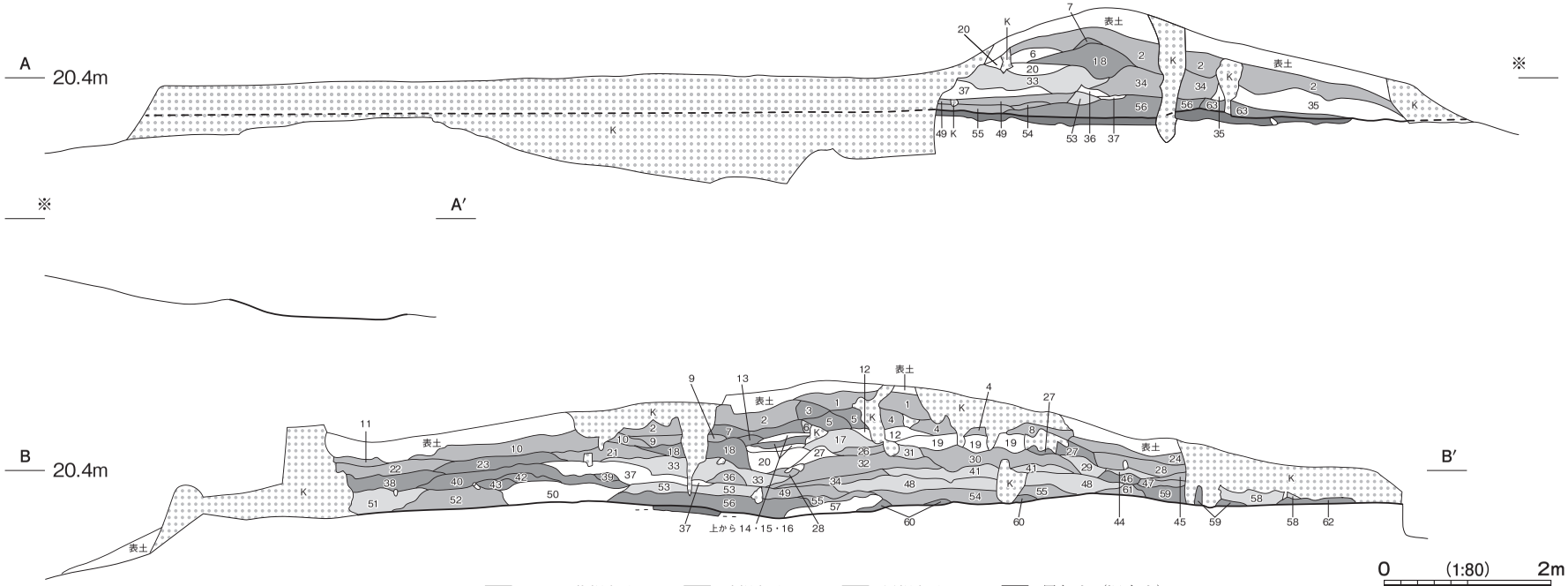
埋葬施設　地山を掘り込んだ半地下式の両袖型横穴式石室で、主軸方向はＮ－ 10°－Ｅである。羨道は、周溝と玄室を溝で結び、長さ 4.95 mである。その上幅は周溝側で 0.70 m、玄室側で 0.50 m、深さは約 40㎝である。周溝から約 3.5 mの玄門まではほぼ平坦で、玄門付近は羨道より約 10㎝下がっている。羨道の覆土は 26 層に分層でき、土質や堆積状況から自然堆積と考えられる。玄室の覆土は９層に分層できたが、北西部から南部にかけて撹乱を受けており、原位置を保つのは玄室内の礫床の一部とその東側壁の石材１か所のみである。玄室の底面は凹凸が認められるが、本来は平坦で玄門と同じ高さであったと推測される。玄室の掘方は、長軸 4.3 m、短軸 2.2 mほどで、隅丸長方形と推定される。原位置を保つ東側壁の石材は、長さ 70㎝、幅 36㎝、厚さ 22㎝の砂岩である。また、本墳の調査で出土した石材の多くは、同定の結果、ひたちなか市の平磯から磯崎付近にかけての海浜部に露頭がある白亜紀系の那珂湊層、殿山層の砂岩であることが判明した。また、礫床の礫は、見和層の中部礫層と推定された。

遺物出土状況　埋葬施設からは、土師器片 35 点（甕）、土製品１点（丸玉）、金属製品３点（耳環１、不明２）が出土している。ほかに混入した縄文土器片１点、弥生土器片 18 点、石器１点が出土している。周溝からは、土師器片 68 点（壺 18、甕 50）、須恵器片９点（瓶１、甕８）が出土し、ほかに混入した縄文土器片２点、弥生土器片 26 点、古墳時代前期の土師器片３点、石器１点、礫２点が出土している。また、表土中と盛土に混入した縄文土器片４点、弥生土器片 86 点、土師器片 70 点、須恵器片 11 点、土製品３点、石器２点、礫４点が出土している。埋葬施設と周溝から出土した土器片はほとんどが細片で、埋没時などに流入したものと推測される。１・２は玄室北東部の礫床から、それぞれ出土している。

所見　本墳は出土遺物から時期を特定できないが、埋葬施設の形状や撹乱・表土から出土した須恵器から、６世紀末から７世紀初頭に築造されたものと推測される。



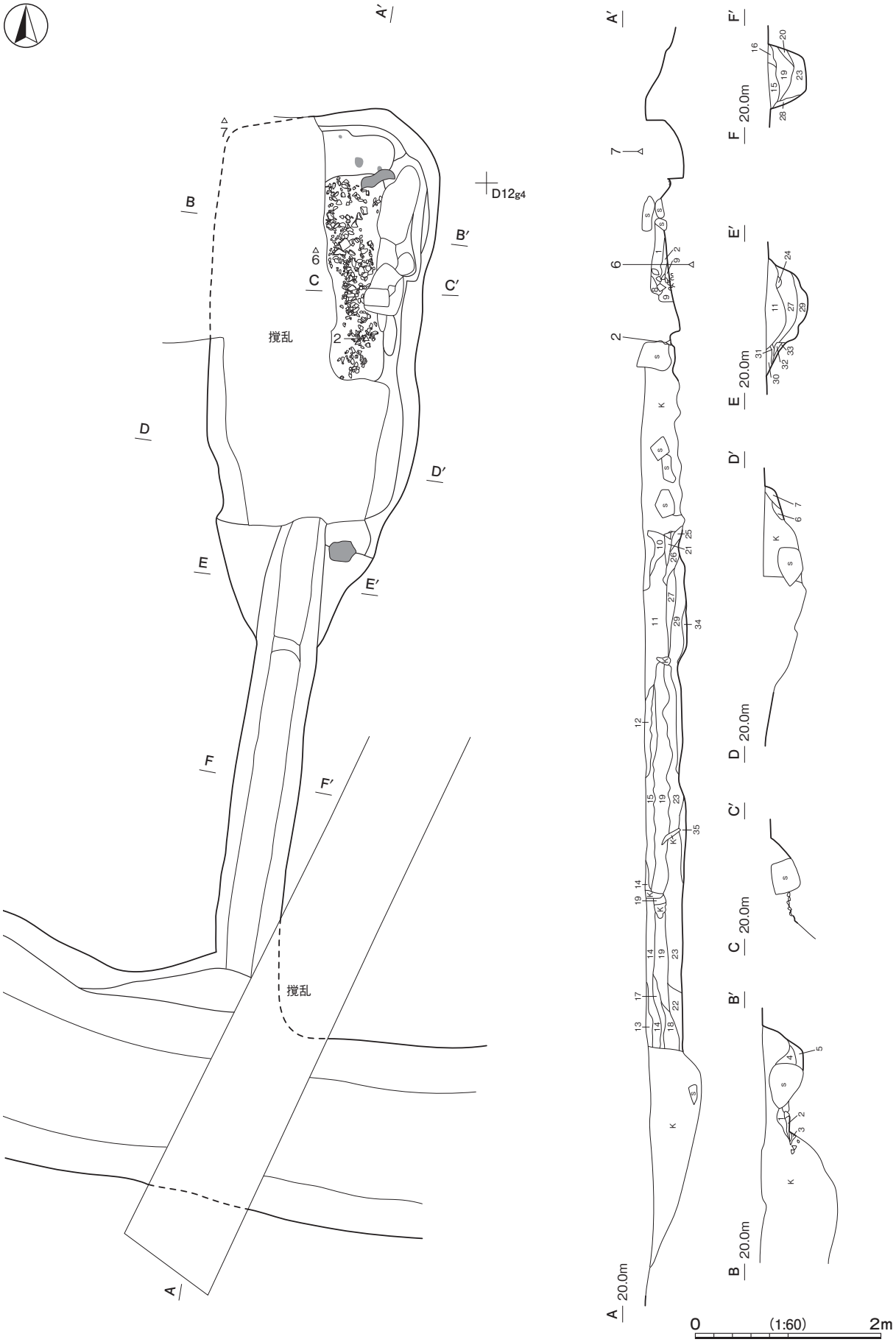
第 33 図　第 5 号墳実測図（1）



墳丘土層解説

1	10YR3/3	暗褐	ローム小D・粒C／粘C、締C
2	10YR3/4	暗褐	ローム小C・粒B、炭化粒D、黒色粒子D／粘B、締C
3	10YR3/2	黒褐	ローム小C・粒C、炭化粒D、黒色粒子C／粘B、締C
4	10YR3/4	暗褐	ローム小C・粒B／粘C・締C
5	10YR3/2	黒褐	ローム小D・粒B、黒色粒子C／粘B、締C
6	10YR4/3	にぶい黄褐	ローム小C・粒B、炭化粒C、黒色粒子D／粘B、締C
7	10YR3/1	黒褐	ローム小D・粒C、焼土粒D、炭化粒D、黒色粒子C／粘C、締B
8	10YR3/3	暗褐	ローム小D'・粒C／粘C、締C
9	10YR3/3	暗褐	ローム小C・粒B、炭化粒D／粘B、締B
10	10YR3/4	暗褐	ローム中B・小B・粒B、黒色粒子D／粘B、締B
11	10YR3/4	暗褐	ローム粒D／粘B、締C
12	10YR4/4	褐	ローム小D・粒B、黒色粒子D／粘B、締B
13	10YR2/3	黒褐	ローム中D・小C・粒C、炭化粒D、黒色粒子D／粘B、締B
14	10YR4/4	褐	ローム中B・小B・粒B、炭化粒D、黒色粒子D／粘B、締B
15	10YR2/3	黒褐	ローム小D・粒C、炭化粒D、黒色粒子C／粘B、締A
16	10YR4/6	褐	ローム中A・炭化粒D、黒色粒子D／粘A、締A
17	10YR4/3	にぶい黄褐	ローム中D・小C・粒B、焼土粒D、炭化粒D、黒色粒子D／粘B、締B
18	10YR3/1	黒褐	ローム小D・粒C、焼土粒D'、炭化粒D、黒色粒子C／粘C、締B
19	10YR4/6	褐	ローム中C・小B・粒B、黒色粒子D／粘B、締B
20	10YR4/4	褐	ローム中D・小B・粒B、黒色粒子C、粘土小D／粘B、締A
21	10YR3/3	暗褐	ローム中D・小B・粒B、炭化粒D、黒色粒子D／粘B、締B
22	10YR3/4	暗褐	ローム粒C、黒色粒子C／粘B、締B
23	10YR3/2	黒褐	ローム粒D、炭化粒D'、黒色粒子D／粘C、締B
24	10YR3/4	暗褐	ローム粒C、焼土粒D、炭化粒D、黒色粒子D／粘C、締A
25	10YR3/2	黒褐	ローム中C・小B・粒B、黒色粒子D／粘B、締B
26	10YR3/3	暗褐	ローム中D・小C・粒C、焼土粒D、黒色粒子D／粘B、締B
27	10YR3/2	黒褐	ローム粒C、黒色粒子C／粘B、締B
28	10YR3/3	暗褐	ローム小C、黒色粒子C／粘B、締B
29	10YR4/3	にぶい黄褐	ローム中C・小C・粒B、黒色粒子D／粘B、締B
30	10YR3/3	暗褐	ローム小C・粒B、炭化粒D'／粘B、締B
31	10YR4/3	にぶい黄褐	ローム中C・小C・粒B、黒色粒子D、鹿沼D'／粘B、締B
32	10YR3/4	暗褐	ローム小C・粒B、炭化粒D'、黒色粒子D／粘B、締B
33	10YR4/3	にぶい黄褐	ローム小B・粒B、黒色粒子D／粘B、締B
34	10YR3/3	暗褐	ローム小D・粒C、炭化粒D、黒色粒子C／粘B、締A
35	10YR4/3	にぶい黄褐	ローム小B・粒B、黒色粒子D／粘B、締B
36	10YR2/3	黒褐	ローム小D・粒C、炭化粒D'、黒色粒子D／粘B、締B
37	10YR4/4	褐	ローム中C・小B・粒B、炭化粒D、黒色粒子D／粘B、締B
38	10YR3/2	黒褐	ローム小C、炭化粒D／粘B、締B
39	10YR3/2	黒褐	ローム粒D、炭化粒D'、黒色粒子D／粘C、締B
40	10YR3/1	黒褐	ローム小C・粒C／粘C、締B
41	10YR4/3	にぶい黄褐	ローム小B・粒B、黒色粒子D／粘B、締B
42	10YR3/2	黒褐	ローム粒C、黒色粒子C／粘C、締B
43	10YR3/2	黒褐	ローム小D・粒D、焼土粒D、炭化粒D／粘B、締B
44	10YR4/3	にぶい黄褐	ローム中D・小D・粒C、炭化粒D／粘B、締B
45	10YR3/3	暗褐	ローム小D・粒C、炭化粒D、黒色粒子D／粘B、締B
46	10YR2/3	黒褐	ローム粒C、黒色粒子C／粘C、締B
47	10YR3/3	暗褐	ローム小B・粒B、黒色粒子C／粘B、締B
48	10YR4/3	にぶい黄褐	ローム中D・小C・粒B、炭化粒D／粘B、締B
49	10YR3/3	暗褐	ローム小C・粒B、炭化粒D、黒色粒子C／粘B、締B
50	10YR4/4	褐	ローム中A・小A・粒A、炭化粒D'、黒色粒子D／粘A、締B
51	10YR4/3	にぶい黄褐	ローム中C・小B・粒A、炭化粒D'、黒色粒子D／粘B、締B
52	10YR3/3	暗褐	ローム小C・粒B、炭化粒D、黒色粒子C／粘B、締B
53	10YR4/3	にぶい黄褐	ローム小C・粒B、黒色粒子C／粘C・締B
54	10YR3/4	暗褐	ローム小C・粒C、炭化粒D、黒色粒子D／粘B、締B
55	10YR3/3	暗褐	ローム中D・小C・粒C、黒色粒子D／粘B、締B
56	10YR2/3	黒褐	ローム粒C、炭化粒D／粘C、締B
57	10YR4/4	褐	ローム中D・小B・粒A、黒色粒子D／粘B、締A
58	10YR4/3	にぶい黄褐	ローム小C・粒B、炭化粒D、黒色粒子D／粘B、締A
59	10YR3/1	黒褐	ローム粒D、炭化粒D、黒色粒子C／粘C、締B
60	10YR3/2	黒褐	ローム小D・粒D、焼土粒D'、炭化粒D'、黒色粒子D'／粘C、締B
61	10YR3/3	暗褐	ローム粒B、焼土粒D'、黒色粒子D／粘B、締B
62	10YR3/2	黒褐	ローム中B・小C・粒B、焼土粒C／粘B、締A
63	10YR2/3	黒褐	ローム小D・粒D／粘C、締B

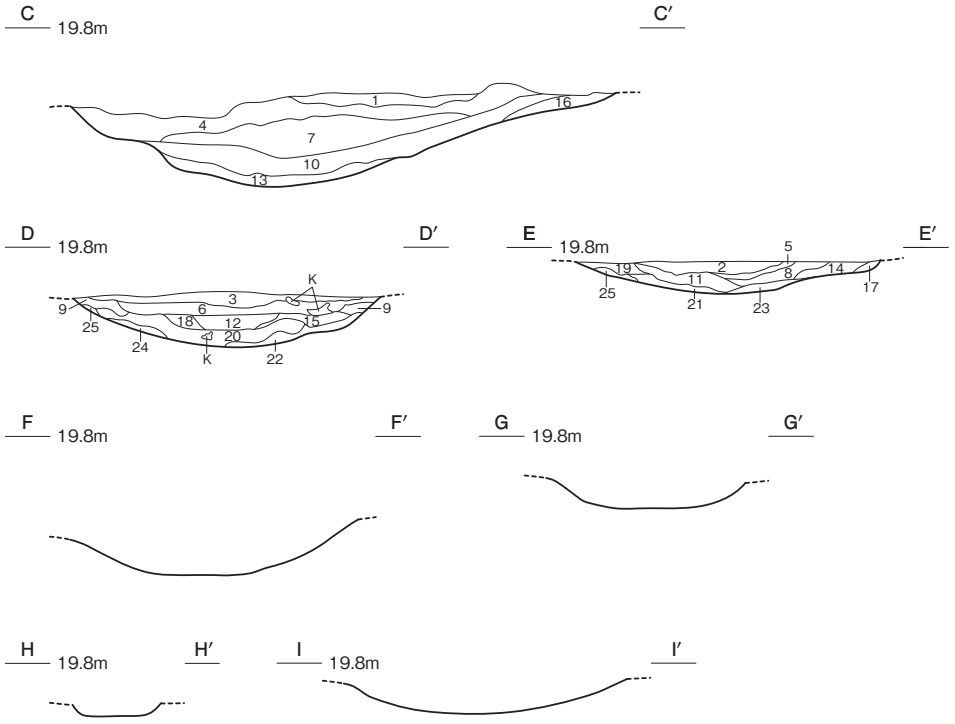
第34図　第5号墳実測図（2）



第 35 図　第 5 号墳実測図（3）

埋葬施設土層解説

1　10YR2/3　黒褐　ローム中C・小C・粒B、粘土小D′／粘C、締B
2　10YR4/3　にぶい黄褐　ローム小C・粒C、粘土小C／粘B、締B
3　10YR3/4　暗褐　粘土小D、砂粒C／粘C、締C
4　10YR2/3　黒褐　ローム小D・粒C、粘土中B／粘A、締B
5　10YR3/2　黒褐　粘土小C／粘B、締B
6　10YR2/3　黒褐　ローム小D・粒C／粘C、締B
7　10YR4/6　褐　黒色粒子C／粘C、締B
8　10YR5/3　にぶい黄褐　ローム粒C、粘土小B／粘B、締B
9　10YR5/4　にぶい黄褐　ローム小D・粒C、粘土小C／粘B、締B
10　10YR3/3　暗褐　ローム小D・粒C、粘土小D／粘B、締A
11　10YR3/2　黒褐　ローム小C・粒C、炭化粒D／粘C、締B
12　10YR2/2　黒褐　ローム小D・粒C／粘B、締B
13　10YR3/4　暗褐　ローム粒D／粘B、締B
14　10YR3/3　暗褐　ローム小D・粒C、焼土粒D、炭化粒D／粘C、締B
15　10YR3/3　暗褐　ローム粒C、炭化粒D／粘B、締B
16　10YR3/4　暗褐　ローム小D・粒D／粘C、締B
17　10YR3/4　暗褐　ローム小C・粒C／粘B、締B
18　10YR3/3　暗褐　ローム小D・粒C、焼土粒D、炭化粒D／粘B、締B
19　10YR2/3　黒褐　ローム小C・粒C、炭化粒D／粘C、締B
20　10YR3/3　暗褐　ローム小C・粒B／粘B、締B
21　10YR3/3　暗褐　ローム小C・粒C、炭化粒D／粘C、締B
22　10YR4/3　にぶい黄褐　ローム小B・粒A／粘B、締B
23　10YR3/2　黒褐　ローム粒D／粘C、締A
24　10YR4/3　暗褐　ローム小D・粒C／粘B、締B
25　10YR3/4　暗褐　ローム中D・小C・粒C／粘B、締A
26　10YR3/3　暗褐　ローム中D・小C・粒C、炭化粒D、黒色ブロックD／粘B、締A
27　10YR3/4　暗褐　ローム小C・粒C、粘土小D／粘B、締A
28　10YR4/6　褐　ローム中A・小B・粒B／粘A、締B
29　10YR3/3　暗褐　ローム中D・小C・粒B、粘土小C／粘B、締A
30　10YR3/3　暗褐　ローム小D・粒C、粘土小C／粘B、締A
31　10YR3/4　暗褐　ローム小D・粒D／粘C、締B
32　10YR4/3　にぶい黄褐　ローム小D・粒D、粘土小B／粘B、締A
33　10YR4/4　褐　ローム中D・小C・粒B／粘B、締A
34　10YR4/4　褐　ローム中B・小A・粒A／粘B、締B
35　10YR4/3　にぶい黄褐　ローム中B・小A・粒A／粘B、締B



周溝土層解説

1　10YR3/3　暗褐　ローム粒B／粘B、締A
2　10YR3/2　黒褐　ローム粒C、炭化粒D／粘C、締B
3　10YR3/1　黒褐　ローム小D・粒D、炭化粒D／粘C、締B
4　10YR3/2　黒褐　ローム小D・粒C／粘B、締A
5　10YR3/2　黒褐　ローム小D・粒C、焼土粒D、炭化粒D／粘C、締B
6　10YR3/3　暗褐　ローム小C・粒B、炭化粒C／粘B、締B
7　10YR4/4　褐　ローム小C・粒B／粘B、締A
8　10YR3/3　暗褐　ローム小C・粒C／粘B、締B
9　10YR3/4　暗褐　ローム小C・粒C／粘B、締B
10　10YR3/2　黒褐　ローム中D・小C・粒C／粘B、締B
11　10YR3/2　黒褐　ローム小D・粒C／粘C、締B
12　10YR2/3　黒褐　ローム小D・粒D／粘C、締B
13　10YR4/6　褐　ローム小A・粒A／粘B、締A
14　10YR3/4　暗褐　ローム小C・粒C、炭化粒D／粘B、締B
15　10YR4/3　にぶい黄褐　ローム中C・小B／粘B、締B
16　10YR2/3　黒褐　ローム小D・粒C／粘C、締B
17　10YR4/3　にぶい黄褐　ローム中B・小B／粘B、締B
18　10YR3/3　暗褐　ローム小C・粒C／粘C、締B
19　10YR3/3　暗褐　ローム小D・粒B／粘B、締B
20　10YR4/3　にぶい黄褐　ローム中D・小B・粒C／粘B、締B
21　10YR4/6　褐　ローム中A・小B・粒B／粘B、締B
22　10YR4/6　褐　ローム中B・小B・粒B／粘B、締B
23　10YR4/4　褐　ローム中B・小A・粒A／粘B、締B
24　10YR4/3　にぶい黄褐　ローム小B・粒A／粘B、締B
25　10YR4/4　褐　ローム中C・小B・粒B／粘B、締B

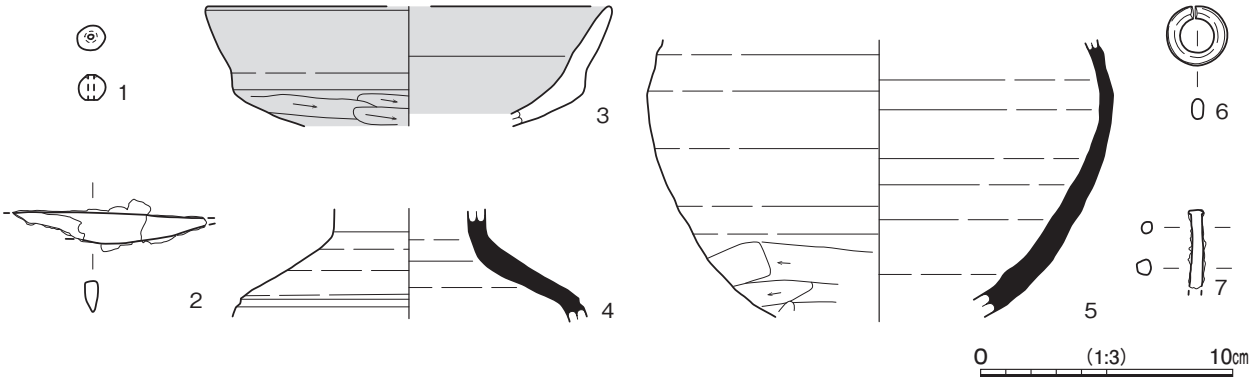
0　(1:60)　2m

第36図　第5号墳実測図（4）

第16表　第5号墳出土遺物一覧（第37図）

番号	器　種	径	高さ	孔径	重量	胎　土	色　調	特　　徴	出土位置	備　考
1	丸玉	1.1	1.0	0.2	1.01	長石・石英・雲母	暗褐	一方向からの穿孔　外面光沢	玄室内	PL12

番号	器　種	長さ	幅	厚さ	重量	材　　質	特　　徴	出土位置	備　考
2	不明鉄製品	(7.7)	1.5	0.6	(8.50)	鉄	断面三角形　両端欠損　刀子カ	玄室内	PL12



第 37 図　第５号墳出土遺物実測図

第 17 表　第５号墳関連遺物一覧（第 37 図）

番号	種　別	器種	口径	器高	底径	胎　　土	色　調	焼成	特　　徴	出土位置	備　考
3	土師器	坏	［15.8］	（4.7）	－	長石・赤色粒子	橙	普通	口縁部外面ヘラナデ　体部外面ヘラ削り　内外面赤彩残存	撹乱	10％
4	須恵器	長頸瓶	－	（4.3）	－	長石	暗灰黄	普通	肩部外面ロクロナデ　屈曲部に凹線　内面ロクロナデ　頸部との接合部に指頭痕残存	撹乱	５％ PL12
5	須恵器	瓶	－	（11.6）	－	長石・石英	灰黄褐	普通	体部外面ロクロナデ　上部自然柚　下部ヘラ削り　体部内面ロクロナデ	表土	10％ PL12

番号	器　種	長さ	幅	厚さ	重量	材　　質	特　　徴	出土位置	備　考
6	耳環	2.4	2.4	0.8	13.89	銅	金銅製　断面楕円形　全面鍍金	撹乱	PL12
7	不明鉄製品	（3.1）	0.7	0.6	（2.31）	鉄	断面方形　端部に方形の突起　片端欠損　釘ヵ	撹乱	PL12

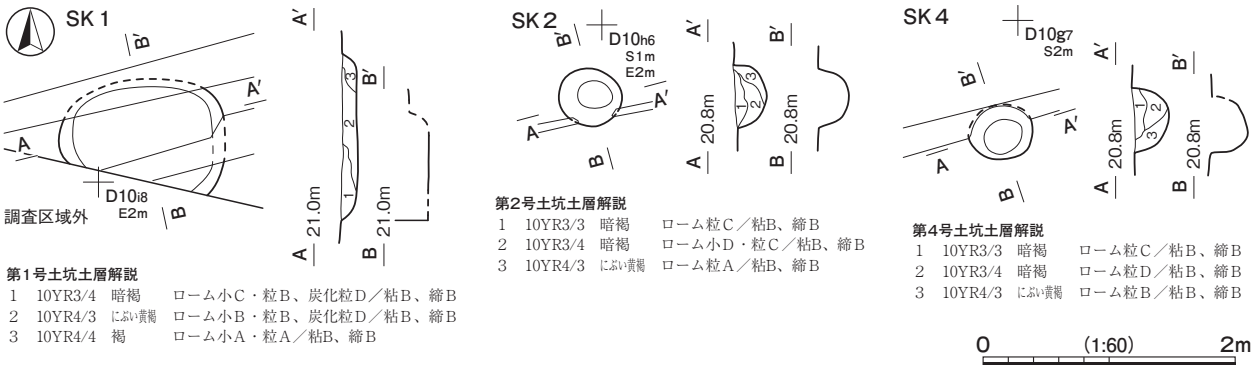
第 18 表　古墳一覧

番号	形状	位　置	墳丘 主軸方向	規模		周溝					埋葬施設	主な出土遺物	時　期	備　考
				全長（m）	高さ（m）	上幅（m）	下幅（m）	深さ（cm）	壁	断面				
4	［円墳］	D11i5 ～ E12a1	－	［24.0］	－	2.04 ～ 3.36	0.92 ～ 1.64	30 ～ 76	外傾	浅い U字形	横穴	土師器　須恵器	６世紀後半	SI ３→本跡
5	［円墳］	D12d1 ～ D12i4	N － 10° － E	［22.0］	1.43	0.72 ～ 2.60	0.38 ～ 1.34	10 ～ 68	外傾	U字形 逆台形	横穴	土師器　須恵器 土製品 金属製品	６世紀末～ ７世紀初頭	SS ２、SI ４、SK26・27・30・33 ～ 39・41・42 →本跡

4　時期不明の遺構と遺物

土坑 29 基、溝跡２条を確認した。以下、実測図と一覧表で記載する。

(1)　土　坑（第 38 ～ 41 図）

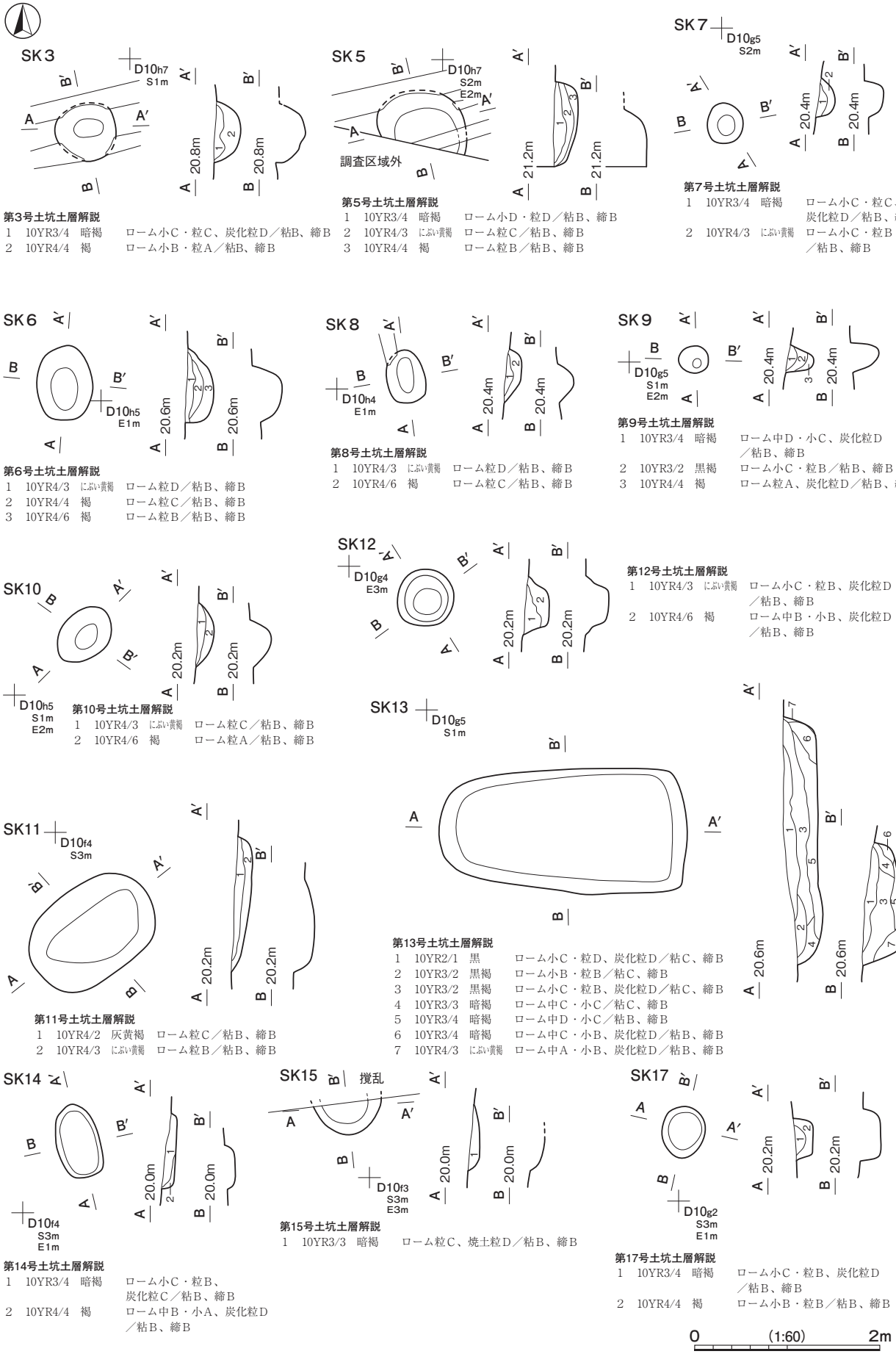


第１号土坑土層解説
1　10YR3/4　暗褐　ローム小Ｃ・粒Ｂ、炭化粒Ｄ／粘Ｂ、締Ｂ
2　10YR4/3　にぶい黄褐　ローム小Ｂ・粒Ｂ、炭化粒Ｄ／粘Ｂ、締Ｂ
3　10YR4/4　褐　ローム小Ａ・粒Ａ／粘Ｂ、締Ｂ

第２号土坑土層解説
1　10YR3/3　暗褐　ローム粒Ｃ／粘Ｂ、締Ｂ
2　10YR3/4　暗褐　ローム小Ｄ・粒Ｃ／粘Ｂ、締Ｂ
3　10YR4/3　にぶい黄褐　ローム粒Ａ／粘Ｂ、締Ｂ

第４号土坑土層解説
1　10YR3/3　暗褐　ローム粒Ｃ／粘Ｂ、締Ｂ
2　10YR3/4　暗褐　ローム粒Ｄ／粘Ｂ、締Ｂ
3　10YR4/3　にぶい黄褐　ローム粒Ｂ／粘Ｂ、締Ｂ

第 38 図　時期不明の土坑実測図（1）



第3号土坑土層解説

1　10YR3/4　暗褐　ローム小C・粒C、炭化粒D／粘B、締B
2　10YR4/4　褐　ローム小B・粒A／粘B、締B

第5号土坑土層解説

1　10YR3/4　暗褐　ローム小D・粒D／粘B、締B
2　10YR4/3　にぶい黄褐　ローム粒C／粘B、締B
3　10YR4/4　褐　ローム粒B／粘B、締B

第7号土坑土層解説

1　10YR3/4　暗褐　ローム小C・粒C、炭化粒D／粘B、締B
2　10YR4/3　にぶい黄褐　ローム小C・粒B／粘B、締B

第6号土坑土層解説

1　10YR4/3　にぶい黄褐　ローム粒D／粘B、締B
2　10YR4/4　褐　ローム粒C／粘B、締B
3　10YR4/6　褐　ローム粒B／粘B、締B

第8号土坑土層解説

1　10YR4/3　にぶい黄褐　ローム粒D／粘B、締B
2　10YR4/6　褐　ローム粒C／粘B、締B

第9号土坑土層解説

1　10YR3/4　暗褐　ローム中D・小C、炭化粒D／粘B、締B
2　10YR3/2　黒褐　ローム小C・粒B／粘B、締B
3　10YR4/4　褐　ローム粒A、炭化粒D／粘B、締B

第12号土坑土層解説

1　10YR4/3　にぶい黄褐　ローム小C・粒B、炭化粒D／粘B、締B
2　10YR4/6　褐　ローム中B・小B、炭化粒D／粘B、締B

第10号土坑土層解説

1　10YR4/3　にぶい黄褐　ローム粒C／粘B、締B
2　10YR4/6　褐　ローム粒A／粘B、締B

第13号土坑土層解説

1　10YR2/1　黒　ローム小C・粒D、炭化粒D／粘C、締B
2　10YR3/2　黒褐　ローム小B・粒B／粘C、締B
3　10YR3/2　黒褐　ローム小C・粒B、炭化粒D／粘C、締B
4　10YR3/3　暗褐　ローム中C・小C／粘C、締B
5　10YR3/4　暗褐　ローム中D・小C／粘B、締B
6　10YR3/4　暗褐　ローム中C・小B、炭化粒D／粘B、締B
7　10YR4/3　にぶい黄褐　ローム中A・小B、炭化粒D／粘B、締B

第11号土坑土層解説

1　10YR4/2　灰黄褐　ローム粒C／粘B、締B
2　10YR4/3　にぶい黄褐　ローム粒B／粘B、締B

第14号土坑土層解説

1　10YR3/4　暗褐　ローム小C・粒B、炭化粒C／粘B、締B
2　10YR4/4　褐　ローム中B・小A、炭化粒D／粘B、締B

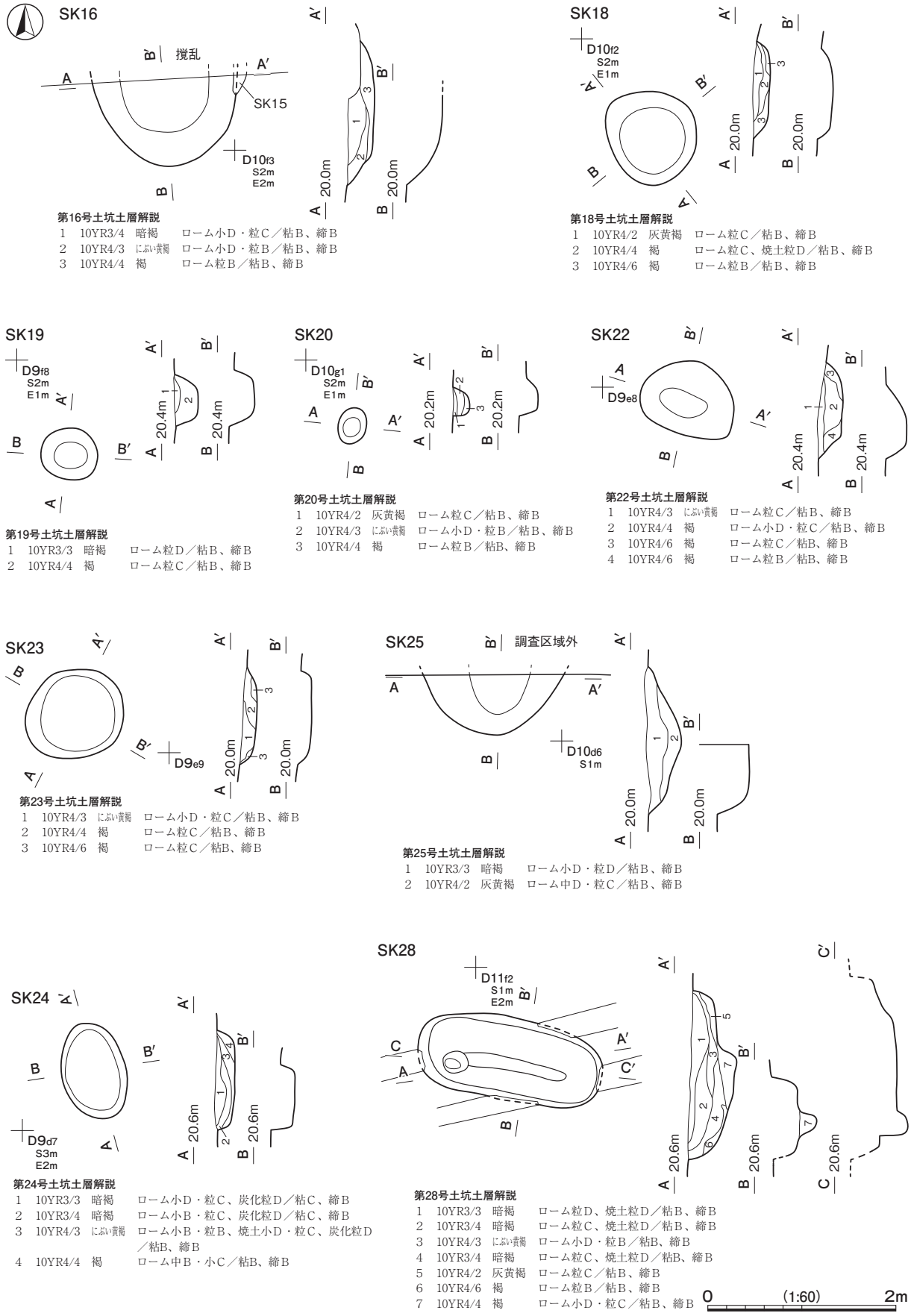
第15号土坑土層解説

1　10YR3/3　暗褐　ローム粒C、焼土粒D／粘B、締B

第17号土坑土層解説

1　10YR3/4　暗褐　ローム小C・粒B、炭化粒D／粘B、締B
2　10YR4/4　褐　ローム小B・粒B／粘B、締B

第39図　時期不明の土坑実測図（2）



第16号土坑土層解説

1　10YR3/4　暗褐　ローム小D・粒C／粘B、締B
2　10YR4/3　にぶい黄褐　ローム小D・粒B／粘B、締B
3　10YR4/4　褐　ローム粒B／粘B、締B

第18号土坑土層解説

1　10YR4/2　灰黄褐　ローム粒C／粘B、締B
2　10YR4/4　褐　ローム粒C、焼土粒D／粘B、締B
3　10YR4/6　褐　ローム粒B／粘B、締B

第19号土坑土層解説

1　10YR3/3　暗褐　ローム粒D／粘B、締B
2　10YR4/4　褐　ローム粒C／粘B、締B

第20号土坑土層解説

1　10YR4/2　灰黄褐　ローム粒C／粘B、締B
2　10YR4/3　にぶい黄褐　ローム小D・粒B／粘B、締B
3　10YR4/4　褐　ローム粒B／粘B、締B

第22号土坑土層解説

1　10YR4/3　にぶい黄褐　ローム粒C／粘B、締B
2　10YR4/4　褐　ローム小D・粒C／粘B、締B
3　10YR4/6　褐　ローム粒C／粘B、締B
4　10YR4/6　褐　ローム粒B／粘B、締B

第23号土坑土層解説

1　10YR4/3　にぶい黄褐　ローム小D・粒C／粘B、締B
2　10YR4/4　褐　ローム粒C／粘B、締B
3　10YR4/6　褐　ローム粒C／粘B、締B

第25号土坑土層解説

1　10YR3/3　暗褐　ローム小D・粒D／粘B、締B
2　10YR4/2　灰黄褐　ローム中D・粒C／粘B、締B

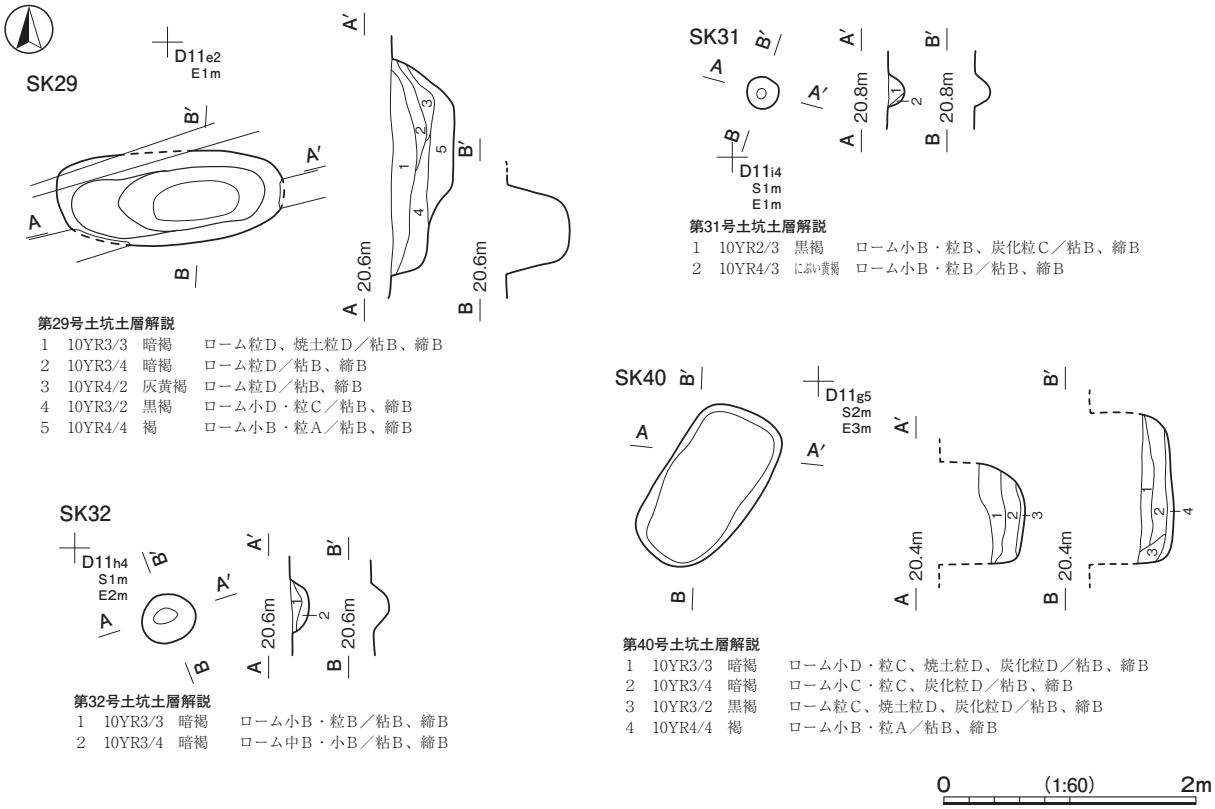
第24号土坑土層解説

1　10YR3/3　暗褐　ローム小D・粒C、炭化粒D／粘C、締B
2　10YR3/4　暗褐　ローム小B・粒C、炭化粒D／粘C、締B
3　10YR4/3　にぶい黄褐　ローム小B・粒B、焼土小D・粒C、炭化粒D／粘B、締B
4　10YR4/4　褐　ローム中B・小C／粘B、締B

第28号土坑土層解説

1　10YR3/3　暗褐　ローム粒D、焼土粒D／粘B、締B
2　10YR3/4　暗褐　ローム粒C、焼土粒D／粘B、締B
3　10YR4/3　にぶい黄褐　ローム小D・粒B／粘B、締B
4　10YR3/4　暗褐　ローム粒C、焼土粒D／粘B、締B
5　10YR4/2　灰黄褐　ローム粒C／粘B、締B
6　10YR4/6　褐　ローム粒B／粘B、締B
7　10YR4/4　褐　ローム小D・粒C／粘B、締B

第40図　時期不明の土坑実測図（3）



第29号土坑土層解説

1　10YR3/3　暗褐　　ローム粒D、焼土粒D／粘B、締B
2　10YR3/4　暗褐　　ローム粒D／粘B、締B
3　10YR4/2　灰黄褐　ローム粒D／粘B、締B
4　10YR3/2　黒褐　　ローム小D・粒C／粘B、締B
5　10YR4/4　褐　　ローム小B・粒A／粘B、締B

第31号土坑土層解説

1　10YR2/3　黒褐　　ローム小B・粒B、炭化粒C／粘B、締B
2　10YR4/3　にぶい黄褐　ローム小B・粒B／粘B、締B

第32号土坑土層解説

1　10YR3/3　暗褐　　ローム小B・粒B／粘B、締B
2　10YR3/4　暗褐　　ローム中B・小B／粘B、締B

第40号土坑土層解説

1　10YR3/3　暗褐　　ローム小D・粒C、焼土粒D、炭化粒D／粘B、締B
2　10YR3/4　暗褐　　ローム小C・粒C、炭化粒D／粘B、締B
3　10YR3/2　黒褐　　ローム粒C、焼土粒D、炭化粒D／粘B、締B
4　10YR4/4　褐　　ローム小B・粒A／粘B、締B

第 41 図　時期不明の土坑実測図（4）

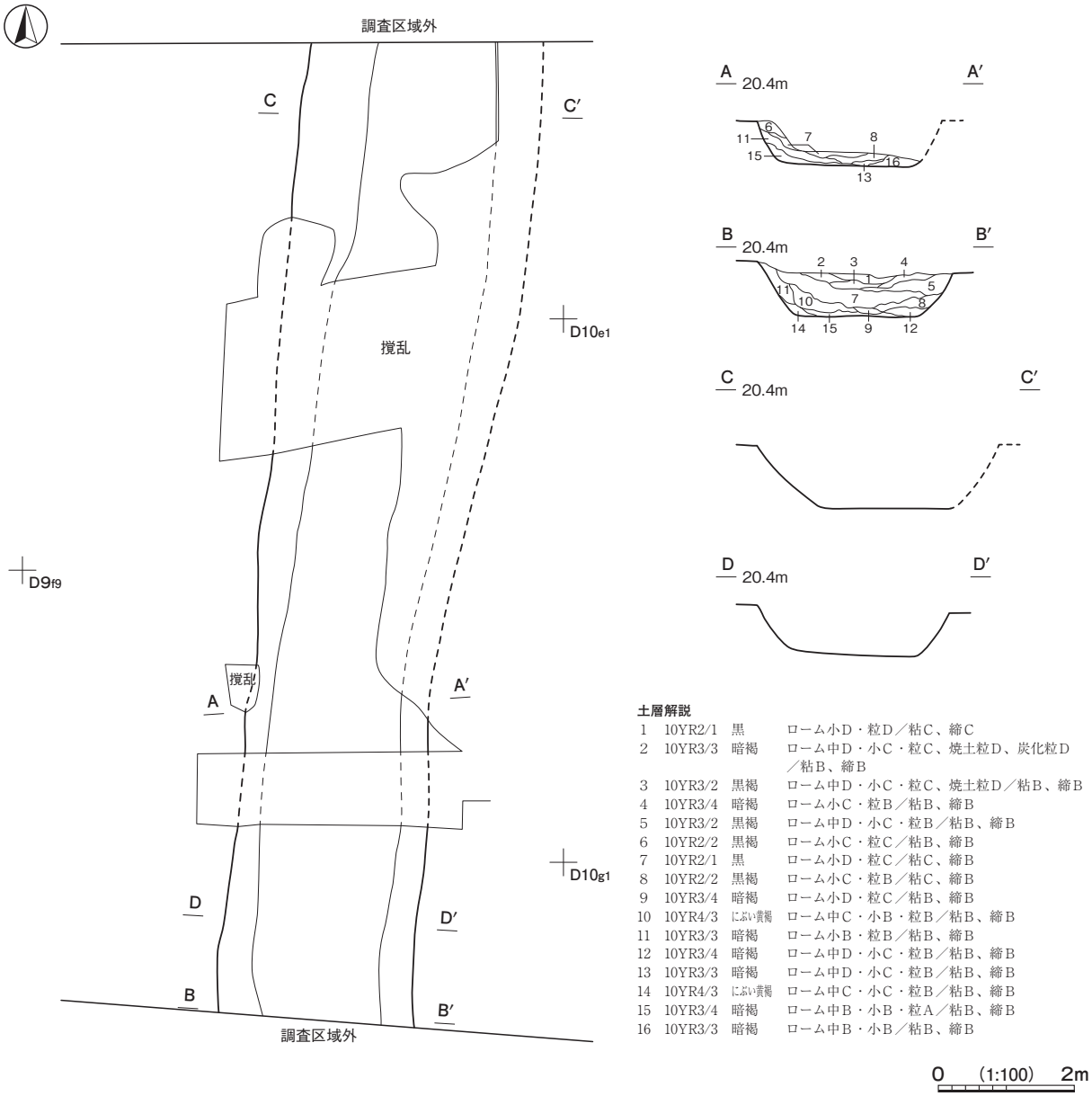
第 19 表　時期不明の土坑一覧（第 38 ～ 41 図）

番号	位置	長径方向	平面形	規模 長径×短径（m）	規模 深さ（cm）	壁面	底面	覆土	主な出土遺物	備考
1	D10h8	N－86°－E	［楕円形］	［1.31］×（0.83）	15	外傾	平坦	自然	弥生土器	
2	D10h6	－	円形	0.49 × 0.46	24	外傾	皿状	自然		
3	D10h6	－	円形	0.66 ×［0.63］	30	外傾	皿状	人為		
4	D10g6	N－71°－E	楕円形	0.51 ×［0.44］	30	外傾	皿状	自然		
5	D10h7	N－10°－W	［円形・楕円形］	0.91 ×（0.61）	24	外傾	平坦	自然		
6	D10h5	N－4°－E	楕円形	0.81 × 0.60	30	外傾	皿状	自然		
7	D10g5	－	円形	0.43 × 0.40	18	外傾	平坦	自然		
8	D10h4	N－7°－W	楕円形	0.57 × 0.41	16	外傾	皿状	自然		
9	D10g5	－	円形	0.32 × 0.30	30	外傾	皿状	人為		
10	D10h5	N－45°－E	楕円形	0.69 × 0.50	22	外傾	皿状	自然		
11	D10g4	N－51°－E	楕円形	1.45 × 1.00	18	外傾	平坦	人為		
12	D10g4	－	円形	0.64 × 0.63	26	外傾	平坦	人為		
13	D10g5	N－87°－W	楕円形	2.67 × 1.33	41	外傾	平坦	人為	土師器	
14	D10f4	N－13°－W	楕円形	0.80 × 0.47	11	外傾	平坦	人為		
15	D10f3	N－8°－W	［円形・楕円形］	（0.72）×（0.34）	16	外傾	平坦	自然		SK16→本跡
16	D10f3	N－1°－W	［楕円形］	（1.54）×（0.90）	37	外傾	平坦	人為		本跡→SK15
17	D10g2	N－11°－E	楕円形	0.55 × 0.46	21	外傾	平坦	人為		
18	D10f2	N－40°－W	楕円形	1.05 × 0.95	17	外傾	平坦	自然		
19	D9f8	N－76°－W	楕円形	0.61 × 0.55	25	外傾	平坦	人為		
20	D10g1	N－15°－E	楕円形	0.40 × 0.31	17	外傾	皿状	人為		
22	D9e8	N－69°－W	楕円形	1.05 × 0.78	25	外傾	平坦	人為		

番号	位置	長径方向	平面形	規模 長径×短径（m）	規模 深さ（cm）	壁面	底面	覆土	主な出土遺物	備考
23	D 9 d8	N－63°－E	楕円形	1.09 × 0.95	14	外傾	平坦	人為		
24	D 9 d7	N－16°－W	楕円形	1.05 × 0.70	21	外傾	平坦	人為		
25	D10d5	－	［円形・楕円形］	(1.50) × (0.65)	35	外傾	皿状	人為		
28	D11f2	N－78°－W	楕円形	［1.99］ × 0.87	49	外傾	凹凸 ピット１	人為	土師器	
29	D11e2	N－85°－E	楕円形	1.80 × 0.72	50	外傾	凹凸	人為	土師器　石器	
31	D11i4	－	円形	0.26 × 0.26	13	外傾	皿状	人為		
32	D11h4	－	円形	0.43 × 0.40	13	外傾	皿状	人為		
40	D11g5	N－31°－E	隅丸長方形	1.39 × 0.76	25［65］	外傾 垂直	平坦	人為		SI ３→本跡

(2) 溝　跡

第１号溝跡（第 42 図　ＰＬ３）

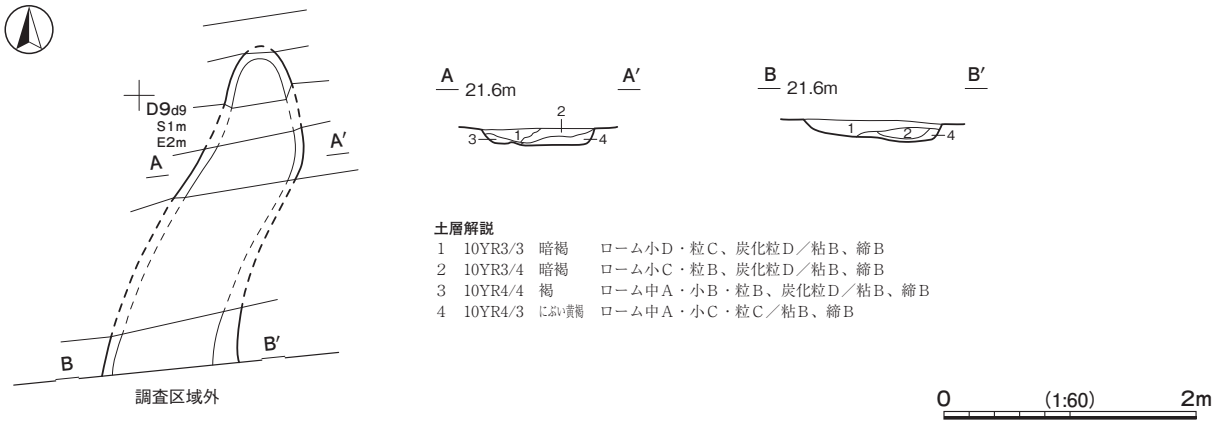


土層解説

1	10YR2/1	黒	ローム小Ｄ・粒Ｄ／粘Ｃ、締Ｃ
2	10YR3/3	暗褐	ローム中Ｄ・小Ｃ・粒Ｃ、焼土粒Ｄ、炭化粒Ｄ／粘Ｂ、締Ｂ
3	10YR3/2	黒褐	ローム中Ｄ・小Ｃ・粒Ｃ、焼土粒Ｄ／粘Ｂ、締Ｂ
4	10YR3/4	暗褐	ローム小Ｃ・粒Ｂ／粘Ｂ、締Ｂ
5	10YR3/2	黒褐	ローム中Ｄ・小Ｃ・粒Ｂ／粘Ｂ、締Ｂ
6	10YR2/2	黒褐	ローム小Ｃ・粒Ｃ／粘Ｂ、締Ｂ
7	10YR2/1	黒	ローム小Ｄ・粒Ｃ／粘Ｃ、締Ｂ
8	10YR2/2	黒褐	ローム小Ｃ・粒Ｂ／粘Ｃ、締Ｂ
9	10YR3/4	暗褐	ローム小Ｄ・粒Ｃ／粘Ｂ、締Ｂ
10	10YR4/3	にぶい黄褐	ローム中Ｃ・小Ｂ・粒Ｂ／粘Ｂ、締Ｂ
11	10YR3/3	暗褐	ローム小Ｂ・粒Ｂ／粘Ｂ、締Ｂ
12	10YR3/4	暗褐	ローム中Ｄ・小Ｃ・粒Ｂ／粘Ｂ、締Ｂ
13	10YR3/3	暗褐	ローム中Ｄ・小Ｃ・粒Ｂ／粘Ｂ、締Ｂ
14	10YR4/3	にぶい黄褐	ローム中Ｃ・小Ｃ・粒Ｂ／粘Ｂ、締Ｂ
15	10YR3/4	暗褐	ローム中Ｂ・小Ｂ・粒Ａ／粘Ｂ、締Ｂ
16	10YR3/3	暗褐	ローム中Ｂ・小Ｂ／粘Ｂ、締Ｂ

第 42 図　第１号溝跡実測図

第２号溝跡（第 43 図）



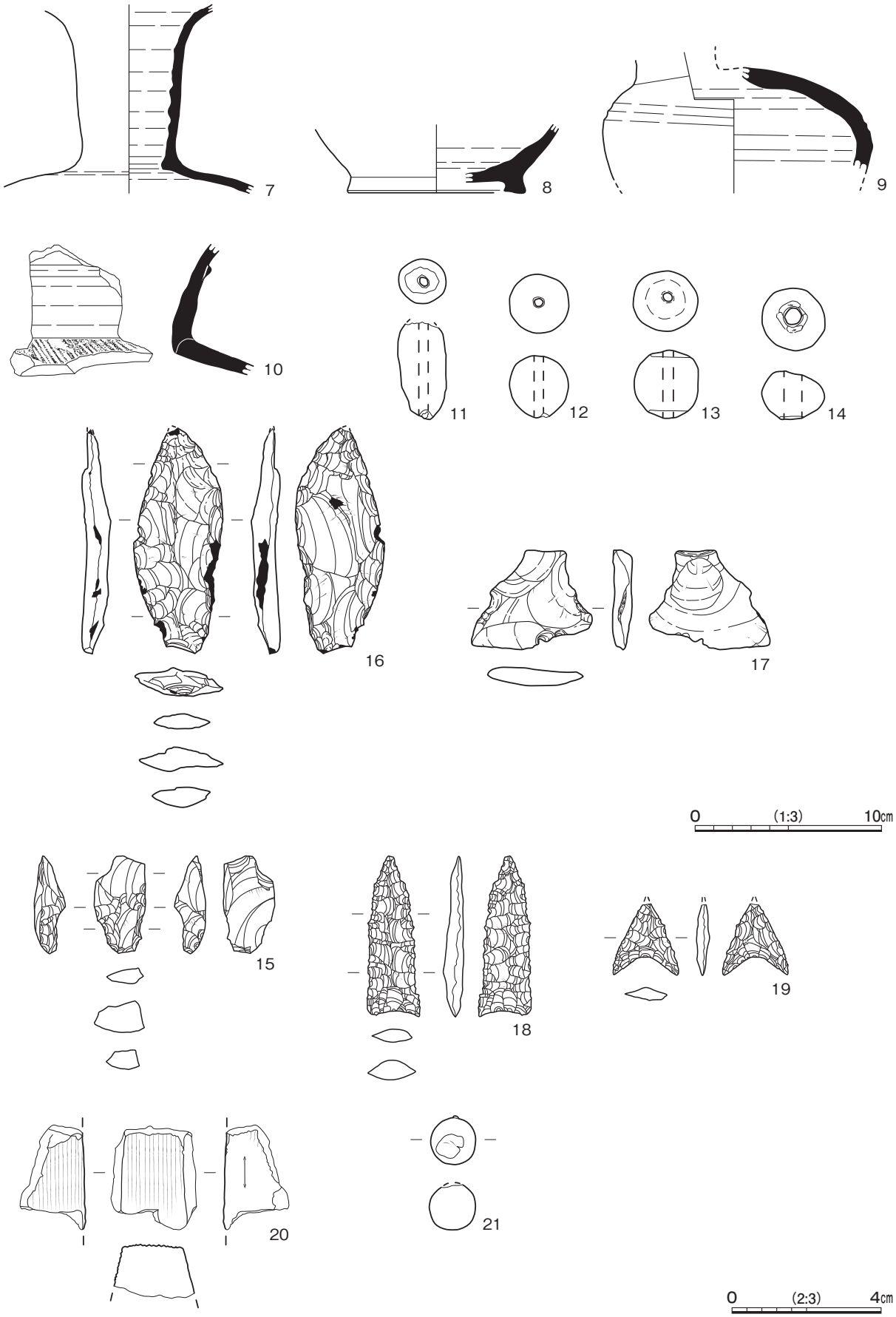
第 43 図　第２号溝跡実測図

第 20 表　時期不明の溝跡一覧

番号	位　置	方　向	平面形	規　模				断 面	壁 面	覆 土	主 な 出 土 遺 物	備　考
				長さ(m)	上幅(m)	下幅(m)	深さ(cm)					
1	Ｄ９d0～Ｄ９g0	Ｎ－７°－Ｅ	直線状	(14.40)	2.70～[3.55]	1.70～2.08	92	逆台形	外傾	人為	縄文土器　弥生土器　土師器　須恵器	
2	Ｄ９g1	Ｎ－18°－Ｅ	Ｓ字状	(2.70)	0.50～1.08	0.35～0.78	13	浅いU字	外傾	人為		

(3)　遺構外出土遺物

第 44 図　遺構外出土遺物実測図（1）



第 45 図　遺構外出土遺物実測図（2）

第 21 表　遺構外出土遺物一覧（第 44・45 図）

番号	種　別	器種	口径	器高	底径	胎　　土	色　調	焼成	特　　徴	出土位置	備　考
1	弥生土器	広口壺	［16.7］	［30.5］	［9.1］	長石・石英	にぶい褐	普通	口唇部縄文原体押圧　口縁部付加条二種付加１条　下端隆起線上に原体押圧　頸部 13 本櫛歯による連弧文　胴部との境に簾状文　胴部付加条二種付加１条羽状施文	TM 5	10%
2	弥生土器	広口壺	－	(4.8)	［10.6］	長石	橙	普通	胴部外面付加条一種付加２条　内面ヘラナデ　焦げ付着　底部布目痕	TM 5	10%
3	弥生土器	広口壺	－	(4.0)	－	長石・石英	にぶい赤褐	普通	複合口縁　附加条一種付加２条	SI 1	５％
4	弥生土器	広口壺	－	(8.4)	－	長石・石英	明褐	普通	付加条二種付加１条羽状施文	SK34	５％ PL12
5	土師器	甕	［18.8］	(3.9)	－	長石・石英・赤色粒子	橙	普通	口縁部外面ハケ目後ナデ　口唇部連続刺突文　口縁部内面ハケ目	表土	５％
6	土師器	手捏土器	－	(1.7)	4.0	長石	橙	普通	体部外面ヘラ削り　底部ヘラ削り後ナデ　内面ヘラナデ	TM 5	50%
7	須恵器	長頸瓶	－	(10.1)	－	長石・石英	暗灰黄	普通	頸部ロクロナデ　頸部内外面体部外面自然柚	SI 1	10% PL12
8	須恵器	瓶	－	(3.7)	［9.5］	長石	にぶい赤褐	普通	体部外面自然柚　内面ロクロナデ　高台部断面台形	SI 1	５％ PL12
9	須恵器	瓶	－	(6.3)	－	長石・石英	灰黄褐	普通	体部ロクロナデ　外面上部自然柚	SI 1	５％
10	須恵器	甕	－	(6.9)	－	長石・石英	にぶい黄橙	普通	頸部ロクロナデ　外面凸帯　体部外面平行叩き	表土	５％

番号	器　種	径	高さ	孔径	重量	胎　土	色　調	特　　徴	出土位置	備　考
11	管状土錘	2.6	(5.2)	0.5	(31.49)	長石・石英	にぶい赤褐	ヘラ削り後ナデ　一方向からの穿孔	TM 5	
12	球状土錘	3.2	3.3	0.5	39.97	長石・石英・雲母	橙	一方向からの穿孔	TM 5	
13	球状土錘	3.5	3.7	0.6	39.68	長石・石英・雲母	黄褐	一方向からの穿孔	TM 5	
14	球状土錘	3.4	2.6	0.9	25.78	長石・石英	にぶい黄褐	一方向からの穿孔	TM 4	

番号	器　種	長さ	幅	厚さ	重 量	材　　質	特　　徴	出土位置	備　考
15	ナイフ形石器	2.6	1.4	0.8	2.67	頁岩	素材は横長剥片　二側縁に腹面側からのブランディング加工　先端部欠損	TM 4	PL12
16	尖頭器	(12.1)	4.8	1.5	(75.59)	ガラス質黒色安山岩	素材は横長剥片　表面平坦で細かい剥離痕　裏面中央部素材の厚みを減じるような大きな剥離痕　先端部入念な両面調整	表土	PL12
17	二次加工のある剥片	5.3	6.5	1.0	28.42	デイサイト	横長剥片　側縁部３か所に腹面側からの剥離痕	SI 1	PL12
18	石鏃	4.3	1.4	0.6	2.77	チャート	凹基無茎鏃　両面押圧剥離	SI 1	PL12
19	石鏃	(1.9)	1.8	0.3	(0.71)	チャート	凹基無茎鏃　両面押圧剥離	SK29	PL12
20	砥石	(2.8)	(2.3)	(1.8)	(11.82)	凝灰岩	砥面１面　側面・裏面削り痕　欠損	SI 1	

番号	器　種	径	高さ	重 量	材　　質	特　　徴	出土位置	備　考
21	鉄砲玉	1.3	(1.2)	(10.33)	鉛カ	平坦面１か所	SI 1	PL12

第４節　総　　括

１　はじめに

今回の調査では、旧石器時代から江戸時代までの遺構・遺物を確認した。ここでは、当遺跡の中心となる旧石器時代と古墳時代について概観し、総括とする。

２　旧石器時代

石器集中地点２か所を確認した。第１号石器集中地点の石器群には接合関係が認められず、散在した状況で出土している。本地点の性格は不明であるが、付近の調査区域外に石器製作跡が存在している可能性がある。石材は在地石材で、ガラス質黒色安山岩が５点（95.77g）、頁岩が５点（24.96g）、流紋岩が１点（1.65g）である。出土層位の第Ⅱ・Ⅲ層はＡＴ降灰層準の直上にあたることから、約２万９千年前以降の所産とみられる。第２号石器集中地点の石器群は 36 点中 17 点が接合し、６点の接合資料を確認できた。平面分布は径４ｍほどの円形の範囲に集中している。以上のことから、本地点の性格は石器製作跡と考えられる。楔形石器が１点出土しているが、ほかは自然面を残す剥片が多く、調整剥片などもみられないことから、主に母岩から素材を獲得する荒割段階の製作跡と考えられる。小規模な礫群を構成する接合資料６は焼破礫であり、火の使用が認められる。石材は在地石材で、石核・剥片が頁岩 15 点（92.17g）、玉髄７点（84.19g）、瑪瑙４点（44.16g）、デイサイト２点（49.71g）、流紋岩２点（46.98g）、チャート１点（24.01g）で、礫は石英斑岩５点（4766.4g）である。出土層位は、AT 降灰層準があるとみられる第Ⅳ層を中心とした第Ⅲ～Ⅴ層であり、約３万年前後の所産とみられる。両地点とも黒曜石や珪質頁岩が認められなかったこと、在地石材のガラス質黒色安山岩が第１号石器集中地点では割合が多い一方、第２号石器集中地点では確認できなかったことなどが特徴的である。

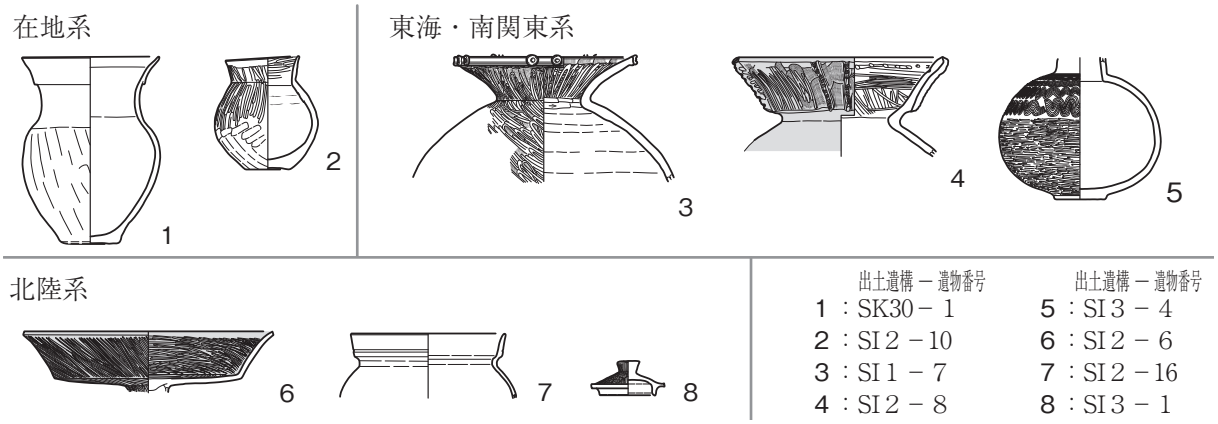
３　古墳時代について

今回の調査で確認した前期の遺構･遺物は、弥生時代から古墳時代への移行期にあたるもので、便宜上、「前期前葉」と表記した。また、弥生土器と土師器の区分については、縄文をもつものを弥生土器、縄文をもたないものを土師器と表記した。前期の遺構としては、竪穴建物跡４棟、竪穴遺構１基、土坑 12 基を確認した。以下、出土土器や各遺構の性格と時期、集落の構造などについて検討する。

(1) 出土土器について

今回の調査では、在地の土器（在地系）とともに東海地方や南関東地方の特徴をもつ土器（東海・南関東系）と北陸地方の特徴をもつ土器（北陸系）が出土している。ここでは、代表的な土器について記述する（第 46 図）。

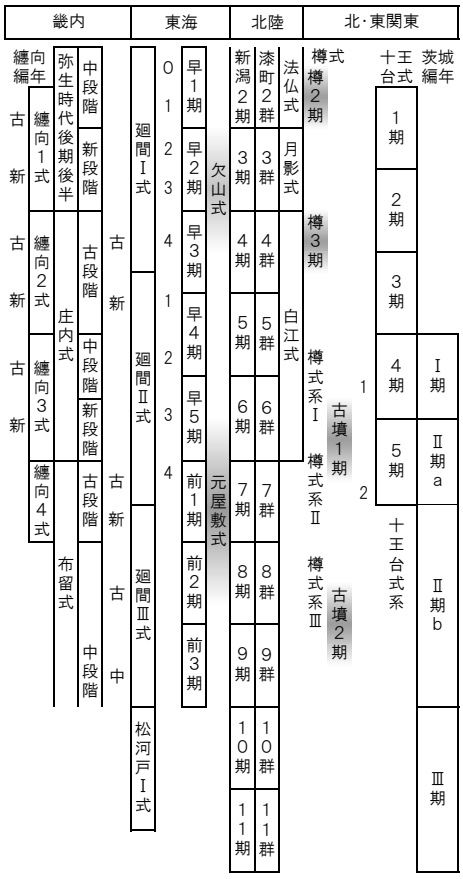
在地系は第 30 号土坑出土の１や第２号竪穴建物跡出土の２で、在地の弥生土器が無文化したものと考えられる壺などである。１は弥生土器の広口壺の器形であるが、縄文はなく無文である。２の器形も頸部の屈曲が弱く、口縁部が伸びて開く弥生土器の広口壺を想起させる。無文化の特徴から茨城編年のⅡ期ｂ段階の土器と考えられる。器種構成の点では小型丸底坩がみられないことから、Ⅱ期ｂ段階でも古い時期と判断される。東海・南関東系には、第１号竪穴建物跡出土の３や第２号竪穴建物跡出土の４、第３号竪穴建物跡出土の５の壺などがある。３は頸部から「く」の字状に強く外反する口縁をもち、口縁部と体部



第46図　代表的な土器

外面がハケ目調整後に粗い磨きが施されている。口唇部は横ナデにより平坦面が作られ、断面は四角形で、口唇下部がわずかに張り出している。平坦面に２個一対になる円形浮文が貼付されている。円形浮文には竹管状工具による刺突文が施されている。口縁部の三分の一を欠いているが、５単位配されていたとみられる。器形や円形浮文をもつことから、弥生土器の装飾壺が無文化したものと考えられる。４は二重口縁壺である。体部から口縁部が外反して「く」の字状に開き、口縁部下部が肥厚し段をなしている。口縁部外面がハケ目調整後に粗い磨きが施されている。ハケ状工具による刻みをもつ２個一対の棒状浮文が４単位配されている。２個の浮文間にはハケ目が残ることから、ハケ目→棒状浮文→磨きの順に施されたとみられる。口縁部内面は磨かれ、端部付近に押し引きによる連続した刺突文が巡っている。器面外面は赤彩されている。５は弥生土器の装飾壺の特徴をもつ土器である。口縁部を欠くが、体部はやや横長の球状で下方に最大径を有し、底部が突出している。体部上半には８本の櫛歯状工具による直線文とその下に４段の波状文が施され、下半には横位の磨きが密に施されている。この３点の土器は、その特徴から廻間Ⅱ～Ⅲ式期のものとみられる。北陸系は、第２号竪穴建物跡出土の６・７、第３号竪穴建物跡出土の８がある。６は大型の高坏である。脚部を欠くが坏部は盤状で口縁に向かって外反し、口唇部断面は角形である。器面全体に緻密な磨きと赤彩が施されている。脚部との接合部は突出している。胎土は精選され緻密で、焼成も良好である。土器の特徴から北陸北東部に多い中山南形高坏で、越後・越中に多いタイプ（ＡⅡ類）である[1)]。７は頸部と口縁部の間に段をもち、口縁部がほぼ直立する甕である。口縁部外面下端が凸帯状に肥厚し、上部に１条の凹線が巡っている。頸部内面に平坦面があり、口縁部との境に明瞭な段を有している。口縁部内面はハケ目後にナデが施されている。胎土は白色の細砂粒が目立ち、焼成は普通である。器形の特徴から北陸地方の有段口縁甕である。８は内面にかえりをもつ蓋である。断面が逆台形の長めの摘みを有する。摘みの側面から蓋の外面にかけて丁寧な磨きを施している。胎土は白色や赤色の粒子が目立ち、砂粒を含み、焼成は普通である。富山県に多い口縁部が屈曲して上方に伸びるタイプの細頸壺に付く蓋である。これらの土器は、特徴や胎土から北陸で製作されたものではないが、系統的に北陸北東部にみられる土器である。時期は新潟シンポ編年の５期あるいは６期とみられる[2)]。

次に３系統の土器が出土した第２・３号竪穴建物跡の遺物出土状況を整理する。２・４・６・７が出土した第２号竪穴建物跡の覆土下層は、不自然な堆積状況から埋め戻されたと考えられる。また、柱穴の覆土の堆積状況から、柱が抜き取られたと推測される。さらに、床面が部分的に被熱によって赤変硬化しており、覆土下層で焼土も確認されたことから、廃絶時に焼却された可能性が高い。６の高杯に煤の付着が認められることも、その証左とみられる。２は北部の床面から横位の状態で、４は北部の焼土ブロックを含んだ覆土下層から正位



第22表　編年対応表　註３）を一部改変

の状態で、６は南西コーナー部の覆土最下層から正位の状態で、それぞれ出土した。７は南部の覆土下層から大型片が内面を上にした状態で出土し、付近の２片が接合している。５・８が出土した第３号竪穴建物跡の覆土の堆積状況も、第２号竪穴建物跡とほぼ同様で、床面から炭化材が出土しており、やはり廃絶時に上屋を焼却した可能性が高い。５は北壁際の覆土下層からほぼ正位の状態で、８は南西コーナー部の床面から逆位の状態で、それぞれ出土している。第２・３号竪穴建物跡の主な遺物は、床面や覆土下層から出土している。埋め戻し時に廃棄・遺棄・埋納されたものと推測される。以上の出土状況から、第２・３号竪穴建物跡から出土した６点の土器は、一括性が高く、在地系、東海・南関東系、北陸系とした３系統の土器は同時に存在したとみられる。

さらに、現在の編年表（第22表）[3]を参考に対応関係を整理すると、在地系が茨城編年のⅡ期ｂ段階の古い時期であれば、東海・南関東系が廻間Ⅱ～Ⅲ式期に該当し、今回の出土状況と大きな齟齬はない。一方、出土した北陸系は新潟シンポ５期あるいは６期とみられ、茨城編年Ⅰ期～Ⅱ期ａ段階に平行すると位置づけられており、在地系や東海・南関東系よりも古い時期ということになる。出土した北陸系は北陸地方で製作されたものではないとみられることから、その製作法が波及した先で製作されたものが持ち込まれたものと考えられる。他の土器との時期差の説明については、北陸系の製作法の波及に時間を要した、製作法の波及に時間がかからなかったとすれば、搬入された北陸系が伝世した、北陸系が移動するのに時間を要した、また、北陸系の製作法が波及した先で古い土器の形が残ったなど、様々な理由が想定できる。北陸系の出土例は、県内でも土浦市寄居遺跡[4]をはじめとして確認されており、北陸系が３世紀代に広範囲に移動・波及したことが知られている。これまで、こうした現象は月影式（新潟シンポ３期）以降の時期と考えられてきたが、近年では法仏式（新潟シンポ２期）の時期にまでさかのぼることが確認され、福島県会津地方を経て太平洋岸のいわき市にまで至っている。本遺跡が太平洋に注ぐ那珂川・涸沼川の最下流部に位置することから、出土した北陸系は、太平洋岸伝いに北から搬入されたものである可能性も考えられる[5]。こうした土器編年や土器の移動の問題は、茨城県域における古墳時代の始まりの実相に関わる重要な課題である。さらなる類例の増加が期待される。

(2)　遺構について

前期の遺構には、竪穴建物４棟と竪穴遺構１基、土坑12基がある。第１号竪穴建物は一辺10ｍほどの隅丸方形の大型建物、第２号竪穴建物は北壁を攪乱されているが、一辺６ｍほどの方形か隅丸長方形の建物、第３号竪穴建物は一辺８ｍほどの隅丸方形の建物である。攪乱のため確認できなかった部分があるが、貼床で柱穴や炉、貯蔵穴をもつことから、この３棟は居住施設と考えられる。その中でも第１号竪穴建物は大型であり、中心的なものであったとみられる。また、３棟は近接しながらも一定の距離を置き、重複関係がないことや出土土器から同時期に存在したと考えられる。主屋とそれに付随する建物といった関係も想定できる。一方、第４号竪穴建物の規模は、一辺が５ｍほどで小さな炉はあるが柱穴もなく、地床で

床面も硬化していない。規模や形状から建物と判断したが、上屋の存在を示す証左はない。占地の点からも第１～３号竪穴建物は調査区の中央に位置するのに対して、第４号竪穴建物は東側の台地先端部に位置している。第１～３号竪穴建物とは明らかに異質である。時期は、出土土器から第１～３号竪穴建物と同時期と考えられる。また、第４号竪穴建物は第39・40号土坑を掘り込み、第34・37号土坑に掘り込まれるという重複関係があることから、これらの土坑と近い時期に構築、機能していたことが考えられる。土坑12基は、第５号墳丘下から確認され、土坑群を形成している。径１～２ｍ、深さ30～40㎝の円形のものがほとんどで、同じ目的をもって構築されたものとみられる。特に第30号土坑からは、５点の壺が逆位に埋納された状況で出土しており、何らかの祭祀行為が行われたことを示している。土坑底面とそれらの土器との間には間層があり、ある程度埋め戻した段階で土器を並べたとみられる。逆位の埋納状況や西寄りの１か所からまとまって出土していることから、埋葬時の伏せ甕のような行為が想像される。これらの土坑群は、埋葬や何らかの祭祀行為に関係したものと推測される。すべての土坑の時期を特定することはできないが、６世紀末から７世紀初頭に築造された第５号墳の墳丘下から確認されたことや、第30号土坑から出土した土器などから、第１～３号竪穴建物と時期が近いと推測される。第４号竪穴建物は位置や重複関係などから土坑群に関係が強いと考えられ、居住施設などではなく祭祀行為に関係した施設と想定したい。また、第１号竪穴遺構は、周囲に時期不明とした土坑が集中的に分布している点が第４号竪穴建物跡と類似しており、関連も想起される。

(3) 集落について

前述のように第１～４号竪穴建物と土坑群は、前期と推測され、一つの集落を構成していたと考えられる。集落は３棟の竪穴建物からなる居住域と、12基の土坑群、そして居住施設ではない１棟の竪穴建物からなる墓域･祭祀域に分かれていたと推測できる。また、出土遺物が細片で時期不明とした第１号溝は、覆土の土質が古墳時代前期の遺構覆土と類似しており、集落に伴う区画溝であった可能性もある。集落は、現在涸沼と呼ばれる海跡湖を一望できる標高約20ｍの台地上で短期間に営まれた小規模な集落といえよう。なお、第２号竪穴建物跡の炉から出土した２点の炭化材を年代測定した結果、補正年代で1865±20yr ＢＰ､1915±20yr ＢＰ､較正暦年代でcal ＡＤ 125～230､cal ＡＤ 61～209という値であった（付章参照）。今回の測定結果のみで実年代を特定することはできないが、出土土器の様相も考慮すると、第２号竪穴建物を含む集落は３世紀代と推定できる。

(4) 後期古墳について

後期の遺構としては、古墳２基を確認した。第４・５号墳ともに円墳であることが明らかになった。規模も同程度で、積石の横穴式石室をもつことも共通している。石室石材には第４号墳が粘板岩状粘土のブロックが使用されているが[6)]、第５号墳は砂岩が使用されており、違いが認められる。副葬品は第４号墳から多くの馬具が出土したことが報告されているが[7)]、第５号墳からは、攪乱のため出土遺物が少なく断定できないが、馬具は出土していない。被葬者の性格の違いを反映しているのかもしれない。築造時期は第４号墳が６世紀後半、第５号墳が６世紀末から７世紀初頭とみられることから、第４号墳から第５号墳の順に築造されたことが明らかになった。

4 おわりに

今回の調査で、当遺跡は、約３万年前の旧石器時代には石器製作を伴う活動の場であり、３世紀代には集落を営む生活の場となり、６世紀後半から７世紀初頭には古墳を築造する埋葬の場になっていたことが明ら

かになった。特に３世紀代の集落跡からは、東海・南関東や北陸地方に系統をもつ土器が出土するなど、茨城県東部の弥生時代から古墳時代への変遷を考える上で貴重な資料を得ることができた。今後、これらの資料が茨城県における古墳時代の始まりや土器の編年研究の進展に寄与することを期待したい。

註

１） 滝沢規朗「古墳時代前夜に盛行する中山南型式の高坏について―北陸北東部固有の大型・有稜・身の浅い高坏についての一試論」『新潟考古』第 21 号　新潟県考古学会　2010 年３月

２） 滝沢規朗「北陸における弥生時代後期～古墳時代前期の土器について―東の越と西の越―」『東生』第８号　東日本古墳確立期土器検討会　2019 年５月

３） 樫村宣行ほか「弥生土器から土師器へ―土器からみた地域間交流―」『シンポジウム　考古学からみる茨　城の交易と交流』茨城県考古学協会　2016 年１月

４） 土生朗治「(仮称）上高津団地建設事業地内埋蔵文化財調査報告書　寄居遺跡　うぐいす平遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第 84 集　1994 年３月

５） 北陸系土器については、赤沢徳明氏、滝沢規朗氏のご教示による。

６） 和田正年ほか『天神山古墳群（４号墳)』旭村教育委員会・天神山古墳群発掘調査会　1983 年３月

７） ６）に同じ

参考文献

赤塚次郎「廻間遺跡」『愛知県埋蔵文化財センター調査報告書』第 10 集　財団法人愛知県埋蔵文化財センター　1990 年３月

岡本淳一郎「４　砺波平野北部の古墳出現期土器」『下老子笹川遺跡発掘調査報告－能登自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘報告Ⅴ－　富山県文化振興財団埋蔵文化財発掘調査報告』第 31 集　2006 年３月

柏瀬拓巳「茨城県南部における古墳出現期の集落出土土器編年」『駿台史学』第 174 号　駿台史学会　2022 年２月

滝沢規朗「土器の分類と変遷－いわゆる北陸系を中心に－」『新潟県における高地性集落の解体と古墳出現』第１分冊　新潟県考古学会　2005 年７月

田嶋明人「法仏式と月影式」『石川県埋蔵文化財情報』第 18 号　財団法人石川県埋蔵文化財センター　2007 年 10 月

付　章　自 然 科 学 分 析

大谷川遺跡の自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

本報告では、大谷川遺跡より出土した炭化材の放射性炭素年代測定・炭化材同定と大谷川遺跡の基本土層（ローム層）のテフラの検出同定・重鉱物組成・火山ガラス比について分析・報告する。

Ⅰ　炭化材の分析

1　試料

試料は、大谷川遺跡から検出された第２号竪穴建物跡（SI ２）から出土した炭化材２点（No. １、No. ２）である。なお、第２号竪穴建物跡は、調査所見から３世紀と推定されている。

2　分析方法

(1) 放射性炭素年代測定

分析試料は AMS 法で実施する。試料表面の汚れや付着物をピンセット、超音波洗浄などにより物理的に除去する。塩酸（HCl）により炭酸塩等酸可溶成分を除去、水酸化ナトリウム（NaOH）により腐植酸等アルカリ可溶成分を除去、HCl によりアルカリ処理時に生成した炭酸塩等酸可溶成分を除去する（酸・アルカリ・酸処理：AAA）。濃度は HCl、NaOH 共に最大 1mol/L である。一方、試料が脆弱で 1mol/L では試料が損耗し、十分な炭素が得られないと判断された場合は、薄い濃度の NaOH の状態で処理を終える。その場合は AaA と記す。

精製された試料の燃焼、二酸化炭素の精製、グラファイト化（鉄を触媒とし水素で還元する）は Elementar 社の vario ISOTOPE cube と Ionplus 社の Age3 を連結した自動化装置を用いる。処理後のグラファイト・鉄粉混合試料を NEC 社製のハンドプレス機を用いて内径 1mm の孔にプレスし、測定試料とする。

測定はタンデム加速器をベースとした 14C-AMS 専用装置（NEC 社製）を用いて、14C の計数、13C 濃度（13C/12C）、14C 濃度（14C/12C）を測定する。AMS 測定時に、米国国立標準局（NIST）から提供される標準試料（HOX- Ⅱ）、国際原子力機関から提供される標準試料（IAEA-C6 等）、バックグラウンド試料（IAEA-C1）の測定も行う。

δ^{13}C は試料炭素の 13C 濃度（13C/12C）を測定し、基準試料からのずれを千分偏差（‰）で表したものである。放射性炭素の半減期は LIBBY の半減期 5,568 年を使用する。また、測定年代は 1950 年を基点とした年代（BP）であり、誤差は標準偏差（One Sigma;68%）に相当する年代である。測定年代の表示方法は、国際学会での勧告に従う（Stuiver and Polach,1977）。また、暦年較正用に一桁目まで表した値も記す。暦年較正に用いるソフトウエアは、OxCal4.4（Bronk,2009）、較正曲線は IntCal20（Reimer et al.,2020）である。

(2) 炭化材同定

試料を自然乾燥させた後、木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の３断面の割断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織の種類や配列を観察し、その特徴を現生標本および独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類を同定する。

なお、木材組織の名称や特徴は、島地・伊東（1982）、Wheeler 他（1998）、Richter 他（2006）を参考にする。また、日本産樹木の木材組織については、林（1991）や伊東（1995,1996,1997,1998,1999）を参考にする。

3　結果

(1) 放射性炭素年代測定

結果を表１、図１に示す。SI ２出土炭化材の測定年代（補正年代）は、No. 1 が 1865 ± 20yrBP、No. 2 が 1915 ± 20yrBP の値を示す。

暦年較正は、大気中の 14C 濃度が一定で半減期が 5,568 年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の 14C 濃度の変動、及び半減期の違い（14C の半減期 5,730 ± 40 年）を較正することによって、暦年代に近づける手法である。暦年較正年代は、測定誤差を２σとして計算させた結果、No. 1 が calAD 125 ～ 230、No. 2 が calAD 61 ～ 209 である。

(2) 炭化材同定

結果を表１に併せて示す。検出された種類は広葉樹１種類（クリ）である。また、No. 1 は試料が少量であったため、樹種同定が不可能であった。以下に検出された種類の木材解剖学的特徴等を述べる。

・クリ（Castanea crenata Sieb. et Zucc.）　ブナ科クリ属

環孔材で、孔圏部は 3-4 列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1-15 細胞高。

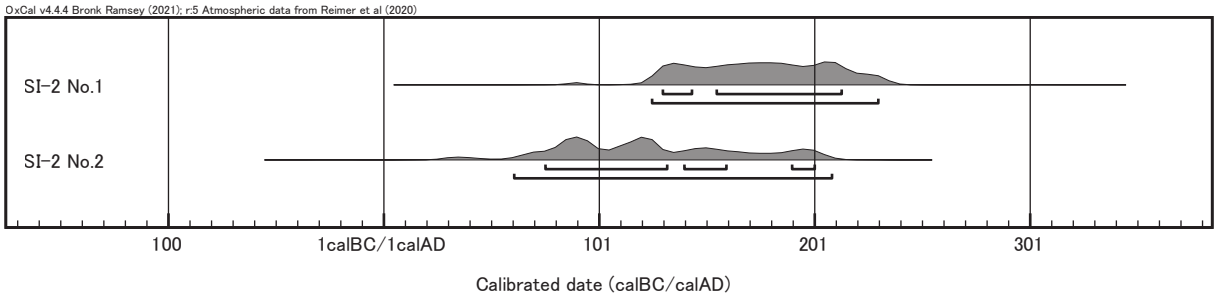


図１　暦年較正結果

表1　放射性炭素年代測定・炭化材同定結果

試料名	性状	分析方法	測定年代 yrBP	δ13C (‰)	暦年較正用	暦年較正年代								Code No.	
							年代値						確率		
SI-2 No.1	炭化材 不明	AaA	1865±20	-28.69±0.36	1867±21	σ	cal AD	130 – cal AD	144	1820	–	1807	calBP	12.7	pal-14913	YU-19000
							cal AD	155 – cal AD	213	1795	–	1737	calBP	55.6		
						2σ	cal AD	125 – cal AD	230	1825	–	1720	calBP	95.4		
SI-2 No.2	炭化材 クリ	AaA	1915±20	-30.5±0.27	1916±21	σ	cal AD	76 – cal AD	132	1875	–	1818	calBP	50.7	pal-14914	YU-19001
							cal AD	140 – cal AD	160	1810	–	1791	calBP	11.7		
							cal AD	190 – cal AD	201	1760	–	1750	calBP	5.9		
						2σ	cal AD	61 – cal AD	209	1889	–	1742	calBP	95.4		

1)年代値の算出には、Libbyの半減期5,568年を使用。
2)yrBP年代値は、1950年を基点として何年前であるかを示す。
3)付記した誤差は、測定誤差σ(測定値の68%が入る範囲)を年代値に換算した値。
4)AAAは酸－アルカリ－酸処理、AaAはアルカリの濃度を薄くした処理を示す。
5)暦年の計算には、Oxcal4.4を使用。
6)暦年の計算には表に示した丸める前の値を使用している。
7)1桁目を丸めるのが慣例だが、暦年較正曲線や暦年較正プログラムが改正された場合の再計算や比較が行いやすいように、1桁目を丸めていない。
8)統計的に真の値が入る確率はσは68%、2σは95%である。

4　考察

第２号竪穴建物跡（SI ２）から出土した炭化材について放射性炭素年代測定を実施した結果、No.1 は補正年代で 1865 ± 20yrBP、暦年代で calAD 125 ～ 230、No. ２は補正年代で 1915 ± 20yrBP、暦年代で calAD 61 ～ 209 の値が得られた。調査所見では第２号竪穴建物跡は３世紀頃と推定されており、２試料とも概ね同程度の年代値が得られている。よって、第２号竪穴建物跡が使われていた頃の年代を示している可能性があり、調査所見とも大きく乖離しない。

一方、炭化材同定の結果、No. １は不明であったが、No. ２はクリに同定された。クリは、関東地方の里山林を構成する樹木の一種で、人里近くに多く、比較的入手が容易な樹木である。里山林は、適度な伐採や粗朶の収奪などが行われることにより維持管理される森林で、萌芽による更新が容易な陽樹で構成される。材は重硬で強度と耐久性が高く水湿に強い。用途は多く、土木材や建築材（建物の柱材、屋根など）、家具材、器具材などで使用されている。また、火持ちも良いことから薪炭材としても優良である。

Ⅱ　ローム層の分析

1　試料

試料は SS ２基本土層断面より採取されている。試料採取断面では、上位よりⅠ層～Ⅶ層に分層されている。これらのうち、Ⅰ層からⅢ層までは褐色のローム層、Ⅳ層とⅤ層はやや色調の暗い褐色のローム層いわゆる暗色帯であり、Ⅵ層は軽石の少量混じる褐色のローム層である。Ⅶ層は層厚約 20cm の黄色を呈する軽石質テフラの降下堆積層である。このテフラ層は、調査区の地理的位置と黄色軽石を主体とする層相およびその層厚と周辺域におけるテフラの産状から、赤城火山より 4.5 万年前以前に噴出した赤城鹿沼テフラ (Ag-KP: 新井 ,1962; 町田・新井 ,2003) に同定される。

発掘調査ではⅢ層とⅣ層から石器などの遺物が出土している。試料はⅠ層からⅦ層上部まで、上位から試料番号①～⑭の計 14 点が採取されている。各試料の採取層位は、結果を呈示した図２に柱状図として併記する。

分析は、火山ガラス質テフラである姶良丹沢テフラ（AT：後述）や立川ローム上部ガラス質テフラ（UG：後述）の降灰層準を確認し、各層の重鉱物組成を網羅して標準層序との比較を実施することを目的とするため、試料番号②、④、⑥、⑩、⑫、⑭の計６点を選択した。

2　分析方法

試料約 40g に水を加え超音波洗浄装置により分散、250 メッシュの分析篩を用いて水洗し、粒径 1/16mm 以下の粒子を除去する。乾燥の後、篩別し、得られた粒径 1/4mm-1/8mm の砂分をポリタングステン酸ナトリウム（比重約 2.96 に調整）により重液分離、重鉱物を偏光顕微鏡下にて 250 粒に達するまで同定する。重鉱物同定の際、不透明な粒については、斜め上方からの落射光下で黒色金属光沢を呈するもののみを「不透明鉱物」とする。「不透明鉱物」以外の不透明粒および変質等で同定の不可能な粒子は「その他」とする。

火山ガラス比は、重液分離した軽鉱物分における砂粒を 250 粒数え、その中の火山ガラスの量比を求める。火山ガラスの形態分類は、バブル型・中間型・軽石型の３タイプに分類した。各型の形態は、バブル型は薄手平板状、中間型は表面に気泡の少ない厚手平板状あるいは破砕片状などの塊状ガラスであり、軽石型は小気泡を非常に多く持った塊状および気泡の長く伸びた繊維束状のものとする。また、火山ガラスにおける「その他」とは、軽鉱物分における火山ガラス以外の粒子（石英や長石類などの鉱物粒子および風化変質粒など）である。

3　結果

結果を表２、図２に示す。重鉱物組成は、Ⅰ層からⅣ層上部までは斜方輝石が多く、60% 前後を占め、他に少量～中量の不透明鉱物と微量～少量のカンラン石および角閃石および微量の単斜輝石が含まれる。Ⅴ層ではカンラン石が 30% 程度で最も多いが、斜方輝石と角閃石および不透明鉱物も 20% 程度含まれる。Ⅵ層では斜方輝石が 40% 程度で最も多く、20% ほどの角閃石と不透明鉱物および 10% ほどのカンラン石が含まれる。Ⅶ層は不透明鉱物が最も多く、約 50% を占め、次いで角閃石が 25% 程度、他に少量のカンラン石と斜方輝石が含まれる。

火山ガラス比では、Ⅰ層からⅣ層上部までの層位に少量のバブル型火山ガラスが含まれ、Ⅰ層とⅡ層には微量の中間型火山ガラスが含まれる。Ⅴ層以下の試料には火山ガラスは極めて微量しか含まれない。

表2　SS-2基本土層サンプルの重鉱物・火山ガラス比分析結果

層名	試料番号	カンラン石	斜方輝石	単斜輝石	角閃石	不透明鉱物	その他	合計	バブル型火山ガラス	中間型火山ガラス	軽石型火山ガラス	その他	合計
Ⅰ	2	7	154	7	3	73	6	250	6	3	0	241	250
Ⅲ	4	5	160	6	11	49	19	250	9	3	0	238	250
Ⅳ	6	34	144	2	17	30	23	250	8	2	0	240	250
Ⅴ	10	78	56	0	45	53	18	250	1	0	0	249	250
Ⅵ	12	25	103	3	60	49	10	250	1	1	0	248	250
Ⅶ	14	15	34	2	67	125	7	250	1	0	0	249	250

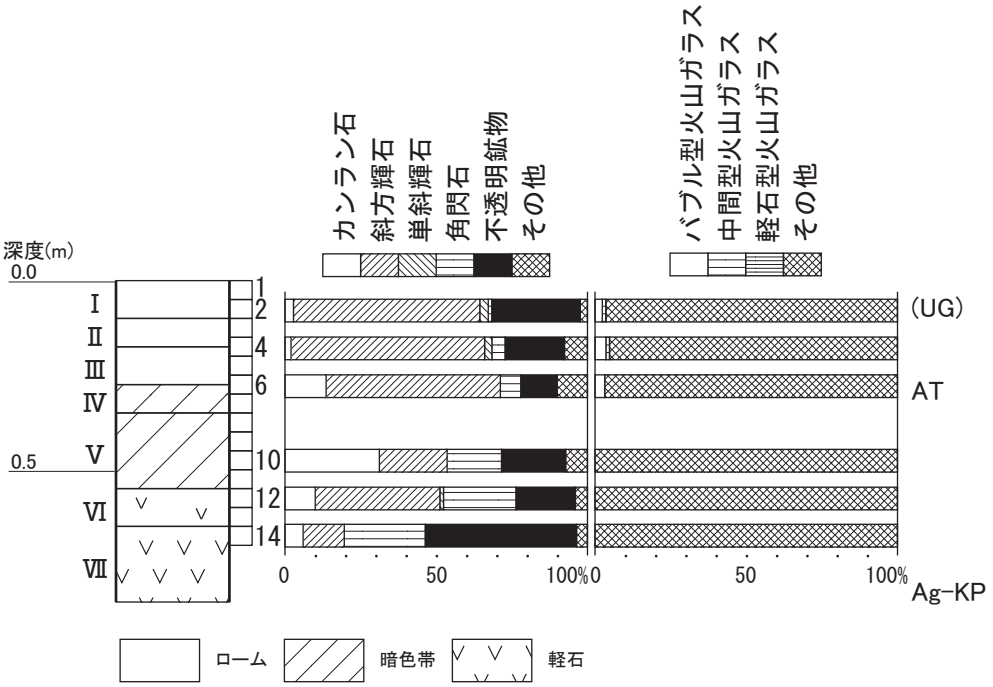


図2　SS-2基本土層サンプルの重鉱物組成および火山ガラス比

4　考察

大谷川遺跡の位置する台地は、涸沼の南東沿岸に分布する中位段丘群に区分されており、南関東の武蔵野面群に対比されている（貝塚ほか編 ,2000）。特に涸沼南東沿岸の台地は、那珂川沿岸に分布する中位段丘の最高位の上市段丘と同時期とされている（坂本 ,1975）。上市段丘の形成年代は酸素同位体ステージの 5a と考えられているから（貝塚ほか編 ,2000）、大谷川遺跡の位置する涸沼南東沿岸の台地も約８万年前の形成年代が考えられる。さらに分析対象とされた調査区のローム層断面では、Ag-KP の降下堆積層が確認されていることから、分析対象とされたローム層は、南関東における立川ローム層にほぼ対比される。

分析では、火山ガラス比においてⅠ層からⅣ層上部の層位に少量ながらもバブル型火山ガラスが検出されている。この火山ガラスは、その形態的特徴と立川ローム層の中～上部付近という検出層位から、姶良 Tn テフラ（AT: 町田・新井 ,1976）に由来すると考えられる。今回の分析結果は、AT に由来する火山ガラスがローム層形成時に少量ずつ混ざり込んで撹乱した状況を示唆するが、一般に土壌中に特定テフラが混交して産出する場合はテフラ最濃集部の下限がそのテフラの降灰層準にほぼ一致すると言われている（早津 ,1988）。しかし、今回の結果から最濃集部を見出すことは難しい。Ⅴ層以下には火山ガラスは極めて微量しか含まれないことを考慮すれば、AT の降灰層準は概ねⅣ層付近にあることが推定される。なお、群馬県から栃木県および茨城県北部における立川ローム層相当のローム層には、その中部付近に暗色帯の認められることが多い（新井 ,1962）。AT の発見以後は、その暗色帯の最上部には AT の降灰層準が推定されることも知られている。したがって、本地点のローム層のⅣ層とⅤ層に認められた暗色帯も、北関東に広く認められる暗色帯にほぼ対比される。

Ⅰ層からⅢ層上部までの層位には、微量ではあるが中間型火山ガラスも認められている。火山ガラスの形態と AT よりも上位に産出することなどから、中間型火山ガラスは立川ローム層上部ガラス質テフラ（UG: 山崎 ,1978）に由来する可能性がある。ただし、今回の分析結果からその降灰層準を推定することは難しい。

これまでに茨城県北部の台地上に形成された立川ローム層相当のローム層の分析事例では、AT と Ag-KP に挟まれるローム層の層位にカンラン石の多く含まれる重鉱物組成が認められることが多い。今回の分析のⅤ層の重鉱物組成もそれに相当すると考えられる。今後、周辺地域とのローム層の対比を行う場合には、このカンラン石の多い重鉱物組成も対比の指標になり得ると考えられる。

引用文献

新井房夫 ,1962, 関東盆地北西部地域の第四紀編年 . 群馬大学紀要自然科学編 ,10,1-79.

Bronk, R. C.,2009,Bayesian analysis of radiocarbon dates. Radiocarbon,51,337-360.

林　昭三 ,1991, 日本産木材顕微鏡写真集 . 京都大学木質科学研究所 .

早津賢二 ,1988, テフラおよびテフラ性土壌の堆積機構とテフロクロノロジー -AT にまつわる議論に関係して -. 考古学研究 ,34,18-32.

伊東隆夫 ,1995, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ . 木材研究・資料 ,31, 京都大学木質科学研究所 ,81-181.

伊東隆夫 ,1996, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ . 木材研究・資料 ,32, 京都大学木質科学研究所 .66-176.

伊東隆夫 ,1997, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ . 木材研究・資料 ,33, 京都大学木質科学研究所 ,83-201.

伊東隆夫 ,1998, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ . 木材研究・資料 ,34, 京都大学木質科学研究所 ,30-166.

伊東隆夫 ,1999, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ . 木材研究・資料 ,35, 京都大学木質科学研究所 ,47-216.

伊東隆夫・山田昌久 (編),2012, 木の考古学　出土木製品用材データベース . 海青社 ,449p.

貝塚爽平・小池一之・遠藤邦彦・山崎晴雄・鈴木毅彦編 ,2000, 日本の地形 4　関東・伊豆小笠原. 東京大学出版会 ,349p.

町田　洋・新井房夫 ,1976, 広域に分布する火山灰－姶良 Tn 火山灰の発見とその意義－ . 科学 ,46,339-347.

町田　洋・新井房夫 ,2003, 新編　火山灰アトラス . 東京大学出版会 ,336p.

Reimer P., Austin W., Bard E., Bayliss A., Blackwell P., Bronk Ramsey, C., Butzin M., Cheng H., Edwards R., Friedrich M., Grootes P., Guilderson T., Hajdas I., Heaton T., Hogg A., Hughen K., Kromer B., Manning S., Muscheler R., Palmer J., Pearson C., van der Plicht J., Reimer R., Richards D., Scott E., Southon, J. Turney, C. Wacker, L. Adolphi, F. Buentgen U., Capano M., Fahrni S., Fogtmann-Schulz A., Friedrich R., Koehler P., Kudsk S., Miyake F., Olsen J., Reinig F., Sakamoto M., Sookdeo A., & Talamo S.,2020, The IntCal20 Northern Hemisphere radiocarbon age calibration curve (0–55 cal kBP). Radiocarbon, 62,1-33..

Richter H.G.,Grosser D.,Heinz I. and Gasson P.E.（編）,2006, 針葉樹材の識別　IAWA による光学顕微鏡的特徴リスト . 伊東隆夫・藤井智之・佐野雄三・安部　久・内海泰弘（日本語版監修）, 海青社 ,70p.［Richter H.G.,Grosser D.,Heinz I. and Gasson P.E.(2004) IAWA List of Microscopic Features for Softwood Identification］.

坂本　亨 ,1975, 磯浜地域の地質 . 地域地質研究報告 (5 万分の 1 図幅), 地質調査所 ,55p.

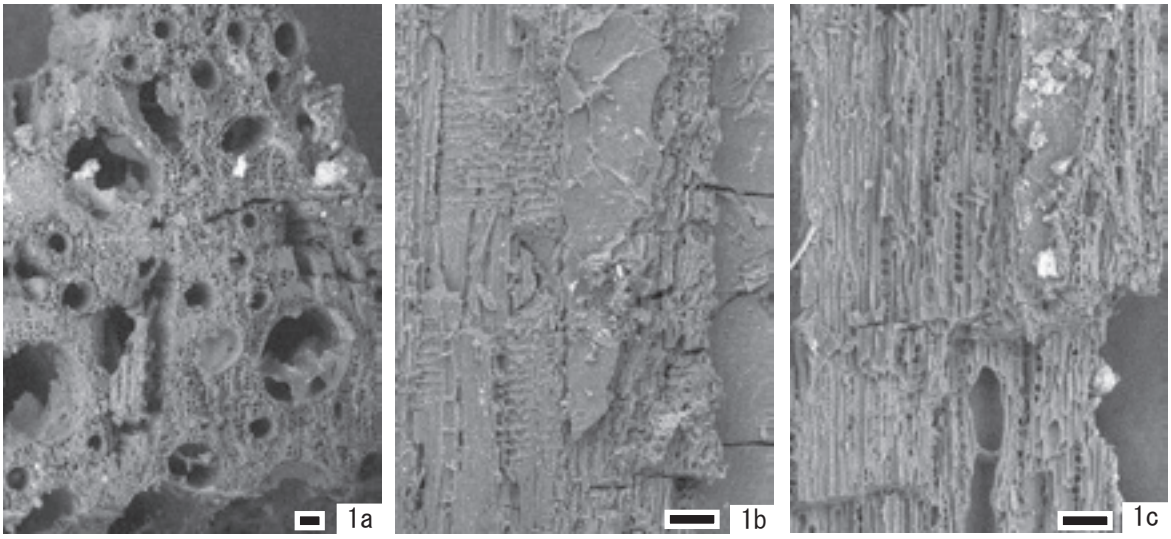
島地　謙・伊東隆夫 ,1982, 図説木材組織 . 地球社 ,176p.

Stuiver, M., and Polach, H. A.,1977,Discussion Reporting of 14C Data. Radiocarbon ,19, 355-363.

Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E.（編）,1998, 広葉樹材の識別　IAWA による光学顕微鏡的特徴リスト . 伊東隆夫・藤井智之・佐伯　浩（日本語版監修）, 海青社 ,122p.［Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E. (1989) IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification］.

山崎晴雄 ,1978, 立川断層とその第四紀後期の運動 . 第四紀研究 ,16,231-246

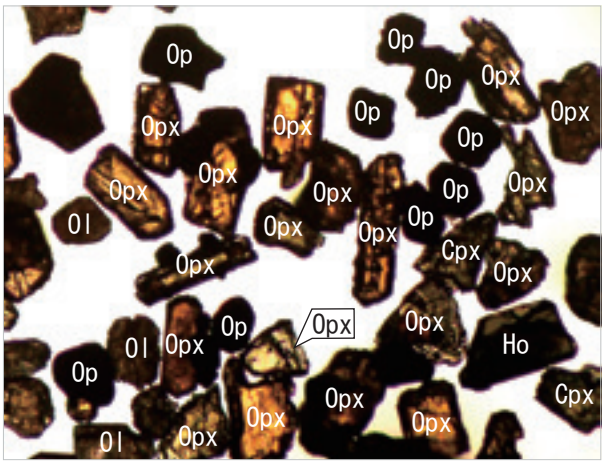
図版１　炭化材



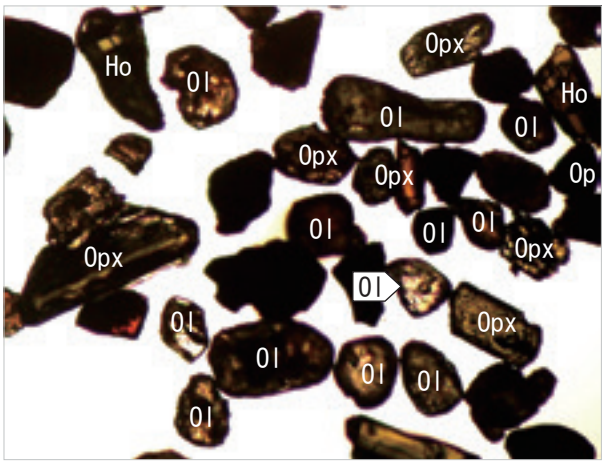
1. クリ (SI-2;No. 2)

a:木口　b:柾目　c:板目
スケールは100μm

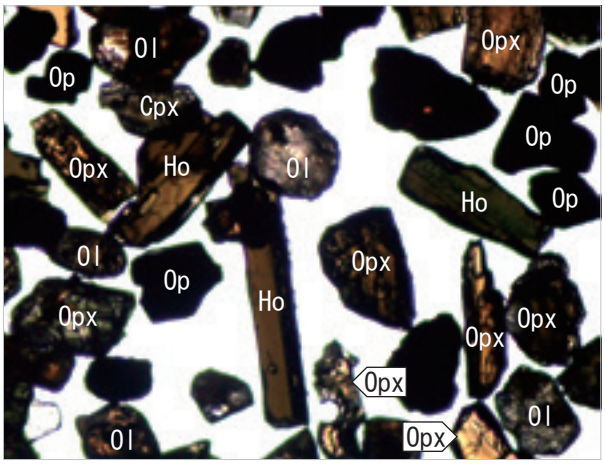
図版２　重鉱物・火山ガラス



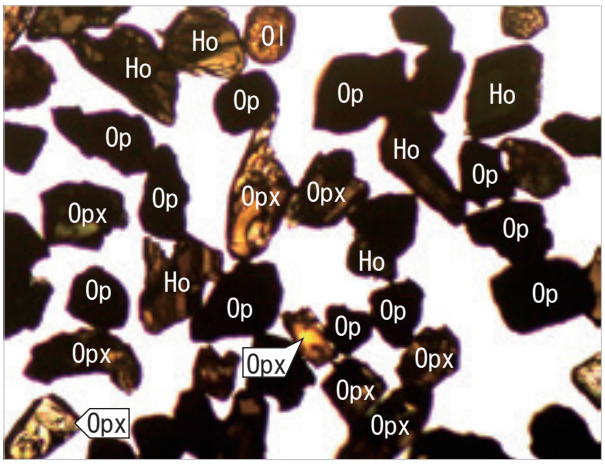
1. 重鉱物(SS-2基本土層Ⅰ層;②)



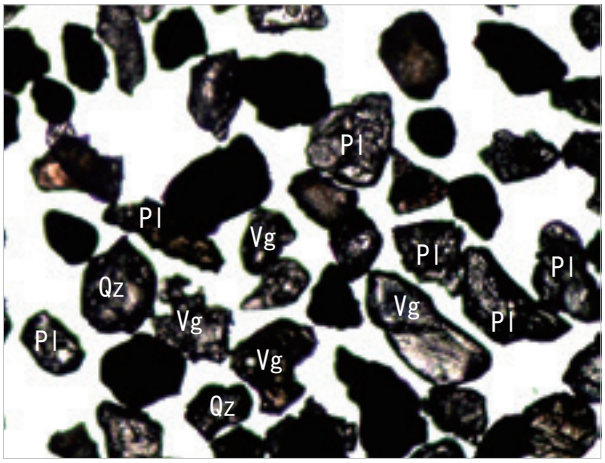
2. 重鉱物(SS-2基本土層Ⅴ層;⑩)



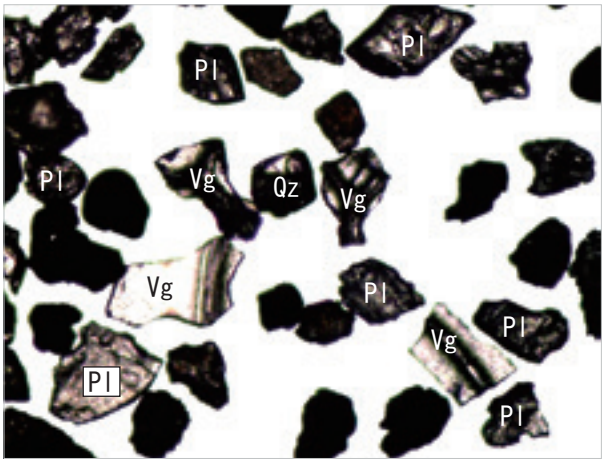
3. 重鉱物(SS-2基本土層Ⅵ層;⑫)



4. 重鉱物(SS-2基本土層Ⅶ層;⑭)



5. UGの火山ガラス(SS-2基本土層Ⅰ層;②)



6. ATの火山ガラス(SS-2基本土層Ⅲ層;④)

Ol:カンラン石. Opx:直方輝石. Cpx:単斜輝石. Ho:角閃石. Op:不透明鉱物.
Vg:火山ガラス. Qz:石英. Pl:斜長石.

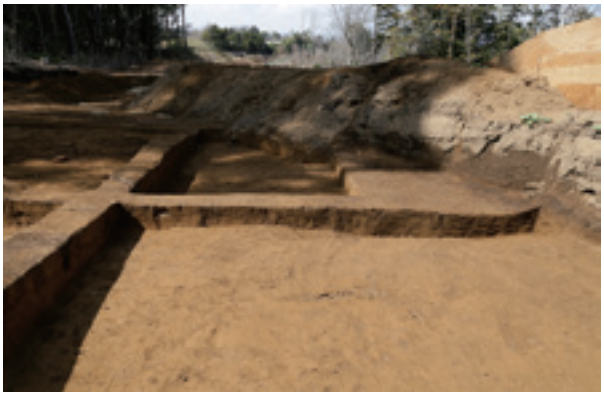
0.5mm

写　真　図　版

遺跡遠景（南東から）

遺跡全景

基本層序



第１号石器集中地点　土層断面

第２号石器集中地点　土層断面

第２号石器集中地点　遺物出土状況

第１号陥し穴

第１号竪穴建物跡　遺物出土状況

第１号竪穴建物跡

第２号竪穴建物跡　遺物出土状況（1）

第２号竪穴建物跡　遺物出土状況（2）

第２号竪穴建物跡

第３号竪穴建物跡　遺物出土状況（1）

第３号竪穴建物跡　遺物出土状況（2）

第３号竪穴建物跡

第４号竪穴建物跡

第１号竪穴遺構

第30号土坑　遺物出土状況

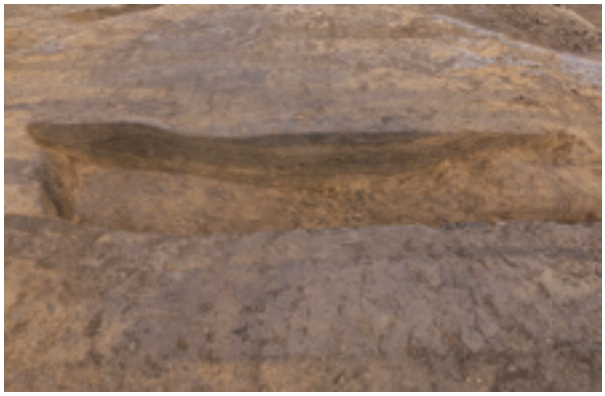
第30号土坑

第34号土坑

第37号土坑　遺物出土状況

第１号溝跡

第４号墳（北から）



第４号墳　周溝土層断面（Aライン）

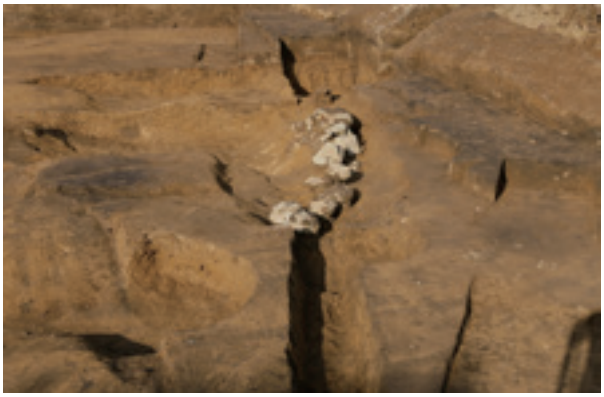
第４号墳　周溝土層断面（Bライン）

第５号墳　墳丘土層断面（Bライン）

第５号墳（西から）

第５号墳　周溝土層断面（Aライン）

第５号墳　周溝土層断面（Bライン）



第５号墳　石室

第５号墳　石室掘方

PL6

第１・２号石器集中地点出土遺物

第２号石器集中地点出土遺物

第２号石器集中地点、第１・２号竪穴建物跡出土遺物

SI 2-9

SI 2-11

SI 2-18

SI 2-6

SI 2-10

SI 2-8

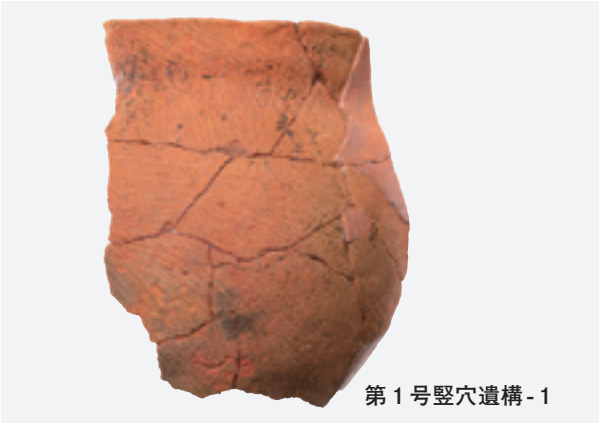
SI 2-16

SI 2-13

SI 2-14

第２号竪穴建物跡出土遺物

第２・３号竪穴建物跡出土遺物


第１号竪穴遺構-１

SK30-6

SK30-1

SK30-2

SK30-4

SK30-3

SK30-5

SK37-1

第１号竪穴遺構、第30・37号土坑出土遺物

第５号墳、遺構外出土遺物

抄　　録

ふりがな	おおやがわいせき　てんじんやまこふんぐん
書　　名	大谷川遺跡　天神山古墳群
副　書　名	主要地方道大洗友部線バイパス整備事業地内埋蔵文化財調査報告書２
シリーズ名	茨城県教育財団文化財調査報告第473集
著　者　名	池田晃一
編集機関	公益財団法人茨城県教育財団
発　行　日	2024（令和６）年３月19日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード	北緯	東経	標高	調査期間	調査面積	調査原因
大谷川遺跡	茨城県鉾田市箕輪字大谷川1684番地２ほか	08401 － 344	36度 15分 58秒	140度 31分 28秒	20 m	20201001 ～ 20210331	3,279 ㎡	主要地方道大洗友部線バイパス整備事業に伴う事前調査
天神山古墳群		08401 － 006						

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
大谷川遺跡	集落跡	旧石器	石器集中地点　２か所	石器（石核・楔形石器・二次加工のある剥片・微細剥離痕のある剥片・剥片）、礫	
		縄文	陥し穴　１基		
		古墳	竪穴建物跡　４棟 竪穴遺構　１基 土坑　12基	弥生土器（広口壺・壺）、土師器（坏･蓋･器台･高坏･鉢･壺・甕・台坏ﾐﾆﾁｭｱ）、土製品（管状土錘・球状土錘）、石器（磨製石斧･磨石･敲石･砥石）	
	その他	時期不明	土坑　29基 溝跡　２条	縄文土器（深鉢）、弥生土器（壺）、土師器（高坏･壺･甕）、須恵器（坏）、石器（石鏃・剥片）、礫	
天神山古墳群	墓域	古墳	古墳　２基	土師器（坏・壺・甕）、須恵器（瓶･甕）、土製品（丸玉）、金属製品（耳環･不明鉄製品）	

要　　約	古墳時代の竪穴建物跡から出土した土器は、北陸地方など他地域の特徴をもつ土器を含んでおり、前期前葉に位置付けられる。なお、第２号竪穴建物跡は出土した炭化材の年代測定の結果、３世紀代と考えられる。

印　刷　仕　様

編　　集	ＯＳ	Microsoft Windows 10 Pro
	編集	Adobe InDesign 2023
	図版作成	Adobe Illustrator 2023
	写真調整	Adobe Photoshop 2023
	Scanning	EPSON DS－G20000
使用Font	OpenType	リュウミンPro L－KL、太ゴB101 Pro Bold
		中ゴシックBBB Pro Medium
写　　真	線数	カラー210線以上
印　　刷	印刷所へは、Adobe InDesign 2023 でデータ入稿	

茨城県教育財団文化財調査報告第473集

鉾田市

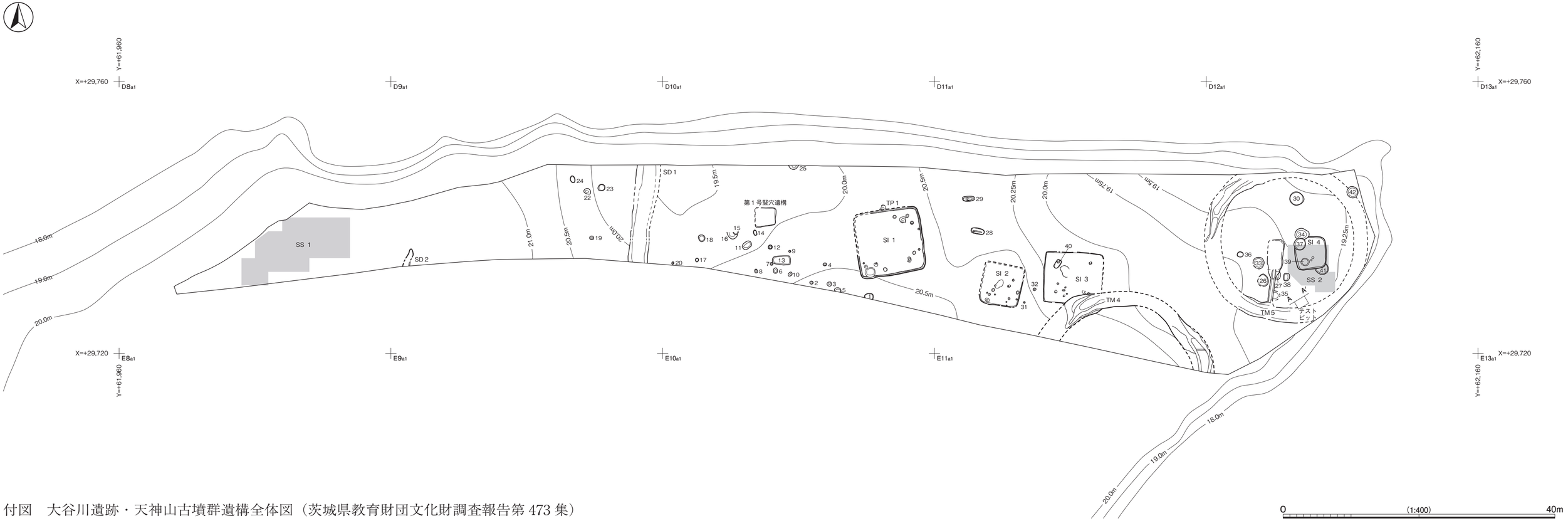
大　谷　川　遺　跡
天　神　山　古　墳　群

主要地方道大洗友部線バイパス整備
事業地内埋蔵文化財調査報告書２

令和６（2024）年３月19日　発行

発行　公益財団法人茨城県教育財団
〒310－0911　水戸市見和１丁目356番地の２
茨城県水戸生涯学習センター分館内
TEL　029－225－6587
ＨＰ　https：//www.ibaraki-maibun.org

印刷　八幡印刷株式会社
〒310－0911　水戸市見和３丁目1528－38
リバーガーデン106号
TEL　029－253－6951



付図　大谷川遺跡・天神山古墳群遺構全体図（茨城県教育財団文化財調査報告第 473 集）